第四部　編集出版活動

一九三七年三月、「満洲国」の首都、新京（長春）で『明明』が創刊され、「満人」文学は発表の舞台を新聞文芸欄に頼っていた状況から脱することができた。『明明』停刊後には、事務会『藝文志』が創刊された他、四〇年に結成された文叢刊行会が単行本を刊行し始める。他方、奉天では、三九年に文選刊行会が雑誌『文選』を、四〇年には作風刊行会が雑誌『作風』を創刊。さらに四一年、学芸刊行会が雑誌『学藝』を創刊する。こうして、四〇年前後は、「満洲国」文壇の活動が最も盛んな時期となった。

ただし、『明明』を除くと、いずれの雑誌も三輯以上続くことはなく、「満語」文芸誌もしばらく存在しなかった。文壇は間もなく沈静化してしまい、作家たちは再び新聞文芸欄を主な発表の場とするようになって行く。この状態は、四三年一一月に聯盟『藝文志』が創刊されるまで続いた。

第四部では、総合雑誌『明明』、芸文志事務会と事務会『藝文志』およびその関係出版物、芸文書房、聯盟『藝文志』について考察する。ここでは、主に各雑誌の創刊経緯とそれぞれの性格、掲載内容の特徴について検討し、古丁らの文学活動とその変化、文学活動と行政との関係の変化、これらの雑誌が満洲文壇に与えた影響などを整理する。構成は、第一章　『明明』と「城島文庫」、第二章　芸文志事務会とその出版活動、第三章　聯盟『藝文志』、そして補論として、芸文書房から出版された書籍や、「芸文志派」関係出版物についての考察を添える。

第一章　『明明』と「城島文庫」

『明明』――月刊満洲の城島氏が多大の犠牲を拂つて發行する滿語の文藝雜誌、滿洲唯一の滿人文學運動の機関誌である。この程休刊したのは惜しんでも足りない[1]。

これは三九年に出版された『新京案内』のうち、文化団体紹介欄での『明明』についての記述である。「滿洲唯一の滿人文學運動の機関誌」として、「休刊したのは惜しんでも足りない」という言葉から、この雑誌が在満日本人の間でもかなり注目されていたことがわかる。

『明明』は、第一巻が六期[2]、第二巻が五期、第三巻が六期、そして三八年九月号と、合わせて十八冊が刊行された。総合雑誌として創刊されたが、第一巻第六期から文芸雑誌に切り替えられた。現在、バックナンバーを揃えるのは不可能であるが、ここでは、筆者の確認した十二冊に限って、創刊までの経緯、総合雑誌としての性格、第五期から文芸雑誌に切り替わる過程について見てゆきたい。

第一節　創刊の経緯

こんど、ある有力者の從慂と滿人中堅層の熱援を得て、年來の宿願だった滿文大衆雜誌『明明滿洲』を、來る三月滿洲建國五周年記念日を卜して創刊することにした。

内容は大體、月刊滿洲を滿文で行くやうなもので、滿人大衆から眞に『われらの雜誌』として愛讀されるもの（今のところ、そんなものは廣い滿洲に一つもない。）をと念じてゐる。菊版六四頁・口繪四頁・二十錢賣り。最初から思ひ切つて一萬部刷つて、宣傳のため全滿にバラ撒くつもりである。

主幹兼編集長として、舊い同志で私の最も尊敬する前開原公學校（滿鐵經營の滿人初等學校）校長稲川淺二郎氏を迎えた。石田三成が島左近を招聘したやうなもので恐縮だが、この事業に氏の參加を得たことは、既に九分通りの成功を意味するものと喜んでゐる。[3]

以上は『明明』の発行元、月刊満洲社社長城島舟礼による『明明滿洲』の創刊予告で、三七年二月の『月刊滿洲』の編集後記にあたる「身邊雜記」に入っている。この文章から、新雜誌について以下のことがわかる。①新雜誌の名は『明明滿洲』で、内容は『月刊滿洲』とほぼ同じである。そして、出版宣伝が大々的に行われた。②新雜誌出版のきっかけは、「有力者の從慂と滿人中堅層の熱援」である。③主幹兼編集長を稲川淺二郎が務めた。

さて、ここで言う「有力者」とは誰のことを指しているのか。城島の「身邊雜記」には、関東軍新聞班の柴野少佐と参謀石原莞爾の名が出ていて、城島は「民族協和」の方針を掲げる石原莞爾と交渉があったと見られる[4]。「有力者」を石原莞爾と特定できなくとも、関東軍内部の人物であったことは間違いないであろう。「満人」青年の愛読する雜誌が皆無だったので城島に創刊を勧めたと思われるが、「月刊滿洲の滿文版」のようなものであるなら、娯楽のための大衆雜誌が想定されたはずである。

劉遲の回想録によれば、古丁らに声をかけたのは、総務庁統計処の事務官の韓崑津であった[5]。韓崑津は、古丁と外文の公学堂時代の恩師であり、その元同僚の稲川淺二郎、別名稲川朝二路も新雜誌創刊に関わった。稲川は、満洲に長く滞在し、漢語に堪能で、中国の事情に詳しい知識人である。城島の言う「満人中堅層」とは、おそらく『明明』創刊に関わった、韓崑津・古丁・外文・疑遲、そして韓の友人の劉健璞らのことであろう。

城島の文章では、新雜誌のタイトルは『明明滿洲』となっているが、実はそのタイトルについては、編集部の中で長く話し合いが行われていた。

漢語雑誌編集の手伝いを持ちかけられた古丁、陳松齢（辛嘉）、劉健璞らは、経費がかからずに作品発表の場が得られると、この絶好のチャンスに興奮する。しかし、ガーデニングを趣味とし、梁啓超の「飲氷室全集」を愛読する劉健璞は、新文学を発展させようとする古丁らとあまり意見が合わなかったようである。新しい雑誌の内容について議論した際、外文は、三二年上海事変の直前に上海で読んだ、商務印書館発行の『東方雑誌』[6]にいくつか良い文章を発見し、とても勉強になったと言った。それに対して、劉は、次のように返答している。

過激な言論は何にもならない、時代も環境も変わったのだから。意気軒昂になるのはもはや時代遅れだ。今我々はこれから編集しようとするこの雑誌について考えなければならないのだ。[7]

つまり、劉健璞は、新雑誌には政治や反日に関する言論は一切載せないつもりであったと思われる。それが、「満人」側の合意となっていたのであろう。そこで、新雑誌にどのようなタイトルを付け、いかなる内容にするか、編集部のメンバーがそれぞれ意見を出し合った。まず、タイトルについて、稲川は『楽土満洲』を提案する。ところが、

笑迷先生（韓崑津のことと思われる――引用者注）は、その時賛成の意を表さなかったし、私も賛成と言わなかった。そして皆が雑誌名を考えた。駱駝、緑洲、砂漠、珊瑚……彼（稲川先生――引用者注）は賛成と言わなかった。なぜなら、そのぐらいの詩的なタイトルは彼だってたくさん考え出せるからだ。[8]

というように、なかなか決着がつかなかった。次に雑誌の内容については、以下のようなやり取りが交わされている。

彼（稲川）はポケットから一枚の紙を取り出した。そこには創刊号の目次が書かれている。大臣訪問記、職業婦人訪問記、恋愛新講、東洋の媚薬、花街探険……文芸は一本もない。我々の意見とは、明らかにかけ離れている。[9]

『月刊滿洲』は、満洲についての様々なことを紹介する、主に日本人男性向けの雑誌で、その内容の多くは「大陸猟奇」と遊びの欲求を満たすものであった。仮に新しい雑誌が、城島舟礼の言う通り『月刊滿洲』の満語版であったなら、稲川の提言そのままの内容となったであろう。彼らは、日本人が興味を持っていることには「満人」もきっと関心を寄せるだろうと想像していたのであ

る。しかし、古丁らはそのような内容に反対した。ここに、在満日本人である城島・稲川と、「満人」青年らとの考え方の違いがうかがえる。

その後、ほとんど毎日顔を合わせるようになった。議論している問題は、「楽土」と「砂漠」、「春薬」と「文芸」についてに他ならない。論争が三カ月も続いたあげく、（新雑誌は）ようやく誕生した。『明明』である。[10]

結局、双方の意見は、「大学之道、在明明徳」という儒教の古典『大学』の一句から取った、「明明」で折り合った。内容については、「稲川先生はようやく、満洲の青年は媚薬より強心剤を必要とし、花街を探険するより貧民窟を描きたいのだということをわかってくれた」[11]と言う。

稲川と古丁らのやり取りから、ある事実がわかる。それは、満洲に長く滞在し漢語に堪能で、公学堂で「満人」の子どもたちを対象に教育活動を行ってきた稲川でさえ、満人青年が何を必要としているかを理解していなかったということである。毎日のように「満人」に触れてはいたが、ほとんどが子どもたちやその父兄であったせいであろう。実際に彼らの生活と思想の中には、「満人」の知性の向上を願う知識青年は不在であった。長期滞在の日本人でもこのような状態なのだから、短期滞在で漢語も知らない人びとは、「満人」の知識層のことなど尚更知るよしもなかったであろう。満洲にいた日本人は、いくら漢語が上達し漢文化に詳しくなろうと、「満人」の生活の実状や精神状態についてはほとんど何の知識も持たず、積極的に知ろうともしなかったと思われる。それが、「王道楽土」「民族協和」というスローガンに隠された民族関係の実態なのである。

漢語雑誌『明明』をいかなる内容にするかについては、奉天特務機関長の協力により、在奉諸機関の主脳および中堅代表者（主に「満人」）ら二十余人が参加する座談会を持ち、広く意見を聴いた。城島はその時の感想を次のように述べている。

従来官邊その他で發行されるパンフレットや雑誌が、彼等の氣持に投じないのみか、往々にして反感をさへ買つてゐた理由を明瞭に知り得たと同時に、彼等の立場や思想を解しない日本人の獨善的考への間違つてゐたことを、熟々感じたことである。[12]

「満人」知識層の知的欲求に配慮しない日本人の「独善的考へ」を城島が反省したからこそ、後の『明明』があるのではないかと考えられる。

このように盛大な宣伝と周到な準備によって、『明明』創刊号は世に送り出された。その創刊号を現在手に入れることはできないが、劉遅（疑遅）の回想によれば、目次には、乃木大将や旅順戦役の物語、五年前の建国当初の話、満洲の遺跡、結核などの治療に関する衛生知識等と並んで、日本文化や日本語についての紹介もあった。文学作品も結局掲載されることになり、古丁の「又一年」（「変金」）や、ゴーリキー著・疑遅訳「書」などが発表されたと言う[13]。当初想定されていた大衆娯楽雑誌化への道は塞がれたことになる。

『明明』の実際の編集事務は、陳松齢（辛嘉）と、その後に参加した趙孟原（小松）に任されていた。

第二節　総合雑誌としての『明明』

数々の議論を重ねた結果、三七年三月に、『明明』の創刊号がようやく刊行された。第二期の奥付によると、発行人は城島徳壽（城島舟礼）、発行元は月刊満洲社、編集人は稲川淺二郎ではなく佐久間幸吉となっている。これは事実上の最終号となる三八年九月号まで変わらなかった。

『明明』は総合雑誌として創刊され、五期まで刊行されている。第二期と第三期には巻頭言と編集後記が付いている。白話文で書かれた編集後記には、朝二路の署名があるが、文言文（当時の中国語文語）で書かれた巻頭言の作者は不明である。編集部の構成を見ると、おそらく梁啓超（文言文）好きの劉健璞の筆による可能性が高いと考えられる。[14]

総合雑誌としての『明明』の内容はバラエティに富んでいる。大まかに分類すれば以下のようになる。

①「明明画報」。人気スターや大日本帝国各地の景色、モダン版画や漫画。その中には、学校教育や「満洲国」の政策宣伝に関わるものもある。

②政府・政策関係の宣伝や、政治家の伝記が毎号のように掲載されている。国務院総務庁長星野直樹著「我滿洲國之政治動向」（第二期）、国務院秘書官松本益雄著「張總理の私生活」（第二期）、奉天省長葆康著「奉讀回鑾訓民詔書之感想」（第三期）、「日本青年宰相近衛公」（第五期）などはその類である。劉遅の回想によれば、政治関連のものを載せるように指示した人がいたらしく[15]、おそらくそれは『明明』創刊に関わった「有力者」ではないかと思われる。だが、『明明』はあくまでも民間出版物であるから、編集上ある程度の自由は許されたはずである。

③学問や文化、生物・医療などの自然科学、生活知識が紹介されている。第一巻第二期には、鳥居龍藏「人類の祖先は何か」、寺田文次郎「神秘的な動物界」、内野捨一「恐ろしい狂犬病」「家

庭衛生救急医療法」「小人病の発見と予防」、第一巻第五期には尹紅緑「人工営養法」などの文章がある。日本人の文章の翻訳はもちろん、編集に取り組んでいた古丁らによるものであろう。

④社会問題。平亮「ソ連から脱走した人の話」（第二期）、耀崑「女教員の苦衷」（第三期）、趙馨蓀「我が国の家族制度と現代社会」（第五期）など。さらに第三期には「学生習作」という欄が設けられ、学生の習作が載っている（ただし、三期にのみ掲載）。

⑤新文学の創作。創刊号から掲載されているが、その後、号数に従って分量が次第に増えている。第二期は、小説が古丁「提琴」、滕更（外文）「老張」、疑遅「北荒」の三篇、詩が百霊・外文他の作品六篇、文芸評論が徐匆（古丁）と張孝直の二篇である。第五期になると、二つの懸賞当選論文の他、ほとんどが文芸もので占められている。

このように、『明明』は、当初城島舟礼が予告した『明明滿洲』とはずいぶん違った内容のものになっている。何と言っても、媚薬や花街などに関する文章に見られるような猟奇性や娯楽性はない。その代わりに、知識の紹介や創作文芸によって、その総合性と啓発性が色濃く出ている。

『明明』第二期以降には、懸賞募集の記事が掲載されている。第一題「満洲新文学の踪跡」、一等当選賞金五一〇元、第二題「学生生活素描」、一等当選賞金五元、そして、第三期の懸賞募集のテーマは「白話と文言」、当選賞金は「薄酬」となっている。なお、第三期には「懸賞徴文」当選作品が発表されている。第一のテーマ「我が国の家族制度と現代社会」の一等当選者は趙馨蓀で、賞金一〇元、もう一つのテーマ「職業婦女之不平鳴」の一等当選者は曼曼で、賞金五元であった。

これらの懸賞募集は雑誌の販売戦略の一つだったと思われるが、そのテーマから、編集者の関心が、満洲の新文学や、文言文、白話文から、家族制度、学生生活、職業婦人の生活などの社会問題まで多岐に渡っていたことがわかる。また、賞金額を見ると、中でも彼らの最も高い関心が満洲の新文学にあったことは明白である。

> 満洲の新文学は、独特の歴史的プロセスを辿ってきた。我々は満洲の新文学史は決して一枚の白い紙切れではないと信じている。ただ、それをまとめて記録に残す人がいないだけだ。（執筆の要件として）まず豊富な資料を参照しなければならない。次に、史実を歪曲してはいけない。また、このテーマについて一家言をなしていなければならない。[16]

古丁をはじめとする若き文学愛好者たちは、懸賞募集を通して、満洲の新文学運動の歴史を把握しようとした。その歴史の浅

さは、彼らのその後の新文学提唱につながり、「満洲国」の文学構築のために外国文学の翻訳の必要性を訴える根拠ともなった。

「我が国の家族制度と現代社会」をテーマとする論文募集記事はおそらく創刊号に掲載されたと思われるが、当選作である趙馨蓀[17]「我が国の家族制度と現代社会」は全六章・二万字余りの力作で、『明明』第一巻第三期から第五期まで連載されている。本文では「満人」の大家族制度の形成、歴史、現状と、その長所短所を細かく分析し、大家族制度は現状の経済発展にもはや適応できないと指摘する。そして、大家族制度のうち、改革すべき項目と排除すべき項目についてそれぞれ検討している。

中国の近代文学史には、巴金の小説をはじめとして、伝統的大家族制度と闘う青年像が頻繁に登場する。趙馨蓀の論文は、大家族の時代遅れの一面を明らかにし、青年の苦しみの根源を理論的に解明したものであった。その後、古丁の「原野」や「平沙」、爵青の「蕩兒歸來」や「麦」など、満洲の大家族制度に抑圧される青年の苦しみを訴える作品が多く書かれるようになる。大家族制は生産性が低く、近代国家を目指す「満洲国」建設の障害物ともなっていたため、「満洲国」政府も大家族制度の解体を希望していた。

なお、趙の論文では、序章にあたる「前文」の中で、「満人」の概念の範囲を満洲土着民族（旗人）、後に移住してきた民族、および漢満両民族が通婚して生まれた混合種族[18]、すなわち、満洲に住んでいる民族の総称と規定している。

さて、もう一つ触れるべきテーマは、「白話と文言」である。そのテーマの解題には次のようにある。

> 我が国の文化を日々発展させようとすれば、新聞、雑誌、および教科書や布告などに白話を使ったほうが良いか、あるいは文言を使ったほうが良いか。これは満洲国の文化工作を促進するにあたって、重要かつ大きな問題だと言わざるを得ない。[19]

中国では五四運動以来、文言文を排除し、白話文を提唱してきたが、満洲では、文言文を手放さない知識人が多かったので、政府の公文書や重大布告は文言で書かれ、文言文と白話文が並存する刊行物もあった（例えば、雑誌『満洲青年』文教部礼賓司編、一九三七年五月）。当時の満洲文壇でも、章回体の旧文芸が流行していて、革新的な白話文学の影響力はまだ弱かった。新文学を発展させるためには、まず白話文の普及が前提となる。そのようなことを背景に、白話文と文言文に関する文章の募集が行われたと思われる。喜ばしいことに、応募論文のほとんどが白話文の長所を認め、白話の使用を支持している。一方、実生活の中では文言文が使用されていたにもかかわらず、それを主張する論文はなく、

編集者は議論にならなかったことをやや残念に思っていたようである。

しかし、本誌は、満洲での新問題に対応する態度でこの問題を検討するべきだと考えている。我々は同様の熱意をもって文言の使用を主張する意見を待っている。[20]

我々は、「無声（沈黙）」の人はそのまま「無声」し続けてもいいと思うが、心の中でよく検討してほしい。[21]

編集部は、文言文を手放したくはないものの、沈黙を守っている人たちに反省を促し、意見が出てくるのを待ったが、意外にも『明明』の呼びかけに応じる人はいなかった。この一件からも、旧文芸に挑戦し、それと闘おうとする『明明』の精神性がうかがえる。

結局のところ、民衆の間には白話が浸透していて、文言文の使用は一部保守的な知識人にとどまっていたことがわかる。したがって、満洲での新文学運動については、読者側の条件はほぼ整っていて、成功するか否かは作者側の努力次第だったと言えよう。

以上のように、『明明』での懸賞募集により、古丁らは「満洲国」の読者の状況や新文学の歴史などについての予備知識を獲得し、これから展開しようとする文学の創作に必要な事前調査と下準備を終えたといえる。

その後、第五期以降は巻頭言が消え、「編輯後記」が「編輯雑記」に変わる。署名は毛利（辛嘉）となっている。このことは、古丁らと考え方が違う劉健璞と稲川朝二路が編集事務から外れ、『明明』の編集が、実務を担ってきた古丁らの手に移ったことを意味する[22]。そして、『明明』の性格と方針について、古丁らは主幹の稲川朝二路に相談してその賛同を得ている[23]。『明明』は古丁らの定めた方向に進むこととなり、第六期は「創作特輯」として、文芸専門誌に切り替えられた。

第三節　文芸雑誌としての『明明』

第一巻第六期は予定通りの創作特輯となり、『明明』はこの号から三八年九月号まで、「満洲国」で唯一の漢語文芸雑誌として文壇に君臨することになる。

第一巻第六期の表紙を飾ったのは、作者不明の木版画「筏」である（本書口絵参照）。画面では、一人の労働者がハンマーを揮って筏を作っていて、川を渡るための準備をしている様子である。これは、古丁の言う、昨日と明日をつなぐ「橋」と符合している。「我々は一つの『橋』をつくっている。（略）この橋がしっかりしていれば、昨日と明日の渡しになるだろう」[24]。

しかし、『明明』が総合誌から文芸誌へ転身しようとした時、読者からは戸惑いの声が寄せられた。それに対して、編集主幹の朝二路は以下のように答えている。

本誌は無主旨を主旨とする。時には文芸を本位にし、時には学術を本位にし、時には興味を本位にする。ひたすら読者の要求に応え、読者と共同して編集していきたいと心から願っている。[25]

「無主旨を主旨とする」は、「方向なき方向」を意味するであろう。実は、「朝二路」署名の編集後記は、古丁らの筆によるものと考えられる。「無主旨を主旨とする」とは、主旨がまだ定まっていないことを意味する可能性もある。実際、本書第一部で引用した疑遅の回想録にある通り、古丁らは「我々は精神病院を開いて専門に人の魂を助けるんだ。この雑誌はこの方向へ力を入れなければならない」[26]と述べていて、「人の魂を助ける」のが『明明』の方向だったと理解してよい。そしてそれも、『明明』を文芸誌に切り替える一つの理由であった。つまり、人の心や魂を救うことが彼らの文学の目的であり、雑誌を作る目的でもあったと考えられる。

文芸誌としての『明明』の目次を見ると、小説、詩、脚本などの創作に加え、評論や外国文芸の翻訳も盛んに行われている。その他、劇や碁など伝統文化についての紹介も見られ、『明明』の執筆陣の専門は幅広い分野に渡っていたことがわかる。以下、創作、評論、翻訳に分けて、それぞれの特徴を考察する。

一．創作

第一巻第六期の「編輯雑記」には、「『明明』はようやく体裁が整い、明快で、理想に近づいてきた」（『明明』是逐漸地清整，明朗，接近理想了）[27]とある。古丁らは最初から文芸誌を作ろうとしていたのである。

第一巻には、古丁著「提琴」（第二期）・「皮箱」（第三期）・「小巷」（第五期）・「暗」（第六期）、疑遅著「北荒」（第二期）・「山丁花」（第三期）・「雁南飛」（第五期）・「江風」（第六期）、滕更（外文）著「老張」（第二期）、田兵著「T村年暮」（第五期）・「老師的威風」（第六期）、苦土著「皮鞋」（第五期）等が掲載されている。当時の小説は主に短編であったが、次第に、古丁らは短編小説に満足しなくなる。第三巻第一期には「百枚長編」として、古丁「原野」と小松「洪流の陰影」（洪流的陰影）が掲載されている。

百枚小説の創作は満洲文壇初のことで反響を呼んだ。第一部第三章で考察したように、『大同報』「文藝」欄の「批評と紹介の頁」（「批評與紹介專頁」、一九三八年七月一三日）には、蘇克（王

秋蛍）「実らない花―古丁の創作を論ずる」（不結果的花―論古丁的創作）と、半島鵬子「模糊的陰影―洪流の陰影を読んで」（模糊的陰影―讀洪流的陰影（小松））が掲載された。いずれも、「原野」と「洪流の陰影」それぞれの構成、人物描写、技術面などについて批判を展開している。蘇克の「原野」評は、創作技術などの未熟な点に注目したもので、新たな試みの第一歩を踏み出した勇気と意義についてはさして評価していない。これは「郷土文芸」に関する論争の延長線上にある。

『明明』第二巻第四期（一九三八年新年号）に、史之子（古丁）が「夢語り及び痰吐き」（説夢以及唾痰）という文章を寄せ、一九三八年の夢として小説と詩の長編創作について語っている。

> 小説は、量的には少なくとも原稿用紙百枚で、質的にはその主人公が読者に読んで覚えてもらえればよい。詩歌は、量的には少なくとも三百行で、質的には少なくとも哼哼嘰嘰（モグモグ）言わない。[28]

作家はそれぞれの方向を目指し、とにかく長いものを書いて刷って作品を増やせばよいという姿勢である。では、『明明』にはどんな小説が発表されたのか。以下、作家別にそれぞれの作品の特徴を検討する。

疑遅の「北荒」は、建設現場で起きた事故で亡くなった労働者一家の物語である。夫が死んだ後、妻は子どもを連れて実家に帰るが、実家の家族が行方不明となったため、行先を失い途方に暮れる。そして、家に残してきた息子は、匪賊の乱によって家ごと焼かれ、死んでしまう。

小松「夕刊のニュース」（夕刊的消息）は、ある新聞の夕刊に掲載された、暴風雨に飲み込まれた漁船の記事に関する物語である。妻の葬儀費用のため借金を背負った漁師、丁大一は、暴風雨の日でも海に出なければならない。そんなある日、丁大一を乗せた船が巨浪に飲み込まれてしまう。農園で働いていた娘は泣き崩れ、幼い息子は浮浪児となる。

同じ小松の「洪流の陰影」（洪流的陰影）は、ある印刷工場が舞台である。編集部の職員羅華は、工場長が労働者たちを辞めさせるのを止めるために協力してもらおうと、日本人の社長秘書の女性を海辺に誘い出す。しかし、二人の間に口論が起こり、羅華は女性秘書を海に突き落として殺人容疑で逮捕され、労働者たちも解雇される。

以上の他に、子どもを主題に描いた小説もある。蕭牧玲「子どもたちのお正月」（野孩子的正月、第二巻第四期新年号）には、炭坑夫の子どもたちの正月風景が描かれている。子どもたちは爆竹や風船などを買いたいが、父親が職場からまだ帰宅しないため金

がない。母親は大家に家賃の支払いを迫られている。一方、炭坑経営者の子どもたちは立派な家に住み、爆竹で遊んでいる。街に出た彼らは炭坑夫の子どもたちに殴られる。そこで、経営者の家族が、ようやく帰宅した炭坑夫らを糾弾する。ちょうどその時、駅に停車していた貨物列車から石炭を奪った炭坑夫の子どもの一人が、動き出した列車から飛び降りたはずみに、頭を地面に打ちつけて死亡するという事故が起こる。

『明明』各号に発表された小説の内容について逐一述べることはできないが、登場人物は、農民・漁民・労働者・知識人・小市民・子どもなど多彩だが、いずれも苦しんだ末に悲しい結末を迎える点が共通している。その結末に至る要因としては、自然や匪賊による災害、借金や重税、また外国からの廉価商品の輸入による市場の変動などが挙げられる。地主と農民、資本家と労働者の対立によって起こる場合もある。

この時期の満洲文壇ではまた、詩の創作も盛んに行われた。三八年八月、『大同報』「文藝」では「散文と詩特集」（散文與詩専頁）を組み、山丁・呉郎・呉瑛・系己などの詩作を発表している。『明明』にもほぼ毎号、詩や詩関係の文章が掲載された。活躍していた詩人には外文や百霊の他に、苦土、楊葉などがいる。古丁もよく散文詩を発表し、後にそれを単行本『浮沈』として結晶させた。

注目に値するのは長編叙事詩の試みである。第三巻第一期に外文「鋳剣」と百霊「野店」、第三巻第二期に苦土「麥穂下」と森舒朗「収穫」がそれぞれ掲載されている。中でも、外文「鋳剣」は割と反響を呼んだ。呉越故事を題材にしたその詩の中で、呉王は、

麦がなければ／米がなければ／我々は刀、槍を持って／楚や越国に獲りに行こう。[29]

と考え、越国を侵略しようとする。良い剣を手に入れるために、鉄匠の干将と莫邪夫婦に、鉄鉱石を運び、山の大木を切り、剣を作るよう命じる。しかし、いくら錬っても鉄鉱石はなかなか鉄にならない。そこで、妻の莫邪は竈に飛び込んで、自分の血肉をもって鉄鉱石を溶かし銑鉄にする。錬り上がった剣を呉王に献上した干将もまた王に殺される。呉王はその剣をもって越国を征伐する。そして、詩は、次のように凄惨な情景描写で終わる。

必死に逃げるしかない。北風が、凄まじく悲しく唸っている——ああ、これは呉国の覇権を争う前哨、これは呉国の覇権を争う前哨だ。[30]

外文はこの詩の発想を、魯迅の小説「故事新篇」に求めたと思

われるが、内容には若干異なるところがある。史実に則した魯迅の小説では、楚王のために剣を鋳造した干将が、王に殺される前に、妻の莫邪に「息子に復讐させよ」と言いつける。大人になった息子は、神秘的な「黒衣人」に助けられながら王を殺して復讐を遂げる。つまり、小説では主に復讐に焦点が当てられている。

一方、外文は、楚王を呉王に替え、干将夫婦が王の侵略のために剣を作り、やがて、剣の錬成のために女性の莫邪が自らの命を捨てるという、史実とは異なった内容を構想した。いったい外文は何を表現しようとしたのか。

詩が作られたのは三八年二月八日の夜で、日中全面戦争開始から半年が経った頃にあたる。隣国から麦や米を取ろうとする呉王は日本政府を暗示し、その侵略のために剣を作り、命を捨てさせられる干将夫婦は日本国民を指しているのではないか。実際、この詩の発表された一カ月後の四月に『日本国家総動員法』が発布され、日本政府は国民に対し、全力を挙げて対中国侵略戦争に協力するよう要求している。つまり、外文は歴史の故事を借りて、侵略戦争を行っていた日本を批判したと思われる。外文のその意図がよく伝わったためか、この詩については、『大同報』側も珍しく沈黙を守っていた。本詩が掲載された『明明』の編後にあたる「編集室」で、「鋳剣」は次のように評されている。

> 歴史を再評価し、創作する人びとに新しい作家の道を示してくれた。外文君の文字にはまだよほど洗練させなければならないところがあるが、それを別にして、この種の新しい試みは、我々の検討に値すると思われる。[31]

その本来の創作意図に関する言及は避け、歴史的題材の扱い方と、作家の進むべき方向性の新たな提示という面を評価している。

一方、三七年八月に設立された満洲映画協会は、若い作家に映画脚本の創作を依頼した。作家たちも座談会を開いて議論をしたりして、映画に関心を示している。彼らは新しい文学ジャンルにチャレンジするべく、脚本の創作を試みた。『明明』にも映画や劇の脚本、評論が数多く発表されている。

脚本としては、百霊「父親」（放送劇、第三巻第三期）、柳葉「再会」（一幕劇、第三巻第五期）、君頤「地火」（三幕劇、第三巻第八期）、山火「二十年」（一幕劇、第三巻第八期）などが挙げられる。また、映画や劇の評論には、史之子（古丁）「銀星新劇研究社の処女公演を記す」（記銀星新劇研究社的処女公演、第一巻第三期）、D・Q＋孝直「銀星劇社の公演を検討する」（検討銀星劇社底公演、第一巻第三期）、柳浪「映画寸評『十字街頭』」（短評電影・十字街頭、第一巻第五期）、冷某「映画・満映及びその他」（電影・滿映及其他、第二巻第四期）の他、日本の「写実派」映画

監督である島津保次郎著・幾何訳「心的演出について」（関於心的演出、第二巻第三期）等がある。実は、『明明』の執筆者には同時に雑誌『滿洲映画』で活躍していた人が多く、中にはその後、滿洲映画株式会社の監督となった例もある[32]。

二．評論・エッセイ

『明明』のエッセイでは、まず史之子（古丁）の雑文に注目しなければいけない。「文壇について」（閑話文壇、第一巻第三期）、「大作家随話」（大作家隨話、第一巻第五期）、「夢語り及び唾吐き」（説夢以及唾痰、第二巻第四期）等がある。その他に、百霊「一九三八年」（第二巻第四期）、石軍「来年を思ったら」（想到明年、第二巻第四期）等もある。古丁のエッセイ（雑文）は、「大寂寞を突き破り、大荒原を馳せ回る」（衝破大寂寞，馳騁大荒原）[33]勇気に満ち、鋭い調子で闘志の旗を翻している。

これらのエッセイで論じられたテーマは、以下のようにまとめられる。

①新文学の生存空間の獲得と文壇の確立。章回体旧文芸、特にいわゆる「鴛鴦蝴蝶派」と闘い、それを打ち破ろうとしている。徐匆（古丁）「陶明濬教授著『紅楼夢別本』を評す」（評陶明濬教授著紅楼夢別本、第一巻第二期）、史之子（古丁）「文壇の性格を論ずる」（論文壇的性格、第一巻第六期）等がこの類に入る。

②文壇をいかに構築するか、「郷土文芸」に向かうか、あるいは「方向なき方向」かを論じるもの。史之子「大作家随話」（大作家隨話、第一巻第五期）。

③政府と社会への批判。史之子「夢語り及び唾吐き」（説夢以及唾痰、第二巻第四期）、百霊「一九三八年」（第二巻第四期）等が挙げられる。

その中で、③の二つの文章の内容を見ておこう。「夢語り及び唾吐き」では、小説、詩、文芸理論に関する「夢」を述べてから、この年、吉林省が発布した「痰吐き取締規則」に言及している。この規則によれば、痰は必ず痰鉢の中に吐き出さなければならない。痰鉢が用意されていない公共の場所で痰を吐くと、罰金が科せられるという。作者は、日本の「厠（かわや）」から水洗便所への変化を例に、何事も指導せずに禁ずることの弊害を論じている。

「厠」から「便所」、あるいは「水洗便所」へと変わっていく過程には、一般社会における教育のようなものはあったろうが、必ずしも「糞出し取締規則」のようなものがあったわけではないだろう。導くことをしようともせず禁ずるばかりの法学士のやり方も度が過ぎれば、我らのように痰鉢に唾を吐かない人間は苦笑を禁じ得ない。[34]

古丁は、痰吐きの取締りを喩えに、文学分野において禁ずるばかりの政策に不満をこぼしている。にもかかわらず、彼は政府の逆麟に触れないように「方向なき方向」を掲げる。

百霊の「一九三八年」では、一休和尚の「門松は冥土の旅の一里塚」という言葉を引用し、「天下太平！」「今年の雨は良い」「国は太平で人民は安楽」（「天下太平！」「今年雨水好。」「國泰民安」）などと、政情を讃える美辞麗句が並ぶ一方、「石灰の山上に行き倒れ一名」（爐灰山上有路倒一名）という報道記事が挿入される。それによって、「国は太平で人民は安楽」というスローガンが嘘に過ぎないことを皮肉っている。文章の末尾は、ツルゲーネフの「明日は！明日は！と彼は自分を慰めている。しかし、明日には彼を墓へ送り出すのだ」[35]という言葉で結ばれている。この一文も明らかに「満洲国」社会を批判している。

以上のように、批判と闘いの精神に富んだエッセイは、雑誌『明明』に生き生きとした力強いイメージをもたらした。下層民衆の悲惨な生活を描いた暗い小説も、「鋳剣」のような歴史叙事詩も、一様に社会ないし日本を批判している。日中全面戦争開始前後の「満洲国」において、このような批判精神は青年読者に勇気を与えたであろう。それが、雑誌『明明』が歓迎された主な理由と思われる。当時の「満洲国」はまだ戦時統制期ほど厳しい状況にはなく、『明明』は民間資本の雑誌であった。それゆえに、批判の許される隙があったとも言える。『明明』停刊後の満洲では取締りが厳しくなり、批判的な文章は見られなくなる。

『明明』は文芸評論にも力を入れていた。作家や作品についての評論の他、『大同報』「文藝」に載った文章に対する反論もあった。『明明』第三巻第五期には、辛嘉「偽装した『建設的批評家』」（偽装的『建設批評家』）、鳥人「爆発した一束の爆弾」（爆開的群弾）、爵青「城島文庫の刊行について」（関於城島文庫的刊行）、顧影「『熱意』と『忍耐』」（『熱情』與『忍耐』）、莫伽「批評家鋭感」、山火「Amateur 文人」、無名生「城島文庫について」（関於城島文庫）、巴寧「あなたと私の区別」（你我之分）、夷夫「『奮飛』を評す」（評『奮飛』）等が掲載されている。

三．翻訳

芸文志派の翻訳については、第二部第二章第二節で日本・ロシア・西欧・朝鮮の各作品、および魯迅の著作等の概況を紹介したので、ここでは、『明明』に掲載された西欧の作品について見ておこう。

ロシア・欧米作家の翻訳紹介としては、ゴーリキー著・夷夫訳「私の文学修養」（我的文學修養、第三巻第一期）、朝雲訳「夏夜」（第三巻第五期）、S訳「海燕の歌」（海燕曲、第三巻第二期）、莫

伽訳「ゴーリキーの文学論」（戈里基的文學論、第三巻第三期）がある。また、プーシキン著・劉郎訳「冬の朝」（冬晨、第三巻第一期）、滕更訳「エジプトの夜」（埃及之夜、第三巻第二期）、莫伽訳「プーシキン評伝」（普希金評傳、第三巻第六期）なども見られる。他に、莫伽訳「バルザック評伝」（巴爾扎克評傳、第三巻第二期）や洪光友著「アメリカ詩人サンドバーグ」（美國詩人桑德堡、第三巻第一期）等のかなり長い評伝もある。

一九三七年はゴーリキーの一周忌ということで、ゴーリキーとその作品の紹介が目立つ。力強く戦う姿を描いた「海燕の歌」などは、「満洲国」の読者を元気づけたであろう。プーシキンもバルザックもリアリズムの文学者で、作中には社会批判が多く見られる。サンドバーグは社会の底辺で生活した経験を持つ自由詩人で、民衆を熟知し、彼らの日常言語でその内面世界を描いて見せた。このように、『明明』で翻訳紹介された作家は、社会に批判的な革新派、あるいは民衆の気持ちを代弁する庶民派であり、彼らの作品はいずれも生気に溢れ、読者を勇気づけるものであった。外国ものの翻訳紹介も、『明明』が広く愛読されたもう一つの要因である。なお、これらの作品には直接母国語から翻訳されたものもあるが、多くは日本語を介した重訳であった。

『明明』第三巻第二期には、滴岩訳「パールバック自叙伝」（賽珍珠自敘傳）が掲載され、中国で育ったパールバックの中国民衆に対する感情が語られている。当時パールバックの『大地』が話題を呼び、日本でもパールバックの紹介が盛んに行われていた。「満洲国」では『明明』による紹介の他、『大同報』「文藝」に、馬場恒吾著・楊軍訳「『大地』を読んで」（「『大地』讀後感」、一九三八年六月二九日）が掲載されている。そもそも「満洲国」は、関内の中華民国と分断されていて、出版物の往来を許されていなかった。そのため一方では、外国作家の著作を借りて、盧溝橋事変により日本の侵略戦火を浴びている関内同胞に対し、強い関心を表明しようとしたのではないであろうか。

同じく外国人の目から見た中国人の話題としては、ジャック・ロンドンの小説「支那犬」（光友訳「支那狗」、第三巻第二期）も翻訳された。アメリカ西部で働き、差別され、運命に任せて生きる、無知で麻痺した華人労働者と、狡猾で残忍な白人を描いた小説である。日本人支配に対する間接的な批判とも受け取れる。

四.『明明』の収めた成果

最後に、『明明』が収めた成果について、まとめておく。

第一巻第三期に掲載された疑遅の小説「山丁花」に対して、山丁が「郷土文学と『山丁花』」という評論を『明明』第一巻第五期に発表したことをきっかけに、「郷土文芸」に関する論争が長年続

いた（これについては、第一部、第三部ですでに述べたのでここでは省略する）。『明明』は当時、「満洲国」唯一の文学雑誌として文壇に大きな影響を与えたことは疑いない。

『滿洲の文化的躍進の身構へは實に素晴らしい。特にそれを痛切に感じたのは「明明」（註　弊月刊滿洲社發行）と云ふ頗る高級な文學雑誌の存在である。滿洲にはあんな立派な文學雑誌があらうとは夢にも想はなかつた。あれ程の文學雑誌が育つて行ける滿洲國の文化程度、文化環境は素晴らしいものだらうと想像し憧れて居る。百の宣傳よりもこの一冊の「明明」がどのくらゐ優つてゐるかも知れぬ。（略）正直なところ我々は、「明明」を見てから妙に、滿洲に對して親しみを感じて來た。京津地方には「明明」の愛讀者も相當あつて、皆な同じやうなことを云つてゐる』[36]

以上は、月刊満洲社の社員だった明那勇造の文章からの引用である。明那は、北京で文化人を自認する青年の言葉を引用しながら、「満洲国」の対華北文化宣伝において『明明』の果たした役割を紹介している。明那は『明明』を応援し、その将来を支えようとしていたのであろうが、北京の青年が『明明』を読んで満洲に妙に親しみを感じたという、「親しみ」に込められた意味が興味深い。このように『明明』が北京の青年に認められたことは、古丁らにとっては最高の褒め言葉であり、苦労が報われた思いであったろう。これはおそらく、『明明』が収めた予想外の成果だったと思われる。

第四節　「城島文庫」

「満洲国」では、三二年一〇月に蕭軍・蕭紅の短編小説集『跋涉』が出版されて以来、影響力のある新文学の単行本の刊行は皆無に等しかった。そのような満洲文壇において、三八年五月に開始された「城島文庫」刊行は大きな出来事であった。『月刊滿洲』六月号には、城島舟礼「『城島文庫』刊行の辞」と共に、満日文化協会主事の杉村丁甫（杉村勇造）による「城島文庫に寄する」という文章が掲載されている。

杉村はその中で、「『城島文庫』は滿人青年の創作文學の發表機關として新たに生誕した。その間を斡旋する者は雑誌『明明』の同人諸君である」と言い、「この滿文刊行物を、私は在滿の文學に志す日本人諸氏の一讀を特に請い度いと思ふ。そして、その批評を刮目して待つ」と、日本人の「城島文庫」に対する反応を期待する。そして、次のように結んでいる。

この本の體裁は恐らく北京でも上海でも見られない程優れてゐる。私は若き編者陳松齢君の創意に敬服するとともに、滿洲で滿人青年の手でこの様な立派な出版物が現はれたことを、誰よりも喜ぶ一人である。血の新鮮さを感じる。[37]

「立派な出版物」に「血の新鮮さを感じる」と、中国文化に詳しい杉村が「城島文庫」を高く評価している。「體裁」とは本の装丁であり、池辺青李らの絵による表紙は、『明明』の表紙と同じくモダンなデザインである。杉村はその行間に辛嘉（陳松齢）らの努力に対する敬意を滲ませている。

「城島文庫」の発行元が月刊滿洲社であるにもかかわらず、満日文化協会の主事杉村勇造がこれほど熱意を込めた文章を発表しているのには訳がある。北京に留学していた杉村は、元北京清華大学の学生だった辛嘉との個人的な関係を通して「城島文庫」や古丁らの文学活動に関わり、古丁訳『心』の出版の斡旋をはじめ、三九年の芸文志事務会の設立と事務会『藝文志』の創刊を支援していたのである。

ちなみに、『月刊滿洲』第一一巻第七号（一九三八年七月）に掲載された「城島文庫刊行記念会小記」には、記念会当日の写真も添えられている。二列に並んで撮影された写真には、『明明』グループと『大同報』「文藝」欄グループのほぼ全員が揃っている。前列中央に座っているのは杉村勇造で、その右側に古丁、王秋蛍、山丁らが並ぶ。疑遅、小松、爵青、百霊、呉郎らは後列に立っている。この写真には、「城島文庫刊行記念会」を機に、『月刊滿洲』側が古丁と山丁らの対立を仲裁しようとした意図が見える。

一・「城島文庫」刊行の経緯

「城島文庫」刊行の経緯について、古丁は「城島文庫」の第一集『奮飛』の「後記」に以下のように記している。

事は去年に遡る。二、三人が集まると、話題は往々にして本を印刷することに及ぶ。今日まで話し合ってきたが、結局期待はずれに終わり、がっかりした時が多かった。[38]

しかし、ある日、毛利と同じ話題を城島舟礼に持ち出したところ、城島は、

わずか二、三語で城島文庫の刊行を決めた。それほど豪放！さらに氏は、「直ちに印刷しよう」と付け加えた。[39]

古丁は、城島のおかげで「城島文庫」の刊行がすばやく実行に

移されたことに感謝している。また同様に、城島もその「身邊雑記」の中で次のように触れている。

（小説の単行本を）『岩波文庫』の向ふを張つて『城島文庫』にしたいといふ。それは恐縮だ、世間ていもあるから『明明文庫』にしようと云つても、『いや城島文庫だ！』といつてきかぬので、それではさうしてくれと云つて別れたが、私は両君その心情の嬉しさ有難さに感泣した。[40]

城島は謙遜しているが、「岩波文庫」にちなんだ「城島文庫」という名称を光栄に感じていたようである。それは古丁らの作戦だったかもしれないし、それだけ城島に岩波茂雄のような文学出版への尽力を期待していた証かもしれない。

ともかくも、悲願が叶った古丁、辛嘉、小松、疑遅の四人は酒場に集い、「満洲国成立以来で最も楽しい一日だ」（這是滿洲國成立以來最快樂的一天）[41]と叫び喜ぶ。そして、「とりあえず書いて刷る」という言葉を繰り返したという。「城島文庫」の刊行は彼らの「書いて刷る」方針の成果で、満洲文壇の大きな収穫であった。彼らはそれまでの努力が報われたと、達成の喜びを得たのである。

「城島文庫」は、第一集が古丁の短編小説集『奮飛』、第二集は疑遅の短編小説集『花月集』で、以降、第三集—小松著短編小説集『蝙蝠』、第四集—古丁著雑文集（エッセイ集）『一知半解』、第五集—百霊著散文詩集『火光』、第六集—爵青著短編小説集『群像』、第七集—外文著詩集『詩七首』、第八集—石軍著短編小説集『暴風雨』、第九集—孟素著評論集『我的意識』と、月に一冊の勢いで出すと広告欄にはあった[42]。ところが、王秋蛍編『満洲新文学史料』に収録された谷実「満洲新文学年表」によれば、実際には「城島文庫」は第五集『火光』までしか刊行されていない[43]。筆者も『火光』までしか確認できなかった。

『花月集』の他、第五集までの四冊の原本を見ると、『蝙蝠』を除いてはいずれも表紙が剥がれている。口絵は残っていて、左右に三枚ずつの葉を付けた一本の木の下に「池辺畫伯装丁」とある。『蝙蝠』だけを見れば、杉村勇造の言う通り、確かに立派な優れた装丁で、新鮮な趣に満ちている。『蝙蝠』というタイトルは古丁が付けたもので、『火光』の「跋」も古丁の筆による。

『明明』第三巻第一期の一周年記念号に、城島舟礼による「『城島文庫』刊行の辞」の中国語訳が掲載されている。

わが出版界は、貧困にして贅澤である。文化の何たるやに留意することなく、また大衆の要求するものが那邊にありやを理解しようとしない。徒らに大衆をして『文化』を敬遠せ

しめ、文化をして大衆を隔絶せしめた。（略）本社は文化と大衆との距離を短縮する爲め雜誌『明明』を刊行したが、期せずして有識者に推讃せられ、今日の如き微果を収めた。ここに於いて更にこの意を押し弘め『城島文庫』を刊行したものである。（略）斯くの如き大計畫は、單に一出版業者の克く果たし得るものではない。偏に、眞理を愛し實學を好む諸賢の助力を仰ぐ所以である。[44]

以上から、「文化と大衆との距離を短縮する」ことが、『明明』創刊の目的であり、また「城島文庫」刊行の目的でもあったことがわかる。それが出版商としての城島の気持ちであった。刊行の辞の中には、「城島文庫刊行要綱」もある。

一．城島文庫は、文化の各部門に関する著訳を刊行することにより、文化を宣伝し、民衆の智恵を啓発することを目的とする

二．城島文庫は第一部と第二部に分かれる。前者は文学の各部門に関する著訳で、後者は哲学、社会科学、自然科学など文学以外の各文化部門の著訳を指す[45]

「城島文庫」の目的は文化を宣伝し、民衆の智恵を啓発するためで、その内容には、文学の他に社会科学、自然科学などの分野も含まれていた。かなり野心的な出版計画で、真剣に岩波文庫のようなものを目指していた姿勢がうかがえる。さらに、「城島文庫編選委員會規程」があり、その中には「城島文庫支給版税規程」というのもある。

第一条　城島文庫に編入されたすべての著訳作品に、本規程に基づいて版税を支給する

第二条　版税は売り上げの十五から三十パーセントを支給する

第五条　版税は月刊満洲社から支給される[46]

満洲において版税の支払い方法を明記したのは、「城島文庫」が初めてである。続いて、「第八条　再版する場合、初版より版税を増やす」とも決められている。この規程通りであれば、創作から出版までの流れに成熟したシステムができ上がり、満洲文学の発展は軌道に乗っただろう。その上で、職業作家の育成も可能となる。しかし、版税の支払いは、本が売れることを前提にしており、買ってくれる人がいなければ、版税の出処もなくなる。「城島文庫」は売れると期待されていたのかもしれないが、事はそれほどうまく運ばなかったようである。

城島舟礼さんは、目立って有名になりたかった。「城島文庫」の出版には彼の金を一銭も使わず、印刷費は我々自身で支払った。ただその名前を借りて、斡旋してもらったり、保証人になってもらったりしただけのことで、彼は喜んでやったのだ。[47]

と、疑遅は回想している。おそらく資金の問題が、「城島文庫」が計画通りに続かなかった主な理由だったと思われる。

二、「城島文庫」にまつわる議論

「城島文庫」の刊行開始以来、『大同報』では批判の声が絶え間なく響いていた。三八年七月一二、一三日の二日間、「文藝」欄に「批評と紹介特輯」（批評與介紹專頁）が組まれ、蘇克（王秋蛍）「実らない花—古丁の創作を論ずる」（不結果的花—論古丁的創作）、雪笠「『花月集』の検討—本格的な文芸技術の分析」（檢討『花月集』—本格文藝的技術分析）、吳郎「気軽な創作—小松著『蝙蝠』について」（輕鬆的創作—關於小松『蝙蝠』）が発表された。半島鵬子の「模糊なる陰影—『洪流の陰影』を読んで（『明明』五月号小松著）」（模糊的陰影—讀洪流的陰影（五月號明明小松））については先に触れた。その他、吳郎「豪華な外着（『奮飛』について）」（豪華的外衣〔有關奮飛〕、一九三八年六月五日、七日）、山丁「道」（路、八月一三日、九月二日）、施非「生存と滅亡—理念を間違えた古丁さんへ」（生存與滅亡—致觀念謬誤的古丁先生、一九三八年六月八日）、李寒丁「腹立たしい」（嘔気的、一九三八年六月九日）、S「生活と文章—「私語」の一」（生活與文章—「私語」之一、一九三八年六月一六日）、吳郎「批評を断る自己欺瞞の大作家」（謝絶批評的自欺欺人的大作家、一九三八年八月一四日）等が見られる。

「郷土文芸」に関する論争によって満洲の唯一の文芸誌『明明』から除外された山丁らは、その批判の矛先をほとんど古丁に向けている。本書の第三部第二章第四節で『奮飛』について論じた際、『大同報』の山丁・吳郎・蘇克らの批判を紹介したが、ここでもう一度振り返ってみよう。

蘇克は、古丁を「小ブルジョアジーの忠実な子どもで、強い自負心を持つ個人主義者」とし、その小説は、「社会の動態や大衆の意志を表しているわけではない」と評している。蘇克は、階級的立場に立った視点から、『奮飛』には万民の意志が体現されていない、と力説した。

吳郎は、「『奮飛』が万民に教えたのは、死亡・敗滅・懐疑・厭世で、文字に現れているのは、死やら逃亡やら滅亡だ。我々万民に希望を少しも与え」ていない、と決めつけ、『奮飛』は万民に

とって必要のないものだと言う。

ここで、蘇克と呉郎の批判には問題点がいくつかある。一つは、「大衆」と「万民」がそれぞれ何を指しているのかがはっきりしないこと。これについて、古丁は以下のように指摘している。

> 凡そ「大衆」と言う時、ほとんどは「俗衆」を意味する。（略）彼ら（文学者）が使っている「大衆」という語彙は、きわめて曖昧になってしまっている。（略）彼らは「大衆」によって貧しい人を指したり、「自分のような人」を示唆したりし、（略）「お前は大衆のためではない」と言う場合、「お前は貧しい人を書いていない」「お前は永遠に我々に見下される作家だ」という意味を超えていない。[48]

確かに、蘇克と呉郎の批判を見ると、『奮飛』に書かれたような「ブルジョアジー」の知識人は「大衆」以外に存在しており、彼らの言う「大衆」とは「貧しい人」や「無産階級」を意味しているように思われる。万民も大衆と同じような意味で使われている。実は、この裏に隠れているのはやはり、文学は誰のためのもので、どのような役割を果たすべきか、という問いである。郷土と無産階級を書く山丁や呉郎らが、階級革命の最前線に立っていた一方、古丁が魯迅から受け継いだ民衆の精神改造（読者の反省と自己革新を促す）のための文学は、日本の支配下にあり識字率が低かった満洲では、その存在意義があったと思われる。

もう一つは、「文化と大衆との距離を短縮する」は「万民に必要とするもの」に言い換えられることである。この点については、『明明』誌上で、鳥人が、「万民が必要とするもの」（「萬民之所需」）と「万民と文化の距離を縮める」（縮短文化與萬民之距離）[49]こととの違いをきちんと指摘した上で、「城島文庫」の刊行の辞「文化と大衆との距離を短縮する」はあくまでも出版商の言葉であり、『奮飛』の作者古丁の言葉とは分けて考えなければならない、と言っている[50]。この弁明は、むしろ、『奮飛』が万民から離れていると認めているようにも思われる。

「城島文庫」の刊行日を、「満洲国」成立以来で最も楽しい一日と喜んでいた古丁が、他の作家からはこれほどまでに批判された。しかも、その批判は、作品そのものというよりも古丁個人に対するものであった。『奮飛』の作者は個人主義者で、その作品は大衆に必要ないと決めつけられたことは、文学の達成感を味わったばかりの古丁にとっては大きな衝撃であったろう。「城島文庫」が文壇に果たしたプラスの役割を無視し、その不足な点ばかり取り上げている。それこそが山丁らのセクト主義と言える。

以後、古丁が半年余りの反省期に入ったことについては、第三部四章第一節で論じた。そして、その後の論争は創作と出版の競

争に移り、「満洲国」文壇はそれまでにない活況を呈することとなる。

ところで、『奮飛』のようにブルジョアジーのデカダンスを描いて暗いものは「万民」に必要ないとすると、「万民」に必要なものとは何か。これについては、呉郎が以下のように述べている。

> 我々はある事実に直面しているのを知っている。それは、万民が必要とする文化とは、無限の欲求を有する人類の生活の象徴であるということだ。つまり、片上伸の言う近代生活とは、すなわち死の中に微かな光を追い求めて喘ぎを保つことだ。様々な欲求により、次第に生命の自由を失ってきた人類は、相変わらず自由な生命を愛している。このような希望に満ちた苦しい夢の中にこそ、近代生活の魅力が潜んでいる。このような苦しい夢を描き出せる作品にのみ、近代文学の生命と魅力が感じられる。[51]

要約すると、近代の不自由で苦しい生活の中に微かな光、希望を表現する作品こそ魅力があるものだ、ということになろう。光と希望を表す作品こそ、「万民」に必要なものとされた。

文芸の創作態度に関して、文芸を宣伝の道具や戦いの武器とすることに反対するが、時代と社会に対する文芸の責任と義務を忘れてはいけないだろう。文芸は、（作家）個人の心情に基づいて人生を絶望的にしたり、罵ったり、さらに人生を滅ぼしたりするものではない。[52]

こちらは、施非の『奮飛』に対する批判であるが、『奮飛』を「人生を絶望的にしたり、罵ったり、さらに人生を滅ぼしたりする」ものと解釈している。また、第三部第二章第四節で論じたように、呉郎も、『奮飛』を「現実を呪って、人生の建設を忘れてしまった。ただ現実を滅ぼそうとして人生指導の役割を忘れてしまっている」と批判し、文学は人生を導かなければならないと述べている。それに対して、古丁は、「人生を導こうとするのではなく、ただ、文学を玩具と区別しているに過ぎない」（並非自居為人生的導師只是想把文學和玩具分開而已）[53]と反論した。それは、読者に反省と自己革新を促す彼の目的に一致している。このことについては、爵青も意見を述べている。

> 世間の功利主義者は物事の結果にのみ注目し、そのプロセスや手段を無視しがちだ。文芸界の中でも、高すぎて届かないような目標を定めるが、その定めたレベルにいかに到達するかには少しも注意を払わない批評家もいる。これは筆者に

はしばしば功利主義的な批評家に思える。[54]

爵青は名指しこそしてはいないが、「功利主義的な批評家」とは呉郎らのような人びとを指していると思われる。そもそも厳しい制限の下、「文学理論」さえ「夢見られない」「満洲国」では、文学に「人生の建設」や「人生指導」の役割を持たせようとしても実現できるかどうかは疑問である。この現状を無視して故意に無理を要求する呉郎らの本当の目的は、やはり古丁らをやっつけることにあったのではないか。爵青はその危険性を見出し、「我々のこの文芸のない文芸界を死産させ、震えながら死産させてしまうことを免れない」（卻不免要我們這無文藝的文藝界死産下去，在顫栗中死産下去）[55]と指摘した。このやり取りの中から、現実の暗さだけを暴露して、その解決方法を読者に任せる古丁らのやり方と、「真実を暴露」した上で大衆に希望と進路を教えようとする、すなわち、民衆に対して知識人のリーダー的役割を強調する呉郎らの方針との違いが見えてくる。

一方、満洲青年に明朗になれと呼びかける人物がまた別にいた。

在満の日満青年よ、もっと明朗快活になれ（特に満人青年よ、興奮してください）。新しい文化運動は、明朗性と積極性の上に築かれなければならない。満人各位に特に期待している。[56]

以上の引用は、三八年の『明明』新年号に掲載された関東軍新聞班の柴野少佐の寄稿で、「満洲国」当局の意見を代表したものと見てよいだろう。もちろん、柴野少佐の言う明朗性と積極性とは、「満洲国」の建設や「新しい文化運動」により希望を持ち、より積極性を出すという意味で、呉郎らの言う「人生の建設」や「人生指導」ではない。

また一方、『明明』の「暗さ」に理解を示した人もいた。

為政者は社会を明朗化させ、満洲の青年に清らかな空気を吸わせる必要がある。そうすれば、青年たちは自然に明朗になるだろう。私がこのような不平をこぼすのは、故郷を失ってしまった孤独者であるからかもしれないね。[57]

これは、水戸に戻った稲川朝二路が『明明』に寄稿した文章の一節である。故郷を失った人間であるからこそ、満洲青年を理解することができると稲川は言っているが、それは、やはり、『明明』創刊の際の話し合いを通して、稲川が古丁らのような満洲青年を理解してきたゆえと思われる。しかし、稲川のように「故郷を失った」人は少なく、古丁らの理解者はあくまでも少数派で

あった。その後、柴野少佐と同じように、「満洲国」政府も古丁らに明朗と積極性を求めてくるのである。

第二章　芸文志事務会とその出版活動

一九三八年九月号以降『明明』は停刊するが、その理由については、『明明』にも『月刊滿洲』にも載っていないため、はっきりわからない。出版社と編集側の問題か、あるいは「有力者」が絡んでいたのか、推測し難い。ただ、『明明』は当初の城島の発想とは全く違うものになってしまい、主幹の稲川も去っていた。また、『明明』と『大同報』「文藝」との論争も影響力が大きかった。さらに、劉遅（疑遅）の回想によれば、「城島文庫」の原稿料の支払いが規則通りに行われなかった、などの問題もあったという。

『明明』停刊後、古丁らは「城島文庫」の出版計画を実現できなくなるばかりか、文学の足場を失ってしまうことになる。そんな中、三九年六月になってようやく、芸文志事務会が結成された。芸文志事務会は文芸誌『藝文志』の他、「詩歌人連叢」や「読書人連叢」も創刊し、再び野心的な出版を企画していた。本章では、芸文志事務会とその出版物について検討する。

第一節　芸文志事務会

一．芸文志事務会の成立

三九年六月に創刊された文芸雑誌『藝文志』の巻末に、「藝文志事務會規程」、「藝文誌發行要綱」、「事務會役員」が掲載されている。「藝文誌發行要綱」によると、『藝文志』は不定期文芸誌で、文芸に関する創作と紹介を目的とするとされ、「藝文志事務會規程」には、役員として監理長・参与・司務主任・司務、事務会に企画係・管理係・編審係の三つが設けられ、それぞれの役割分担も明記されている。

「事務會役員」のうち、監理長は城島舟礼で、参与には満日文化協会の幹事杉村勇造の他に、同じく満日文化協会の陳邦直と黨庠周、それから大内隆雄他一名が就任した。事務会の顔ぶれは、企画係の司務主任に古丁、司務に辛嘉と少虬（陳邦直）、管理係の司務主任に王則、司務に外文、編審係司務主任に孟原、司務に疑遅と非斯（李松伍）、である。事務会の役員は合わせて十三人で、すべて名誉職という。ただし、そのうち王則は「一身上の都合」により、四〇年五月三一日に管理係の司務主任を解嘱されている。

満日文化協会の幹事を務めていた杉村勇造は、一九二四年から

の三年間、北京大学に留学し、金石学と書誌学を勉強した。三二年の満洲国立図書館設立に携わり、翌三三年には日本の外務省文化事業部に派遣され、外務省の対満文化事業の一環として満日文化協会の設立に従事し、貴重歴史文献の整理・保存・刊行の他、熱河等の遺跡調査にも携わっている。満日文化協会は三六年以降、「満洲国」国務院民生部の外局に位置づけられ、民生部の委託により、三八年の「東方国民文庫」の刊行をはじめ、「満洲国」の文化建設に取り組むようになった。

三七年一〇月には満日文化協会で文学談話会が開かれ、満系の新文学を盛んにする方途や、文学雑誌を振興する方法、満系文学の文体などの問題について議論されている。「満洲国」政府は、文化建設事業の一環として、「満人」文学の振興を図ろうとしていた。その中で、雑誌『明明』の成功と古丁らの実績が注目され、彼らの文学活動が援助の対象に選ばれたものと思われる。

杉村は、「城島文庫」出版記念会に参加した折に古丁らと面識があった。そして、第二部第四章第一節で述べたように、古丁が夏目漱石の『こゝろ』を翻訳して出版先に困っていた時、辛嘉が杉村に紹介して、「東方国民文庫」の一冊として三九年一〇月にようやく世に出るという経緯があった。それを皮切りに、杉村を代表とする満日文化協会が、古丁らの文学活動を後援するようになり、杉村本人も芸文志事務会の参与になったと考えられる。芸文志事務会の活動の場は、満洲文話会と同じく新京市大同大街大興大楼の満日文化協会内に設置された。このようにして、杉村は、「満人」青年作家とほぼ毎日のように付き合うようになり、彼らの良き理解者となっていく。戦後、杉村は「満洲文化の追憶」の中で、以下のように触れている。

> 私の立場は「中国人の擁護とその文化の保存」を仕事にするよう命ぜられて来たのであるから、（略）若い満系の文化人の養成も考えなければならない。（略）それでも文学者でも満系は日系とちがって政治的重圧の下にあって書くのであるから、少しでも思想的に当局の目に触れるところがあると逮捕されてしまう。そうかといって老人のように人前で妥協するのを潔しとはしない。そうした苦しみは日本側の文学者は理解できないので、かれらは私のところにやってきては時に不平をこぼす。かれらは魯迅（周樹人）の小説などの影響が大きいので、日本文学では夏目漱石は理解するが、その他のものは高く評価していない。世界文学の上で占める日本文学の地位などは余り認めないのだから無理もない。しかし刺激が大きいだけにかれらの文学活動も盛んで、『藝文志』が昭和一四年に発行され、日本側の『満洲浪曼』と相対して文学方面もようやく花が咲きはじめた。[58]

戦後の回想であるが、杉村が彼らを援助した目的は、「若い満系の文化人の養成」であり、また、彼らが政治的重圧の下で慎ましく文学を行っていたことをよく理解していたことがわかる。そして、彼らもまた杉村を、不平をこぼすほどに信用していたことがわかる。

杉村の専攻は中国文化であったので、中国人の考え方にも通じていただろうと思われる。「満人」文学の良き理解者として知られ、日本への「満人」小説の翻訳紹介に尽力した大内隆雄も、中国留学の経験者であった。在満日本文化人は、それぞれに様々な思いを抱えて満洲に渡ってきたが、満洲や満洲の人びとを本当に理解していた者はそれほど多くない。満洲で長年教鞭を執った稲川朝二路も、古丁らと話し合う以前は、満洲青年たちが何を必要とするかなど考えてもいなかったが、その後は彼らの文学の暗さまで理解するようになる。理解とは、心を開いて話をして初めて得られるものだということを教えられる。

事務会『藝文志』は第二輯から、発行元が月刊満洲社から芸文志事務会に変わった。理由は、月刊満洲社からの資金援助がなくなったためと思われる。代わりに『藝文志』の資金は満日文化協会を通して、「満洲国」民生部から受けることになった。このことについて、他のグループの文学者は不満を持っていたようである。芸文志事務会に刺激を受けて、瀋陽で結成された「文選刊行会」は、三九年一二月に文芸誌『文選』（王秋蛍編集）を創刊しているが、その第二輯に次のようにある。

> 去年は出版年とも呼ばれ、広告が盛んに出されたが、今年は紙も不足しているし、印刷費、補助費は『藝文志』一件にしか与えない、といわれている。[59]

紙不足の中で、『藝文志』にだけ補助金を与える政府のやり方に対する不満である。

二．芸文志事務会メンバー

『藝文志』第三輯には、芸文志事務会のメンバー（「芸文志派」とも呼ばれる）として、古丁・辛嘉・外文・疑遅・小松など十名の似顔絵付き紹介文が載っている。内容は、各人の生年月日等の履歴や肩書きではなく、それぞれの性格や特徴をスケッチしたものである。中には、『明明』で活躍していた人もいれば、新しく加入した人もいた。ここで、『藝文志』の紹介を参考にしながら、「芸文志派」とはいったいどのような文学グループなのか、メンバーはどのような共通点を持っていたのか、を簡単に見ておこう。辛嘉・外文・疑遅・小松・爵青・顧共鳴・辛実・非斯・少

虬・杜白雨の順に述べる。

①辛嘉の本名は陳松齢で、筆名に毛利もある。清華大学の元学生で、左翼運動に挫折して北満の町に戻り、そこで結婚した。その後、新京に引っ越して、『明明』の編集を任され、「城島文庫」の編集にも携わった。後、満日文化協会で書記を務める。三九年九月、満洲国語研究会の設立後、その幹事となり、機関誌『満洲国語』（満語）の編集者となる。同年一一月に訪日して、武者小路実篤と志賀直哉に会い、武者小路著『井原西鶴』と岡倉天心著『茶の本』（英語版）を贈られる。四一年一二月に日本対米英戦争が始まるとまもなく、北平へ移住している。随筆で活躍し、著書に『草梗集』（興亜雑誌社、一九四四年）がある。

②外文の本名は単庚生で、筆名に滕更などがある。南京生まれで、満鉄公学堂で教育を受けた後、北京鉄路大学に進学し、左翼活動に参加する。三二年の上海事変の際は、しばらく上海に滞在。「満洲国」国務院統計処属官として長年勤務した後、四一年に古丁と共に辞職して、芸文書房に勤務。三六年頃に古丁や疑遅らと「芸術研究会」を結成し、文学活動を始める。小説に「老張」（『明明』、一九三七年四月）、翻訳に、林芙美子「文学的自叙伝」（『明明』、一九三八年一月）、プーシキン「エジプトの夜」（『明明』、一九三八年四月）、張赫宙「春香伝」（『藝文志』、一九三九年六月）、山本有三「海彦山彦」（『藝文志』、一九四〇年六月）等がある。また、歴史長詩「鑄劍」（『明明』、一九三八年三月）や、長詩「変」（『藝文志』、一九三九年一二月）等も。他に、「役鬼人」（『讀書人』、一九四〇年七月）を発表するなど、詩劇という新しい分野にも挑戦した。単行本に、詩集『長吟集』（興亜雑誌社、一九四四年）、『白雪遺音』（芸文書房、一九四二年）、翻訳『魯迅伝』（小田岳夫著、芸文書房、一九四一年）等がある。

③疑遅の本名は劉玉璋、筆名に劉遅、夷馳、劉郎がある。中東鉄道に勤務した経験から白系ロシア人の生活に詳しく、ロシア語に堪能。古丁と同じく総務庁に勤めていて、「芸術研究会」のメンバーであった。四一年に古丁と共に辞職後、満洲雑誌社に勤務するようになり、大衆雑誌『麒麟』（四一年六月創刊）の編集者から編集部長へと昇進し、『電影画報』の編集にも携わる。精力的な作家で、小説に「北荒」（『明明』、一九三七年四月）、「山丁花」（『明明』、一九三七年五月）、「雁南飛」（『明明』、一九三七年七月）、「回帰線」（『藝文志』、一九四〇年六月）、「凱歌三部」等があり、翻訳にゴーリキー「本」（『明明』創刊号）等がある。単行本に、『花月集』（月刊満洲社、一九三八年）、『鳳鳴山的深秋』（芸文書房「快読文庫」、一九四一年）、『同心結』（芸文書房、一九四三年）等がある。

④小松の本名は趙孟原で、筆名に夢園、西園などもある。湖北省

生まれで、三〇年代の初めは奉天白光社のメンバーであったが、『明明』の編集に迎えられる。事務会『藝文志』の編集者を経て、満洲映画協会に勤務し、『満洲映画』の編集に携わる。その後、『満洲映画』と共に満洲雑誌社に移ってからの一時期は、大衆雑誌『麒麟』の編集者も務めた。四一年一〇月に芸文書房に入り、後、聯盟『藝文志』の編集者となる。長編小説『北帰』（芸文志事務会、一九四一年）は文芸盛京賞を受賞。小松は詩も書くが、小説で最も成功を収めた。単行本に、詩集『木筏』（満日文化協会・詩歌叢刊刊行会、一九三九年）、短編集『蝙蝠』（月刊満洲社、一九三八年）、長編『無花的薔薇』（満日文化協会、一九四〇年）、『北帰』（芸文志事務会、一九四一年）、短編集『人和人們』（芸文書房、一九四二年）、『野葡萄』（芸文書房、一九四三年）、『苦瓜集』（芸文書房、一九四五年）等がある。

⑤爵青の本名は劉佩、筆名に遼丁などもある。古丁の幼なじみで、満鉄公学堂で教育を受け、日本語ができる。三三年に結成された冷霧社のメンバーの一人で、詩を書いていた。一時期、何らかの関係で関東軍の通訳を務めていたこともある。文学的才能に恵まれ、「鬼材」と呼ばれていた。小説では、近代青年の悩みをよく表現している。創作に「盪兒歸來的日子」（事務会『藝文志』、一九三九年六月）、「廃墟の書」（事務会『藝文志』、一九三九年一二月）、「麦」（事務会『藝文志』、一九四〇年六月）等があり、翻訳に、芥川龍之介「地獄變相」（聯盟『藝文志』、一九四三年一一月）等がある。その他に、論文「西欧の知性の破滅」（西欧的知性的破滅、聯盟『藝文志』、一九四四年二月）もある。単行本に、『欧陽家の人々』（欧陽家的人們、芸文書房、一九四一年）、『キュリー夫人』（菊里夫人伝［上］、吟梅と共訳、芸文書房、一九四二年）等がある。

⑥顧共鳴は、日本留学の経験を持ち、三八年には『大同報』で日本作品の翻訳に携わった。芸文志事務会でも主に翻訳分野で活躍し、作品に、長谷川濬「大同大街」（事務会『藝文志』、一九三九年一二月）、竹内正一「馬家溝」（事務会『藝文志』、一九四〇年）、李台雨「現代朝鮮文学論」（事務会『藝文志』、一九四〇年六月）等がある。後、満洲雑誌社に勤務し、『電影画報』の編集長を経て編集部長。

⑦辛実の本名は張辛華で、筆名に新実もある。日本留学の経験を持ち、脚本の創作に励んでいた。四四年から興亜雑誌社の「新現実文芸叢書」の編集者となる。

⑧非斯は、本名李松伍で、一九〇六年生まれ。北京大学の出身で、中国古典の研究者である。建国大学の教授で、王道書院の講師などを兼任していた。論文に「六朝門閥思想と社会」（六朝門閥思想之與社會、『明明』第三巻六期、一九三八年八月）等があり、著書に『経學概論』（芸文書房、一九四三年）、『子學概

論』（芸文書房、一九四四年）がある。

⑨少虬は、本名は陳邦直、字は少虬、筆名に陳英三などもある。「満洲国」皇后婉容の師、宮内府顧問官陳曾寿の次男として北京で生まれ、名士の風格があったといわれる。満日文化協会の書記を務め、三八年から「東方国民文庫」の発行人となる。杉村勇造と親交があり、三四年に北宋時代の「宝篋印陀羅尼経」の拓本を杉村に贈ったことがある[60]。旧体詩詩人で、美食、碁、武術、書画、版本など、中国の伝統文化や様々な歴史故事に通じていた。『明明』には、陳英三や少虬の筆名で京劇や碁などについての文章を発表していた[61]。著書に『鄭孝胥』（満日文化協会、一九三八年）、『羅振玉傳』（満日文化協会、一九四三年）等がある。

⑩杜白雨は、『藝文志』には紹介されていないが、「芸文志派」として活躍した人物である。本名は王度で、日本留学中には『影藝之友』（詳細不明）という雑誌の編集に携わり、林時民という名で日本語詩集『新しき情感』（詩集刊行会、一九三七年）を出版している。左翼活動により特高に逮捕され、強制出国させられた後、「満洲国」でも引き続き警察に監視されていた。姜衍という名で満映の監督を務めた後、華北に脱出する。小説に「金泰棧」（事務会『藝文志』、一九四〇年六月）、エッセイに「日本文学の言語性格」（日本文學的語言性格、事務会『藝文志』、一九四〇年六月）等がある。単行本に、詩集『櫻園』（興亜雑誌社、一九四四年）、翻訳・島崎藤村『春』（芸文書房、一九四二年）がある。

「芸文志派」の主要メンバーは、以上の通りである。学者の非斯と旧詩人で「名士」の少虬の加盟により、古丁ら新文学作家グループは異色に染められた。さらに、少虬はその父親の関係で、古丁らが今まで反対してきた「満洲国」の「満人」側の体制派に属している。それによって、「芸文志派」が『明明』時代から守って来たリベラル精神は弱まり、文学上は旧文芸と手を結んでいるかのように見えた。『文選』は、以下のように揶揄している。

満洲では同人組織が生まれてから、その力を強めるために、あちこち誘致し廻っている。先代の遺老も奉戴するし、新国の遺少も入会に誘う。[62]

この「同人組織」とは、明らかに芸文志事務会を指している。「遺老」はおそらく、事務会『藝文志』第一輯に「金石叢談」を発表した宝熙を、「遺少」とは陳邦直を指していると思われる。彼らは羅振玉の一派で、皇帝溥儀を補佐しながら、伝統文化の維持と研究を行っていた。彼らの多くは満日文化協会に参加している。

まとめると、「芸文志派」には以下のような特徴がある。

一．幅広い分野にまたがる文化人グループで、ほとんどは新文学の作家であるが、学者や、旧詩人・「名士」もいた。

二．多くは、満洲以外の地、北京や日本で教育を受けたり生活したりした経験を持つ。古丁と李松伍は北京大学、辛嘉は清華大学、外文は北京鉄路大学、杜白雨は日本大学の出で、共鳴も辛実も日本の留学生であった。李正中の言う古丁の「大中国」思想は、彼らの間で通じやすく、また共感しやすかったと思われる。

三．三〇年代初めの救国革命運動経験者が多い。古丁は転向し、辛嘉も逮捕されたことがある。杜白雨は、日本留学中に左翼活動を行っていた。外文も何らかの形で左翼に関わっている。芸文志事務会は全体的に、左翼寄りの思想傾向を持つ者たちのグループだったと言える。

四．創作と共に翻訳もできる者が多い。日本語ができるメンバーとしては、日本留学の経験を持つ共鳴・杜白雨・辛実の他、満鉄公学堂卒業の古丁・爵青・外文がいて、疑遅はロシア語、小松は英語に長けていた。また、彼らは文学と編集の才能を買われ、四一年以降、共鳴と疑遅は満洲雑誌社、辛実は興亜社に入って、いずれも「満洲国」の出版界で活躍している。

第二節　事務会『藝文志』

三九年六月の文芸誌『藝文志』創刊時には、発行元と発行人は『明明』と同じく月刊満洲社と城島舟礼となっていたが、第二輯以降は、発行元のみ芸文志事務会に変わった。編集者は趙孟原（小松）で、印刷所は三輯とも満洲弘報協会大同印刷所である。

第一輯は二一六頁、第二輯は三六七頁、第三輯は四二五頁で、かなり分量のある雑誌であった。表紙を飾った題名「藝文志」の文字とその下地の絵は、満日文化協会の宝熙から贈られた、漢碑の拓本だという（本書口絵参照）。目次頁の上部の青銅器を抱える翼の生えた人間の絵も、漢碑の拓本から採ったものと思われる。共に中国の伝統文化を連想させ、『明明』のモダンな絵画や木版画のイメージとは全く異なる。

一．創刊

『藝文志』創刊号の冒頭には、「藝文志序」が載っている。城島舟礼と署名にあるが、実は古丁の筆によると思われる。まず文芸の大切さを訴え、それから「満洲国」の文化に存在する課題を提起している。

一つの国にはその国なりの芸文がなければ、世界に誇ることはできない。一世代にはその世代なりの芸文家が生まれて来なければ、歴史の中に永遠に銘記されることはない。我が国は建国以来八年が経ち、政治、経済、社会の各領域において日に日に完璧で最高の段階に近づき、飛躍していない部門はない。しかし、文化の分野だけは、末梢的な成長はあるものの、根本的な開拓がまだ行われていない状態にとどまっている。[63]

「満洲国」の文化は少しは伸びてきているが、根本的な開拓はまだない。それが、『藝文志』創刊の理由にあたるとされている。すなわち、『藝文志』の創刊は、国家の文化事業を開拓するために行われた。この理由は堂々たるもので、満日文化協会の満系文学雑誌を支援する目的にもぴったり合致している。では、その開拓の方法とはいかなるものであろうか。

本誌は全国の文筆者を集め、派閥や、個人の小さな意見にこだわることなく、皆様と協力して共同でこの任務を担いたい。芸文の仕事は、まず書いて刷ることである。書くものは、天地の如き大なものでも、胡麻の如き小なるものでも、真意があれば、自ずから永らく伝わる。刷るものは、大海の如き広大なものでも、粟粒の如き微細なるものでも、善根さえ備われば長久に残すことができる。[64]

右の引用文では、全国の文筆者に、団結し協力して文化建設の任務を担おうと呼びかけながら、「書いて刷る」の主張を強調している。そして、「真意」と「善根」を歴史に残す要件とする。これは、すなわち古丁の従来の主張である。文章の末尾には、「恭奉回鑾訓民詔書煥發紀念佳日」とある。

「藝文志序」では、上級機関である満日文化協会の意志を代表し、同時に抱負も語られている。満日文化協会と芸文志事務会は息の合ったコンビに見え、「満洲国」の「満人」芸文事業をそのまま順調に進めていくかに思われる。ところが、「藝文志序」の次に掲載されている、国務院総務庁参事官岡田益吉の「所望於滿洲文學者」という文章を読むと、事はそれほど楽観視できないと感じられる。

滿洲文学については、私はひたすらロマン主義を追求する。満洲国は夢の設計だ。しかし、その上に立つ人間は、そこに夢を与えていない。（略）東亜新秩序の建設も夢から夢へと進められていくものだ。この事業に参加する者は、熱意と空想の持ち主でなければならない。（略）長い間、我々は、現

実、実践、体験、生活、悲惨、醜悪、凡俗、虚偽、懐疑……などが人生だと教えられ、写実主義でなければ文学にはならないと思い込んでいた。そのうえ、魂をすりつぶされ、空想を豚小屋に捨てられ、美を質屋の倉庫の中に投げ入れられてしまった。この種の歪んだ人間に、文学を語る資格はない。過去の文学はただの人殺しだ。[65]

岡田益吉についての詳細な情報は今のところ無い。この人物が文学をどれほど理解していたかはわからないが、「満洲国」や東亜新秩序建設の政治的な熱狂を文学に注ぎ込もうと呼びかけ、そのような文学をロマン主義文学と思い込み、それ以外の文学は必要ないと言っているように聞こえる。写実主義文学を行う者は「歪んだ人間」であり、「文学を語る資格はない。過去の文学はただの人殺しだ」。なぜ、岡田がそこまで言い切れるのか、筆者はそれを説明する資料を持たない。ただ、岡田の言は、三八年一月の『明明』第二巻第四期に掲載された関東軍新聞班・柴野少佐の「希望」という文章にある、「満人」青年への「明朗、興奮」なれという呼びかけにも通じる。いや、それより遥かに極端な表現を用いているとも言える。この文章を通し、岡田は、従来の「満人」青年の文学を全否定するばかりでなく、彼らは歪んだ人間で、殺人者だ、と言わんばかりである。岡田は「満洲国」にいたからこそ、このような文章を堂々と発表することができ、「満人」青年に対してこれほど赤裸々に暴言を吐くことができたのであろう。「満洲国」では官吏がこのようなことを公に言いながら、「民族協和」のスローガンを掲げていたのである。

岡田のこの文章を翻訳して雑誌に掲載した「芸文志派」は、いかなる心境であったことか。民間資本の刊行物だった『明明』には一定の自由な頁スペースが確保されていたが、『藝文志』は行政と手を組んでいたため、このような文章でも訳して載せなければならなかった。彼らは杉村勇造に不平をこぼすくらいはできただろうが、公然と対抗することはできなかった。政治の重圧と文学的理想との狭間で、常に適度なバランスを要求されたと思われる。

『藝文志』創刊号「後記」に嘉（辛嘉）は、以下の会話を記している。

A曰く：どうしても文学を忘れられない我々は、数多くの困難を乗り越えて、作品をようやくこの一冊にまとめることができた。我々はやはり喜んで良いと思っている。

B曰く：この一冊にいったいどれほどの価値があるのか、私は疑っている。名も知らぬ新種の鉱石と同じく、現時点では、その人類に果たす役割をまだ量り得る術

がない。

C曰く：この一冊は退屈な物に近い。二、三人の自慰に使える他には何の役にも立たない。

これらの本心からと思われる言葉には、それぞれそれなりの真実があるかもしれない。しかし、『藝文志』はやはり予定通り刊行しなければならない。『藝文志』にまつわるすべての疑問に対する答えは歴史に任せるしかない。[66]

右の会話の中には、文学の夢を一応は実現した喜びと、理想通りには仕上げることができなかったもどかしさ、そして失望が入り混じっている。しかし、ないよりはやはりあったほうが良いと、彼らの判断ははっきりしていたようである。

「満洲国」で文学活動を行うには、自らの理想をある程度犠牲にし、体制と妥協することが必要である。一方、妥協した文学が、果たしてどれほど読者の役に立つのか、は疑問である。それが、文学に携わる彼らのジレンマであった。しかし、彼ら自身は、「歴史に任せるしかない」と言う。

文字上にも異なる点がある。例えば、『明明』は熱意と生気に満ち溢れ、闘争心も顕著だが、『藝文志』にはそれが欠けている。『明明』の装飾を短打扮に喩えるなら、『藝文志』のほうは長衫となり、そこにゆとりと風雅が見られる。[67]

右は、「文選派」の顧盈の批評である。魯迅の小説『孔乙己』の中で、没落した旧知識人の孔乙己はぼろぼろの「長衫」を身に付けていて、労働者は「短打扮」を着ている。顧盈は、『明明』の生気と闘いの精神を「短打扮」に、『藝文志』に見える旧知識人のゆとりと風雅を「長衫」に喩えている。また、以下のような批評もある。

遂に『明明』時代の若干の作家は再び藝文志事務會を組成し、大型季刊『藝文志』なるものを創刊した。但し『藝文志』の出版は依然として新文藝性格を失はなかつたが、もはや『明明』時代の執拗と強靭な精神は疾に消失し去った。而も内容上から観察すれば却つて舊文藝と手を相携へるが如くである。[68]

これは、「満人」の作品を数多く日本語に翻訳した大内隆雄の見方である。大内の意見も顧盈のものとほぼ変わらず、当時の『藝文志』に対する一般的な見方だったと思われる。

『藝文志』を『明明』と比較すると、次のような特徴がある。

①伝統的イメージの表紙。山越音作「郷土玩具」（第一巻第五期）や、フランスの木版画（第二巻第三期）などのモダンアートでデザインされた『明明』に対し、『藝文志』の表紙は、漢の石碑の拓本である。

②古典に関する学芸論文の掲載。『藝文志』第一輯には、非斯「『藝文志』考」の他に、宝熙「金石叢談」、第二輯には非斯「『藝文志』考」が掲載されている。『明明』にも非斯の論文は掲載されているが、はるかに少ない。

③旧詩文の掲載。少虬「鄭海蔵先生の詩」（鄭海蔵先生的詩、第一輯）、宝熙「記遊詩」、陳蒼虬「朝顔（牽牛花）」、劉恩給「今勇斎詩抄」、劉盛源「松江浪」（第二輯）、劉思格「和蒼虬牽牛花」、昨非「奉題元初太守柳樹図」、少虬「牡丹園雅集分詠得花字」、真如「讀長文襄公杜少陵詞感賦」（第三輯）等が挙げられる。新文芸から遠く離れた旧文芸との唱和は、『明明』には見られなかった点である。

④日本古典の翻訳。光天訳「古事記選訳」や、百霊訳「芭蕉俳句選訳」（第二輯）がある。

⑤『明明』に掲載されたような闘争心に満ちたエッセイ、特に古丁の雑文が消えてしまった。

以上のように、伝統文化に関する論文や旧詩文が多く掲載されたことによって、『藝文志』は「舊文藝と手を相携へる」ように見えたであろう。満日文化協会一派に誌面を割いたのも、援助を受けるための妥協だったのではないか。特に⑤の古丁のエッセイの消失が、『藝文志』を『明明』ほど生気がないように見せた大きな要因であった、と思われる。古丁がそのようなエッセイを書かなくなったのは、その精神を失ったのか、「郷土文芸」に関する論争によって弱められたのか、あるいはもっとしたたかに成長したのか、判然としない。いずれにしろ、辛嘉の「歴史に任せるしかない」という言い方は興味深い。

『明明』時代、古丁らの作品は暗いと、体制側にも呉郎らにも批判されていた。では、いわゆる明るい文学とはいったいどのようなものなのか。

関東軍新聞班の柴野少佐や総務庁参事官岡田益吉が要求した文学は、すなわち、満洲建国のロマンを表す文学であった。その登場人物は、酒に溺れて希望を失った青年ではなく、明朗で「満洲国」建設に熱意を燃やし、「王道楽土」や「大東亜新秩序」の夢を実現するために献身的に働く若者像だったと考えられる。

一方、呉郎らの主張する、いわゆる明るい文学とは、読者に希望を与えるものであった。具体的にどのようなものか、彼らが創刊した文芸雑誌『文選』に掲載された作品を見ながら検討してみたい。

①反抗すれば勝利を収める――山丁「鎮集」

土地を持たない農民の小三は、尹郷長の家に雇われ、その娘の艾艾と恋仲になる。しかし、激怒した尹郷長に反対される。そこで二人は町に逃げ、劉通訳の家の地下室で生活を始める。その後、妊娠した艾艾は出産する。そこへ尹郷長が訪ねてくる、

尹郷長の唇辺りの弧線が上下に跳ねていて、言葉は出て来ない。ただ、微かに「許して、許して」という声が聞こえている。[69]

②大地を自分のものにする――呉郎「五月之耕　外二章」

我々は廉価に血と汗を売る。誰も哀れんでくれないし、誰にもかわいそうと思って欲しくない。しかし、我々は大地を自分のものにする。[70]

③死を恐れない――呉郎「屠殺場で」（屠場里）

この屠殺場――一冊の屈辱な歴史だ。檻の中で数え切れないほどの命が殺された。だが、死の神は怖くない、我々は自分を戦慄させるべきではない。[71]

①は、闘えば成功する、という道理を説く、ハッピーエンドの物語である。②には、人に頼らず、自立することによって、大地は必ず自分のものになるという、将来への強い信念が現れている。③には、恐ろしい現実や死にも立ち向かう、勇気が溢れている。

闘ったら必ず勝つ。今は苦しいが、将来への希望を抱く。それが、山丁や呉郎らの言う「明るい」小説、つまり、読者を暗い世界から導き、出口を教える、いわゆる「出路文学」である。彼らは、「苦しい夢を描き出すことこそ、現代文学の生命と魅力だ」[72]と考えていた。それに対して、「人に好感と美感を呼び起こすものは書かない。読んでわけがわからないものは書かない。人を楽観させるものは書かない」[73]と主張する古丁は、「暗い」現実だけを見せ、その原因は何か、どのように行動するべきかについては、読者の判断に任せていた。

ところが、事務会『藝文志』には、山丁や呉郎らの明るくハッピーエンドの作品と、建国ロマンを描いた作品、各一本ずつが掲載されている。

④希望を与える作品――「桃色輪郭」（励行建、第二輯）

不良男性と結婚した女性が、夫の賭博とアヘン代を賄う金を稼ぐために、身を売る。「私」は彼女のことが好きだが、彼女の行動には賛成しない。その後、夫を亡くした彼女は「私」に感化され

て、「私は光が欲しい。光はもうすぐ私に太陽を連れて来るのだ」[74]と叫ぶ。

⑤建国ロマンが溢れる作品――「春之復活」（李夢周、第二輯）

「建国文芸一等当選作品」であり、大内隆雄による日本語訳が『満洲浪曼』第三巻（一九三九年七月、一四六～一六九頁）に掲載されている。「張鼓峰事件」[75]を背景にしたこの作品は、ロシアとの国境へ赴き国を守る「満洲男児」から、その恋人へ送られた手紙文で構成されている。手紙には、「満洲男児」としての誇り、白系ロシア人との民族協和、ソ連共産党への憎悪、将来の幸せな生活への憧れなどが綴られている。

俺がお前の可愛いところを思う時、その喜びは恨みに変わる、敵への恨みに。……なぜなら、俺たちが別れなければならないのは敵のせいだから。時には、その喜びを将来への期待に込める。俺は安心して寝入った。夢の中で、俺たちは唇を噛んで微笑んでいるのだ。[76]

恋人への愛は敵への恨みとなる、すなわち個人の愛は国家愛と一致すると、作品は訴えている。

俺には血もあり、肉もあり、肉親もいる。俺は自分の血肉を裏切ることができない。俺は、満洲男児だ。[77]

国境線を、もし我々が正当に防衛しなければ、将来、我々はこの年とった不運なロシア人と同じようになるのではないか。妖しい赤色の空気が時折、我々の暮らすこの純粋な地域にも浸透して来るのではないか。[78]

彼に同情するべきだろう。国は違うが、同じ統一戦線に立っている人間同士、仲良くする必要があるのではないか。[79]

革命により亡命を強いられたロシア人と仲良くし、共同の敵である赤色ソ連と戦う。この小説の中で李夢周は、一兵士の口を借りて、「反共」、「民族協和」、「満洲国」への愛、「満洲男児」としての誇りを表現している。「満洲国」の国策をポジティブに語り、「満洲男児」のイメージを作り上げている。このような「満洲男児」こそ、「満洲国」政府が期待する「満人」若者像であったのであろう。

以上が、事務会『藝文志』に掲載された、「明るい」文学の内容である。「藝文志序」を読むと、「芸文志派」は文学の「真意」と「善根」を大切にしていたようであるが、果たして彼らは本当に、

「春之復活」には「真意」と「善根」が備わっているべきと思っていたのだろうか。

二、「芸文志派」の文学

「芸文志派」は、創作しながら翻訳も行っている。事務会『藝文志』は、『明明』同様、彼らの創作と翻訳を発表する場となっていた。第一、二輯は創作、第三輯は日本紀元二六〇〇年記念と銘打たれ、翻訳の特集であった。

『藝文志』には明るい文学も掲載されたが、「芸文志派」の文学は相変わらず暗かった。詩は長詩志向で、百霊と外文が活躍している。また、満洲で有名な詩人の成絃と金音の作品も掲載されている。脚本には辛実、エッセイには辛嘉などの作品がある。翻訳は、日本文学が中心であった。

二－一　疑遅の小説

事務会『藝文志』の中で、疑遅は三本の小説を発表している。第一輯に「祈禱」（夷駈）、第二輯に「郷仇」（夷駈）、第三輯に「回帰線」である。

「祈禱」では、教会の中の出来事が描かれている。趙教士の娘趙素蘭は、欧米人の白牧師の書記、姜品新に誘惑されて妊娠する。趙教士は律法に基づき、姜に懲罰を与えるよう要求するが、白牧師はそれに同意しない。三十年間、人びとに主に帰すことを勧め、英語を教えてきた白牧師は、小説の最後で次のように祈祷する。

> 「神様！あなたの権力を使い、あなたの威力を施し、神様に背いたすべての人間を滅ぼしてくださいませ」[80]

自らの幸福を願うばかりか、他人の禍を祈る利己的な白牧師の様子を盗み見した趙教士は、「いきなり何かを悟ったように、また、急いでその部屋を立ち去った」[81]。趙教士は、神様にすがっても自分たちの問題は決して解決されないと悟ったのであろう。

「郷仇」は次のような話である。父親が村長の馬啓泰に脅迫されて自殺したのをきっかけに匪賊になった農民、劉斌昇は、仇討ちのために村に戻り、馬啓泰一家を殺そうとする。しかし、馬啓泰本人はすでに死んでおり、その息子と娘は債主に責められて苦しんでいた。それを見て、劉斌昇は彼らを殺すどころか、助け出して共に逃亡する。

「回帰線」では、主人公の若い農民盧振が、出稼ぎのために都会に出て、ある金持ちの夫婦に雇われる。そこで主婦に誘惑されその情夫となり、都会の堕落した生活に馴らされる。やがて、アヘ

ンで体が衰弱し、使い物にならなくなった盧は、解雇されて郷里に戻ってくる。力に満ちた農民が都会に出て、逆に何もできない廃人となって郷里に帰ったのである。

『明明』で「山丁花」「北荒」を発表した疑遅は、『藝文志』でも引き続き、農村に関係する人間の物語を書いている。事実の描写を重んじ、議論をほとんど入れない作風は一貫しているが、登場人物の運命は微妙に変化している。「山丁花」や「北荒」の主人公たちはただ気の毒な悲惨な結末を迎えるだけで、「祈禱」の趙教士のように「何かを悟った」ことも、「回帰線」の主人公盧振の廃人となった原因が都会の資産階級の堕落した生活にある、というように、悲惨な運命を強いられた原因を読み取ることもできない。また、「郷仇」の場合、主人公が仇討ちの相手を助けるという、予想とは正反対の結末になっているが、そこに主人公の勇気と思想の火花が飛び散っている。これら三篇の内容を総合すると、次のようになる。苦しんでいる人が、神様にすがりついても助けてもらえない。都会に憧れると、その欲望の犠牲になってしまう。しかし、匪賊になった農民の行動は輝いている。満洲の民衆を助けるのは、神様でも資本主義でもなく、民衆自身が匪賊になること、要するに、革命しかないと、疑遅は言おうとしているように読める。

二－二　小松の小説

『藝文志』には、小松の小説が四本載っている。第一輯に「施忠」と「二十年」（西原）、第二輯に「蒲公英」、第三輯に「鉄檻」で、そのうち「蒲公英」と「鉄檻」は「百枚小説」、すなわち四万字程度の中編である。

「施忠」の主人公は、職を失い、冬の町で宿泊代も払えなくなり、人の財布を盗むが、それでも生きられなくなる。彼は結局、自分を失業させた元上役の情婦を殺して、殺人犯となってしまう。

「二十年」（西原）では、四十代の女性が、二十歳の娘の結婚式の日に、娘は夫の実子ではない、と夫に告白する。二十年前、夫が娼婦を相手に浮気をしていた頃、傷心の彼女は他人との間に娘をもうけたのである。

「蒲公英」では、恋人の胡邦に捨てられた中学生、鳳英が堕落する。胡邦が資産家の娘の家庭教師となり、その娘と恋愛して結婚する夢を持ったからである。しかし、胡邦の夢は破れ、鳳英の元に戻ってくる。鳳英の自由を買い戻すために、胡邦は人を殺して金を奪うが、その間に鳳英は自殺してしまっていた。

「鉄檻」では、農民の邱青が人夫にさせられて給養を送る途中、山の中で道に迷い、匪賊となる。その妻邱二嫂は、村役場の徐管理員の愛人になってしまう。その息子の虎子は徐管理員の娘小芸と恋愛関係になるが、徐に反対され、二人は町に逃げて行く。町

で小芸は堕落し、結局邱青は殺され、虎子は町でワンタン売りになる。やがて、娼婦となった小芸は、資産家との間にできた私生児の娘を育てることになる。

小松は疑遅ほど農村のことに詳しくないようだが、彼の小説には町の底辺に生きる人びとが頻繁に登場する。「施忠」では、主人公が店の管理者たちの乱れた生活を目にしたことにより、ついには職を奪われてしまう。施忠に同情すると同時に、近代都市の小市民の堕落した様子を批判している。「二十年」と「蒲公英」もそうである。「鉄檻」には、村役場を代表とする社会に圧迫され、抵抗する農民の運命が描かれている。施忠も胡邦も人を殺し、彼らの運命は悲惨に陥る一方である。だが、彼らに殺された人びとがその運命の根本的な原因ではないように思える。貧しい人びとの悲惨な運命は、誰か一人によってもたらされるものではなく、社会のシステムに根源がある。根から腐った社会の中で人間が苦闘するだけでは、なかなか希望を見出せない。邱青も殺されるが、それは復讐の失敗に拠るものである。彼は少なくとも自分の苦しみの原因と、それを解決する方法を知っている。小松の小説には濃厚な暗闇が潜んでおり、微かな光は見えるが、そこへ達するにはなお時間がかかりそうである。

小説作家としては、疑遅と小松の他に、石軍・杜白雨・老穆などが挙げられる。彼らの作品に登場する人物は、建築現場で事故死した日雇い労働者の蘇長富[82]、町から田舎に戻り、田んぼを借りて一生懸命に農業をやるものの、秋の収穫時に税金などを引くと、手元に借金しか残らない趙疤頭[83]、雇い主を信用してよく働いてきたが、病気で倒れた途端に契約を解除され、前払いの給料も借金となってしまう馬成駿[84]、働いても必ずしも報われないと悟り、何もせずに酒ばかり飲んでいるロシア人と中国人の混血児[85]、炭坑の址にでき上がった貧民街で低級旅館「金泰棧」を経営する老人[86]、等々である。いずれも社会の底辺に生きる人物の物語で、一様に暗い。これらの小説は、苦しい魂が蠢く「満洲国」の底辺に光を当て、人間世界の地獄図を浮かび上がらせる。

また、都市の中産階級の家を舞台にした小説もある。「列女伝」を頭に植え付けられ、親の反対によって恋愛できずに憂鬱死する少女の話もあれば[87]、鳥のように籠に閉じ込められていた資産家の息子が浮浪少年について逃げ出す話もある[88]。これら二作品は親子関係に注目したもので、前者では親の保守的な旧道徳によって少女が殺され、後者ではブルジョア家庭の息子が保護の名目により親に自由を奪われる。封建思想にすがりつく旧式家庭と貪欲で偽善的なブルジョア家庭の問題を描くことによって、新旧の思想と生活習慣の混在が様々な社会問題を生じさせている「満洲国」像を提示する。当然、知識青年もこの中で苦しんでいる。

二－三　爵青の小説

事務会『藝文志』に、爵青は小説を三本発表している。「放浪児の回帰の日」（盪兒歸來的日子、第一輯）、「廃墟之書」（第二輯）、「麦」（第三輯）で、登場人物はいずれも近代的な教育を受けた青年である。そのうち、「麦」は原稿用紙二百枚の長編である。

「放浪児の回帰の日」の主人公麒は情熱に燃え、家を離れて新世界に逃げ出すが、九年後に情熱が冷め、故郷に戻ってくる。家族は、彼が新生活を放棄し、旧世界へ戻ったものと誤解する。驚いた彼は、九年前の自分と同じく情熱を燃やす弟と共に再び家を離れる。この小説の後記に爵青は、「旧いものは死んでいない。我々はこの放浪児と同じように再び歩き出して広々とした社会の中に入ろう」[89]と記している。

「廃墟之書」は、「半獣主義的な享楽生活」（半獣主義似的享樂生活）をしている小官吏の青年「青」が、貧しい村に学校をつくりそこの子どもたちを対象に教育活動を行っている友達「×」に宛てた手紙である。青は、いかなる生活をしているにせよ、あらゆる青年は、父親の世代が残した「旧い廃墟」（舊的廢墟）から脱出してはいても、自分たちが築いた「新しい廃墟」（新的廢墟）の中で生きているに過ぎない、と語る。

> 壊された父祖の旧い卍字形回廊の遺跡の中で、少しだけの哀れな情熱と希望にすがり、急ごしらえで土台と鉄骨を持たない華麗な小屋を立ち上げた。この工事を終わらせて離れようとする際に振り返ってみれば、この小屋は父祖の卍字回廊よりさらに貧弱で、さらに醜悪なものであることがわかった。これは、仕事の汗がまだ乾かず、喘ぎもまだ抑まっていない我々に、新しい廃墟に対する悲しみをもたらした。[90]

青年たちは、「霊魂と精神の侮辱」の近代的な知のシステムと、「生命と生存を軽視する」時代の風潮の中で生きていかなければならない。彼らがそこから逃れるには、アヘンを飲んだり、梅毒に罹ったりするしかない。そして、「現実に見捨てられた時、文学は強心剤として使われることになりがちだ。文学分野の中に、星の数ほどの作家と愛好者を見たら、この新しい廃墟を築くために、青年たちがいかに尊い犠牲を払ったか、我々は十分わかるだろう」[91]と言う。

旧家族制度を代表とする旧世界から脱出して、新世界に入る。しかし、その新世界は心地よい居場所であるどころか、そこからも見捨てられる。それで青年は文学に助けを求める。この小説は、一つの廃墟からもう一つの廃墟へと転じるしかない「満洲国」青年の苦しい精神状態を見事に分析していると思われる。「芸文志派」自身が、まさにこのような一群の青年たちであり、文学

は彼らにとって、ある意味で強心剤に過ぎなかった。この小説について、浅見淵は、次のように評している。

> 生活方向とか、人生的意義とか、それから民族意識とかいつたものが、はつきり摑めぬ満人の近代青年の内面的苦悶が、哈爾濱の廢頽面を背景にして心理的に描かれてゐるのだが、繊細で鋭く、しかも近代的情感が隅々まで溢れてゐるのである。僕が今まで讀んだ限りの満人作家の作品の中では、一ばん近代的な作品だった[92]

浅見の評価は的確だと思われる。この精神的苦悶が、「暗い」文学を書き続けた彼らの出発点なのである。

三本目の小説「麦」では、大学生の陳穆が孤独を感じて家に戻る。親を失った彼の家には巨商の伯父と新しい伯母が住んでいるが、廃屋同然である。実は、その新しい伯母朱婉貞は彼の昔の女で、彼女は再び陳穆を誘惑しながら伯母としての権威をふるい、彼をコントロールしようとする。一方、伯父の商売の実権は彼女の甥の手に握られている。このような現実に、陳穆は「迷っている」「絶望している」「何もできない」と言う。結局彼は、「新鮮」な女性、蘭珍との恋愛も叔母に妨害されてしまったことから、再び家を出て行く。

陳穆は朱婉貞を代表とする旧い世界から抜け出して、蘭珍を代表とする新世界に入ろうとする。しかし、叔母の権威に反抗することができずに逃げるしかない。陳穆はなぜそれほど迷い、絶望しなければならないのか、その理由について小説の中ではっきり言及されていない。

> 作者が表現したものはすべて一種の廃墟であり、彼にはその廃墟に芽生えた新しい生活が見えていない。我々の生きている時代は没落していくものであり、再生する時でもある。しかし、この点において、作者は完全に短視の病に侵され、明るい彼岸を見通すことができなかった。[93]

以上の文章は、「文選派」の陳因が編集した『満洲作家論集』に収録された光著「劉爵青の創作を論ず」（論劉爵青的創作）から引用したものである。作者の爵青は目の前の闇だけに目を凝らし、明るい未来が見えていないと指摘されているが、爵青は見てはいてもわざと表現しなかった可能性もある。「方向なき方向」のスローガンを掲げていた「芸文志派」は、執拗に暗い現実を描き続けたのである。

事務会『藝文志』に掲載された小説をまとめると、その暗さは以下の要素によってでき上がっていることがわかる。

①主人公は若い知識人から、労働者、農民・漁民などにおよび、特に社会の低層で喘いでいる人物が多い。彼らの目線で社会を観察している。

②これらの主人公にまつわる様々な社会問題がある。しかし、彼らには解決する方法がなく、彼らを助けてくれる者もいない。

③主人公の多くは深刻な苦悩を抱え、悲しい運命を辿る。

④結末にも問題解決策が示されず、悲しいままで終わる。

ただし、『明明』時代と比べると、「芸文志派」の作品からは、人々の苦しみは現存の社会と制度の中ではどうしても解決できない、解決しようとするなら、今の社会環境と制度を変えるしかない、という共通のメッセージが伝わってくる。疑遅と小松の作品には、革命だけが解決の方法、とさえほのめかしているものもある。彼らの作品は明白に「道」を教えはしないが、この暗さは必ず明けるという一種の無形の力を感じさせる。

では、体制側と「文選派」の反対を押し切ってまで、なぜ古丁らは頑なに暗さを守り続けたのか。古丁は、次のように述べている。

やはりその「暗さ」が目に映つて来て仕様がなかつたし、餘りに「暗さ」に埋もれてゐたせいか、「明るさ」が眩しくて目が痛いと云つても良いわけなのであります。[94]

これは日本人向けの言い方である。実際、三九年当時、毛沢東の「持久戦を論ず」が発表されて、日本の敗戦と「満洲国」の終焉を確信した作家たちは、今はひどく暗いが、もうすぐ夜が明けるよ、ということを読者に伝えたかったのではなかろうか。彼らは目に映ってきた暗さを描写することによって、光や、夜明けへの憧れを表現したと思われる。それこそ、「芸文志派」が暗さを表現し続けた本当の理由であろう。

二-四　小説以外の創作

詩の分野では、百霊が『明明』の歴史叙事詩に引き続き、「成吉思汗」（第一、二輯に連載）を発表している。外文も長詩「變」（第二輯）と「半生雑詠」（第三輯）を書いた。他に、成絃や金音の詩も掲載されている。エッセイでは、辛嘉の「松江紀遊」（第二輯）と「旅随筆」（旅窗即稿、第三輯）、少虬の「北京について」（閑話北京、第三輯）がある。脚本では、第二輯に君頤作の四幕劇「金糸籠」、第三輯に君頤作の独幕劇「漠寒」と辛実作の四幕劇「春秋」がある。また、第三輯の「日本紀元二千六百年紀念特輯」には、武者小路実篤著・古丁訳「井原西鶴」、山本有三著・外文訳「海彦山彦」、森鴎外著・莫伽訳「阿部一族」等が並ぶ。事務会『藝文志』に掲載された翻訳の原文のほとんどは日本語であった。

芸文志事務会は、満日文化協会を通して民生部の援助によって

創設された文学グループであり、『藝文志』もその援助を受けて刊行された文芸誌である。いわば、「満洲国」当局が用意した枠の中で、古丁らは、旧体制派の文人たちと手をつないだり、「明るい」作品を掲載したりと妥協しながら、自分たちの文学理念に沿って、暗い作品を書き続けた。

第三節　その他の出版物

一．広告にとどまった出版計画

満日文化協会の後援を受け、芸文志事務会は精力的に出版活動を行おうとした。事務会『藝文志』第三輯の奥付には「藝文志事務會發行新刊豫告」という見出しと共に、以下の四つの広告が掲載されている。

①『藝文志』第四輯

「新しい姿、整った内容」（將以嶄新之姿態、完整之內容）で九月末に登場する予定。「長編小説が本輯の特徴となる」（長篇小說為本輯特色）。

しかし結局、『藝文志』第四輯は世に出なかった。その代わりに、長編小説集『小説家』という「芸文志別輯」が刊行された。

②「讀書人文庫」

「満洲出版界の貧困と読書人の意気消沈の問題の出口を探るために、多分野にわたる廉価な文庫本を発行する。科学的な知識啓蒙を目標とするため、その内容は文学と哲学に限らず、天文地理や人間社会に関するすべての問題を翻訳紹介する。それを以て満洲出版界の空白を埋める。携帯し易いように、サイズを小さめに抑え、芸術的な装丁とする。月に三冊発行で、一冊あたり三万字程度を予定」[95]

この広告は、計画通りに刊行されなかった「城島文庫」を連想させる。古丁らは、多分野の知識を紹介する文庫の夢を捨て切れなかったようだ。これも結局、「城島文庫」同様、途中で流れてしまったようである。

③「藝文志叢書」

「芸術の色香が備わった文芸作品」（具有藝術香色之文藝作品）で、作家の創作集とされているが、世に出たものを見ていない。これも計画にとどまったらしい。

④「讀書人連叢」

「文学、映画、演劇、美術、彫刻…等、文化の各分野に関するもの」（文學、電影、演劇、美術、雕刻…與各文化部門有關文字）で、「文章は短く、立論は公正、かつ建設的であることを前提とする」（文章簡短、立論公允、而以建設為前提）とされているが、結局、『読書人』『文学人』『評論人』の三冊しか出版されなかった。

以上の広告から、芸文志事務会は『明明』以来引き続き、日本の出版界を真似て、「満洲国」の出版界を活性化させようとしていたことがわかる。その目的は文芸の振興だけではなく、科学的知識の啓蒙にもあった。それは満日文化協会の「満人」出版を振興するという目的にも適っていたはずである。しかし、刊行が実現したのは、『小説家』一冊と「読書人連叢」の三冊にとどまっている。「城島文庫」の失敗は出版社の利潤追求に関係するが、官庁の援助を受けていた芸文志事務会がなぜ再び失敗したのか、その原因をはっきり説明する資料が見つからない。だが、当時の状況を見ると、いくつかの原因が考えられる。

最大の原因は、資金源を失ったことであろう。四一年一月に「国務院総務庁分科規程」が発布され、それまで民生部に委ねられていた文化事業の権限（検閲を含めて）が、武藤富男を処長とする国務院弘報処へと一元化されることとなった。それに伴い、民生部の外局として「満人」文学などを支援していた満日文化協会の権限も弘報処に移る。そして、同年三月に「満洲国」国務院総務庁弘報処から『藝文指導要綱』が発布され、政府が求める文学活動の在り方が法律の形できちんと規定された。八月には従来の文芸家グループが改組され、「満洲国」文芸家の一元的な組織、満洲芸文聯盟が結成され、さらに一二月に対米英戦争が始まると、文芸家に対する統制はいっそう厳しくなる。こういった状況の中で、活動を開始したばかりの「満人」文学出版は直ちに萎えてしまったと考えられる。

また、四〇年六月に『藝文志』第三輯が出てから四カ月後の一〇月、企画係の司務主任だった古丁が健康隔離のために編集現場から離れてしまったことも大きな原因の一つであったろう。「讀書人連叢」の『讀書人』と『文学人』は、それぞれ四〇年の七月と八月刊行で、いずれも古丁が隔離される前に出版されている。一方、『小説家』の印刷は四〇年一一月二五日で、その編集は古丁がいた間にされていたはずである。いずれにせよ、満洲文壇の振興と民衆への啓蒙を図った古丁らの野心的な出版計画は再び挫折してしまったのである。

二．芸文志別輯『小説家』

『小説家』は総頁数二八二頁で、『藝文志』別輯として四〇年一二月に出版された（本書口絵参照）。その中には小松「部落民」、石軍「隠疚」、田兵「江上之秋」、疑遅「塞上行」、沫南「某城某夜」、爵青「新傳説」と、計六本の小説が収録されており、巻末に、爵青による「輯後」がある。予告には古丁の小説も見えるが、実際には掲載されていない。では、『小説家』とはいったいどのような内容なのか。

小松「部落民」では、山東省から来た王八大爺が、松花江の洪水の際、自分の愛人である女性を助けるために友だちを殺してその舟を奪う。しかし、女性が死んだと聞くと、彼も洪水に飛び込んで死ぬ。そこで、王の友人である匪賊上がりの劉車把は、七年の歳月をかけて、王の死体を山東省の故郷に送り返す。やがて劉が再び満洲に帰って来た時には、元の部落は消えていて、劉の妻も行方不明になってしまっている。

石軍「隠疚」には、農民の土地を奪って金持ちになった商人、孫香亭の生活が描かれている。道徳会や協和会の要職を務める彼は、ある日の講演の壇上で、彼に土地を奪われた人たちに詰問されて死にそうな目に遭う。欲望のままに他人の土地を奪って家財を築き上げたものの、大勢の恨みを背負って不安な毎日を送る資産家の物語である。

疑遅「塞上行」で語られるのは、蒙古の荒漠の中の小さい村での出来事である。匪賊上がりの劉進は、蒙古人に雇われて馬を放牧している。ある日、馬を買いに訪れた商人王振海に誘惑され、村民賈奎の妻が自殺してしまう。その経緯を知った劉進は、土の中に埋めていた銃を掘り出して、王振海を追う。匪賊から足を洗った人間が、汚い現実の中、再び殺人者になってしまうのである。

爵青「新傳説」は、医者の物語である。青年医師の呂奮は、入院した肺病患者の少年や、他人の霊魂を助けようとする潘牧師や、ある中学校の校長の養子となった弟のことで悩んでいる。彼は十歳下の弟に自分の夢を託したいと願うが、校長から弟を取り戻すことができずにいる。そのため、彼は多量の強心剤を危篤に陥っている校長に注射して死なせるが、結局、校長に教育された弟を奪い返すことはできずに終わる。民衆の肉体を助けようとしてもできない、社会の夢を実現させようとしてもできないという、青年医師の悩みを描いている。

以上の小説の主題は、自然災害に遭遇した人びとの生き様、貪欲な資本家の日々、一人の人間に殺人を起こさせる現実、青年知識人の悩みなど、いずれも「満人」世界での出来事であり、色調は相変わらず暗い。その中で、田兵の「江上之秋」と沫南の「某城某夜」は異色の作品である。

田兵「江上之秋」の主要な登場人物は、日本人の鉄雄と細羽、そして通訳の王である。細羽は「××県江上捜査班」のリーダーで、川で活動する匪賊を撲滅した功績により表彰状を受けている。鉄雄については、具体的な職業が明記されていないが、政府の役人だと思われる。

葉が半分乾いている長い葦の間から小さな船が出てきた。上に四、五人が乗っている。それは決して善良な人びとではない。いや、善良な人間であっても構わない、この禁漁区に

入り込んでいるのだから、と思い、ダビトフとスイェフスキに発砲を命じた。そのうち三人は弾が命中して死んだが、残りの奴らは逃げてしまった。（略）近づいてよく見ると、建築道具を持っている労働者たちだった。いくつか破れた布団が転がっている。船板は血に赤く染まっている。死んだのは確かだ。

「おい、建築労働者がどうして匪賊と言えるんだ」

「これにはわけがある。ここの匪賊は一般人と見分けがつかない、おまけに彼らはよく偽装するんだ」[96]

以上が、細羽が、自分の管轄する川で「匪賊」を撲滅した英雄譚を鉄雄に吹聴している場面である。実際に細羽が殺したのは建築労働者だったにもかかわらず、それを匪賊と偽って表彰状をもらったのである。つまり、捜査班は匪賊を撲滅するという名目の下、何の根拠もなしに恣意的に殺人を犯している。ところが、その殺人行為は追究されるどころか、政府から表彰までされるという、「満洲国」のおかしな現実が暴露されている。

しかし、鉄雄は笑った。これらの愚かなものは、蜜を作っている蜂、糸を吐いている蚕のように忠実だ。恨みを顧みず、享楽にだけ知識と力を使いこんで、その煙管の細い穴の中に日に日に深く入り込んでいく。吐き出された煙は、血と肉によって作られた気体であり、それは日に日に減っていく。今月末から当局がここを接収するが、彼らはまさに政府の魚肉となる。これからは、彼らの命を消すために使う火と薬は私のところから供給されるのだ。これは彼らにはまだわからないだろう。[97]

以上は、鉄雄が「管煙所」、つまり、アヘン窟の中でアヘン中毒者を見ながら考えていることである。中毒者はアヘンを吸って享楽にふけっているが、実は彼らの血肉は、鉄雄を代表とする「官家」（政府）に吸われている、と告白する。

今回の商売は政府に買収され、委託経営されるので、もっと儲かるだろうと、彼はとてもうれしくなる。（略）宋にとっては、鉄雄も財神爺と同じで、彼が来ると聞いた途端、うれしくて飛び上がりそうだ。先日鉄雄に商品券を贈った時に言われた言葉や、彼の家具、彼の将来――将来は真っ赤な雲のように彼の胸に広がっている――を思うと、彼は酔っ払ったようにうっとりと走り出したくなる。今回は鉄雄を泥酔するまで飲ませ、その後賽粉糰のベッドに送り出すことも彼の計画の一環だ。彼はとてもうれしい。自分の成功を喜んでい

る。[98]

これは、「管煙所」の経営者、宋の心理描写である。彼は自分の商売のために、金儲けのために、多くの女たちの元に通うために、鉄雄に商品券や女を贈ったりして一生懸命に媚びる。宋の貪欲さと卑怯な性格がよく現れている。

細羽はロシア人を使って人を濫殺し、鉄雄と宋は利益のために結託する。これなどは、「満洲国」で実際に見られた、もう一つの「民族協和」像ではないであろうか。

従来の「満人」小説に、日本人が登場することはほとんどなかった。出てきたとしても、正面から描写されたことはない。一方、本作品では日本人を主人公にするだけでなく、彼らを、残忍で利己的で地元民の命も生活もどうでもいいと思っている、いや、食い物にする「満洲国」政府の代表として描いている。田兵はこの作品によって、「満洲国」政府の暗黒面を明らかにすると同時に、真っ向から日本人を批判している。

沫南「某城某夜」に描かれるのは、十年来の友人同士である陳柏陽と王恵明をめぐる出来事である。陳柏陽は鉱山の持ち主で、王恵明はそこに雇われている炭坑労働者である。王恵明は労働者の代表として、労働条件の改善と賃上げ要求のために陳柏陽と交渉する。しかし、陳は少しも譲歩しようとしない。そればかりか、鉱山の役員にすることを引き換え条件に、逆に王を説き伏せようとする。しかし、王は断る。そこで陳は、自宅に王を監禁してしまう。

恵明は考えているうちに、怒りの炎が燃え上がるのがわかった。彼は再び、鉱山の地雷の爆音を聞いたようだ。その爆発音と共に、常に労働者の死と重い傷跡がある。血、呻き、必死な闘いと叫び、労働者の妻や娘の号泣、生き続けることに対する絶望。冷笑と恨み、騙しや激怒を織り交ぜて、まさに人間界の地獄絵巻が広がっているようだ。[99]

王恵明は、陳柏陽のことを「大きな寄生虫」のように思い、ますます彼を許せなくなる。そして、夜中に王は陳を殺して脱走する。

今夜は夢を見ているようだ。一つの廃棄物、一匹の寄生虫に過ぎないその無頼な生を、このナイフで終わらせた。そのことだけは夢ではない。（略）今夜の私の行動は全く間違っていた。なぜなら、地上の寄生虫は多すぎて殺し尽くせないことを知っているからだ。[100]

階級的な感情は十年間の友情に勝る。労働者は資産家と談判し

ようとしても相手にされず、労働問題を解決するには資産家を殺すしかない、と語っている。共産党員である沫南の激しい革命思想が現れているこの種の作品は、「芸文志派」の創作には見られないものである。

田兵も沫南も「芸文志派」のメンバーではない。この二篇の社会批判の鋭さは、「芸文志派」の「暗さ」を遥かに超えている。「満洲国」建設のロマン主義文学を求める総務庁から見れば、これらはかなり挑発的な存在と映ったであろう。このような作品を掲載した「芸文志派」の政治的な立場がうかがえる。

> 満洲の文学、（略）その作品はどうしても低調である。本小説集の低調さも隠せない事実だ。我々は、低調な文学が読者にプラスの影響を与えるとは思わないが、低調な文学が読者に必ずしもマイナスの影響を与えるとも思わない。泰然自若と、無益はおろか有害なことにも勤しんでいる人間がいる時、このような低調な作品を読者に手渡すことができる。このことに、我々は確かに魔法にかかったように純粋な無上の幸福を感じている。（略）我々は、文学が人の害とならないように、注意深く気をつけている。[101]

右は、『小説家』の「輯後」として爵青が書いた文章であるが、ここで言う「低調」の意味がもう一つはっきりしない。もし、「人の害とならないように、注意深く気をつけている」ことを意味するなら、批判精神に溢れた「江上之秋」と、激しい階級闘争を描く「某城某夜」は当てはまらない。また仮に、従来の「暗さ」を指しているなら、この二作品はやはり除外されることになる。ところで、「芸文志派」は『小説家』あたりから、「暗さ」を守りながら「文選派」の批判にも耳を傾けているように見える。「芸文志派」と「文選派」は完全に対立したグループではなく、深いところではつながっていたのである。爵青は、「文学が人の害とならないように気をつけている」と言うが、一方で、「これ以上はできない」と訴えているようにも読み取れる。

「藝文志別輯」は、『小説家』以降も続けて刊行すると予告されていたが、結局、この一冊のみにとどまっている。それはあながち不思議でもない。

三．「讀書人連叢」――『讀書人』と『文学人』

「讀書人連叢」としては、『讀書人』（一九四〇年七月）、『文学人』（一九四〇年八月）、『評論人』の計三冊が出版されたといわれるが、『評論人』について筆者は未見である。

「連叢」の第一冊『讀書人』の表紙には、英国の作家ディケンズ

が羽根ペンを持って何かを書いている「仕事中のディケンズ」（迪根斯在工作着）がデザインされている。そして、目次の挿絵には、右から順に、ロマン・ロラン、魯迅、夏目漱石、プーシキン、ゲーテ、ゴーゴリ、バーナード・ショー、アンドレ・ジッドの肖像が並ぶ。これらの肖像は第二冊『文学人』の目次の挿絵にも使われていることが確認された。なぜ、この八人なのか。

一九一五年に『ジャン・クリストフ』でノーベル賞を受賞したロマン・ロランは、反ファシズムの作家として有名で、第一次世界大戦の時、フランスとドイツ両国の偏狭な愛国主義を批判し、三一年の日本の満洲侵略を非難した。三二年には、アムステルダムで開催された「反戦全世界大会」をバルビュスと共に主導している。ところが、翌三三年八月にバルビュスをリーダーとする国際反戦調査団を歓迎するために中国左翼聯盟北方部が準備会議をしていた時、古丁の後ろに付いて来た国民党特務によって、大会の代表者がすべて逮捕されるという事件が起こる。『明明』にも『藝文志』にも、ロマン・ロランの作品の翻訳は発表されていなかった。

ロシア近代文学の嚆矢とされるプーシキンは、その代表作とも言える『エヴゲーニイ・オネーギン』の中で一九世紀前半のロシア人の生活を描いている。主人公オネーギンは、優れた才能の持ち主でありながら、上流階級の社交生活に倦み疲れ、何か有益な仕事に携わろうとするがそれにもすぐに飽きて、何の実りも生み出さない生活を続け、孤独に陥るばかりである。このようなオネーギンは、「芸文志派」の作品にしばしば登場する知識人像に幾分似ているように思われる。社会に満ちていた虚偽と不正を批判し、自由への道を強く主張したプーシキンに、「芸文志派」は共感を抱いたことであろう。雑誌『明明』には、プーシキン関係の作品が何本も掲載されている。劉郎（疑遅）訳「冬の朝」（冬晨、第三巻第一期）、滕更（外文）訳「エジプトの夜」（埃及之夜、第三巻第二期）、莫伽著「プーシキン評伝」（普希金評傳、第三巻第六期）等である。

調和と普遍的人間性に基づくドイツ古典主義文学を確立したといわれるゲーテは、その小説『若きウェルテルの悩み』と長編戯曲『ファウスト』の中で、恋心、自我、孤独、エゴイズム、理想など、人の生と心理を見事に描いている。人間そのものについての描写法は、「芸文志派」がぜひとも身につけたい文学的技法であった。

ゴーゴリの『死せる魂』には、死んだ農奴のリストを利用して金を手に入れようとする、農奴制改革前夜のロシア農村の醜悪な交易風景が描かれている。この小説の中国語訳は魯迅が手がけたが、完成できずに終わっている。『狂人日記』は、古丁により翻訳された。ゴーゴリは皮肉な筆致でロシア社会の醜い面をあぶり出

し、社会改革の志向を顕わにしている。

一九二五年にノーベル賞をもらったバーナード・ショーは、ソビエト連邦や共産主義に賛同したことがある。社会主義者だった彼は、文学者の枠を超え、反骨の知識人として皮肉な口調で積極的に発言していた。

アンドレ・ジッドは、共産主義礼賛からソビエト批判に転じたことで知られる。爵青がジッドの『背徳者』（『文選』第一輯）を翻訳し、古丁らは、文学を「狭き門」に喩えている。

魯迅は、古丁がその精神を大いに学んだ作家であり、夏目漱石の『こゝろ』も「一夜」も古丁によって翻訳されている。

「讀書人連叢」の目次の挿絵に登場した八人は、いずれも「芸文志派」が憧れていた作家だったと思われる。『明明』ではこの他に、ゴーリキー、バルザック、サンドバーグらが翻訳紹介されている。彼らは、少なくとも以下のような特徴を持つ。

①優れた創作成果を残している。

②社会生活に積極的に参加して、現存制度を批判し、改革を希求している。

③主に社会の底辺に生きる人びとの生活を見つめ、その喜怒哀楽など人間の心理や感情を見事に表現している。

紹介された作家たちがこの三点をすべて備えていたというわけではないが、古丁を中心とする「芸文志派」はそのような方向を目標にしていたと思われる。「方向なき方向」はこの時期、一定の「方向」に向かっていたように見える。

なお、『讀書人』には、「讀書人連叢」刊行の辞が掲載されている。

「讀書人連叢」は我々の私財ではないが、読書人ではない人の指図を許さない。これが我々の保持すべき潔癖さだ。「讀書人連叢」は我々が誇るものではないが、読書人ではない人がとやかく持ち出す議論を信用して従うことは決してない。これが我々の持つべき執拗さだ。我々は潔癖かつ執拗に、読書人ではない人との議論を断る。しかし、読書人である人の意見なら、たとえ一言でも虚心に聞き入れようとするだろう。[102]

ここで言う、指図したりする「読書人ではない人」とは、どのような人びとであろうか。それは例えば、「今までの文学は人殺しだ」と言ったりする、岡田益吉を代表とするような行政の人びとではないか。文学者の潔癖さとは、すなわち文学者独自の世界、文学者のプライドと理解できる。目次の挿絵にある八人の作家の似顔と、上記の刊行の辞を重ね合わせると、「芸文志派」が当局に宛てた文学者の宣言のように読み取れる。いわく、我々が目指しているのは、反満抗日でも建国ロマンでもなく、社会批判だ。我々の目標は、夏目漱石を含めた世界的に偉大なこの八人の作家

たちだ。あなた方は写実主義を人殺しだと言うが、あなた方は読書人ではなく文学のことを知らないので、指図をやめてください。我々は文学者の在るべきプライドを持ち、行政から独立して文学の在るべき浄土を守る。我々は執拗に文学活動を行うが、読書人以外の人の指図や意見は断る、と。

このようなメッセージは、行政を黙らせると同時に、「芸文志派」や『藝文志』に期待する人びとへの回答だったとも言えよう。社会批判的文学の旗印の下、暗い現実社会や、体制側の批判などを自由に書くことができた。古丁らは、社会批判的文学を行政側と闘う合法的な手段として使っていたとも言える。

では、それに対して行政側はどのように反応したのだろう。それをまだ見ないうちに、古丁は健康隔離されてしまう。また、四一年に入ってからの機構改革によって、芸文志事務会の出版計画の実現は不可能となり、さらに戦時文芸家体制の確立によって、古丁らの文学空間はますます狭まっていった。そして、日本対米英戦争の開始後は、西欧の知性に対する批判が求められ、上記の西欧の作家たちと「芸文志派」との関係は絶たれることになる。

芸文志事務会のその他の出版物としては、満日文化協会・詩歌叢刊刊行会から発行された「詩歌叢刊」がある。成絃『青色詩抄』、百霊『未明集』、小松『木筏』、古丁『浮沈』が、いずれも同シリーズとして三九年に刊行されている。ここでは、著者と題名の紹介のみにとどめたい。

第三章　聯盟『藝文志』

満洲芸文聯盟結成後、一九四二年一月に芸文社発行の『藝文』、同年二月に芸文聯盟発行の日満語版『満洲芸文通信』が創刊される。ところが、漢語版の機関誌は未だ発行されていなかった。古丁らは満洲芸文聯盟の漢語機関誌の創刊を呼びかけ、翌四三年一一月、芸文書房から聯盟『藝文志』がついに創刊された。同年九月には、重慶を足がかりに「満洲国」の鞍山や大連にアメリカのB二九戦闘爆撃機が飛来し、日本の敗戦が予告されていた時期である。

第一節　創刊の経緯と編集上の特徴

一．創刊について

『藝文』は日本人文化人の言論発表の場となり、読者も日本人であった。しかし、その一方で、漢語の雑誌がなかった。芸文聯盟の結成後、以前から活動していた「満人」文学グループが自然消

滅し、それまでの文学活動も停止してしまう。事務会『藝文志』『文選』『学藝』『作風』など、四〇年前後に刊行されていた文学雑誌はすべて停刊となり、「満系」作家が活躍する場が失われた。古丁らは漢語機関誌の創刊を呼びかけ、日本文化人もそれに関心を寄せるようになっていく。林房雄が満洲を訪問し、古丁と対談した際にも、その話題が出ている。

林：（略）言語の問題ですかね。（略）例へば日本語の「藝文」が出て満語の「藝文」がない。これなどは大きな問題ですからね。

古丁：これは藝文指導要綱の問題ですがね。その理念は非常に結構なものだと思つてゐるがやり方として日系方面のものを主にやると云う事は考へ物である。（略）藝術部門だけは、指導方針は日本人が持つて居つて、全部下を滿系にやらしたらどうかと思ひますね。（略）量的に見ても此方が四千萬だからそれに呼びかけるものがなければ國家としても一種の損だし、特に今度の大東亜戰爭の場合、そういふ必要が感ぜられますね。

記者：満語の藝文はどうなつてゐますか…

古丁：将来當然出なければならぬと思はれるが、紙の問題などもあるんでせうね。[103]

古丁の話をまとめると、「満語」の『藝文』が出ていない理由としては、行政の「日系方面のものを主にやる」という施策と、紙不足という問題があった。日本人関係のことを主にやっているから、なかなか「満人」の問題に気づかない。それで、「満語」の雑誌が遅れてしまったというのである。「満語」の『藝文』を必要とする理由としては、四千万人の国民に呼びかけ損なえば国家の損失となる点、また、大東亜戦争にあたって、「満人」への呼びかけをより重視する必要がある点、などが挙げられている。これらは「満洲国」側に立った堂々たる理由で、「満人」作家の心からの声として受け止めるべきであろう。

実は、漢語文芸誌の出版は、古丁だけではなく、「満人」作家すべての希望であった。

純文芸雑誌の創刊、それは幾年にもわたる滿洲文学界全体の希望であったが、今日になってようやく現実のものとなった。これは喜ばしいことで、どの方面から見ても、文壇創設以来十数年のうちで最も大きな収穫と言えるだろう。[104]

以上の文章は、聯盟『藝文志』が創刊されて三カ月後に、呉郎

によって書かれたものである。『藝文志』の創刊を、十年来の「最も大きな収穫」と高く評価する言外に、実現を喜ぶ切実な気持ちと創刊までの努力の跡が読み取れる。

このようにして、満文文学雑誌編集企画委員会が設立され、委員長に古丁、副委員長に呉郎が就いている。委員には、山丁・小松・天穆・外文・田兵・石軍・夷夫・安犀・呉瑛・冷歌・辛實・金音・秋蛍・疑遅・爵青・山田清三郎・大内隆雄らの名が並ぶ。この顔ぶれを見ると、元論敵の「芸文志派」と「文選派」が一つのグループとなり、力を合わせて一つの雑誌の企画編集に携わったことがわかる。これは、政府の一元的な組織、満洲芸文聯盟の旗印の下だからこそできたことであろう。なお、山丁や呉郎らが文芸月刊誌の編集に参加したのはこれが初めてであった。おそらく、それもあって呉郎は、「十数年のうちで最も大きな収穫」と言ったのであろう。聯盟『藝文志』は、事務会『藝文志』と同じ誌名を使ってはいるが、その性格はもはや同人誌ではなく、戦時下における満洲芸文聯盟の機関誌であった。

四三年一一月、漢語の月刊文芸誌『藝文志』が、芸文書房からついに創刊された。翌年の一〇月までに、計十二号が発行されている。編集人は趙孟原（小松）で、発行人は、第一・二期には芸文書房の張松亭であったが、第三期には宮川靖五郎に変わっている。そして、第四期には再び張松亭に戻り、第五期からはまた宮川靖五郎となった。ちなみに、宮川靖五郎が発行人を務めた号の表紙には、「満洲藝文聯盟機関誌　藝文書房發行」とあるが、そうでない場合には記載がない。これは、『藝文志』と満洲芸文聯盟の関係に対する、芸文書房からの何らかのメッセージだったのかもしれない。聯盟『藝文志』は、「満洲国」唯一の漢語文芸誌となった。

二、性格

『藝文志』創刊号の第一頁に、「藝文志發刊祝詞」が掲載されている。作者は当時の弘報処処長、市川敏である。文章の中には『藝文志』が担うべき任務や目的、芸文家の使命が記されている。まず、目的は以下の通りである。

> このたび芸文聯盟は、芸文の普及を図り、芸文家の創作活動を旺盛にし、また、後進を指導育成するために、雑誌『藝文志』を発行することにした。[105]

そして、芸文家の使命を、次のように述べる。

> 一つは、芸文の総力を挙げて聖戦に協力すること。すなわち、戦争意識を高揚させ、戦時生活を潤す。それによって、

国民が力を尽くして奉公することができ、戦力が増強され、親邦に聖戦を完遂することができるようにする。もう一つは、新しい東亜の文芸を創造すること。すなわち、米英の退廃芸文を駆逐して、新たな東洋道義に基づき東亜復興を象徴し、肇国精神を顕現するような芸文である。[106]

つまり、今後本誌に発表される内容は、①聖戦協力（戦意高揚、戦時生活を潤す）、②米英頽廃文芸の駆逐、③東亜文芸創造（東洋道義に基づく、東亜復興を象徴する、肇国精神を顕現する）の三つの使命を帯びたものと言う。創刊した行政側がこの雑誌に最も期待していたのは、国民四千万人に対する呼びかけの実効性だったと思われる。

『明明』時代は、行政の要望により、関東軍報道班の柴野少佐の文章が発表され、満人青年に明朗さと活発さを喚起した。政府が資金を提供した事務会『藝文志』創刊号では、総務庁参事官の岡田益吉が、「人殺し」の写実主義から、満洲建国や大東亜新秩序建設の夢を表すロマン主義文学への移行を要望した。そして、総務庁弘報処の管理下に置かれた聯盟『藝文志』では、弘報処処長の市川敏が、聖戦協力、米英頽廃文芸の駆逐、東亜文芸の創造という要求を打ち出している。「満洲国」の文芸政策に対する行政側の規制が次第に強まっていった様子がわかる。では、「米英の頽廃芸文」とはいったい何を指しているのだろう。「讀書人連叢」の目次挿絵に見られた欧米作家の作品も含まれているのだろうか。また、「新たな東洋道義に基づき東亜復興を象徴し、肇国精神を顕現する芸文」とされた「東亜の芸文」とは、具体的にどのような内容だったのか。これらの言葉に関して、日本人文化人は多少のイメージを持ったかもしれないが、文化的背景と土壌の異なる「満人」にとっては意味を捉えにくかったのではないか。古丁らの文芸の道はこれによってますます狭まり、まさしく「狭き門」の時代となった。

創刊号には、日本の小林秀雄からの寄稿「文学者の提携」（文學者的提攜）と、建国大学で教鞭を執っていた艾凱德博士の「現代ドイツ文学」（現代德國文學）が掲載されている。その他、文芸家協会の委員長であった山田清三郎の「生産文学よ、繁興せよ」（生産文學啊，繁興罷）や、大東亜文学者大会特輯など、戦時色が濃い物も見られた。創作は三篇（疑遲「寒流」、爵青「魏某的浄罪」、小松「隣人語」）あるが、いずれにも特に、聖戦協力、東亜復興、肇国精神などの内容は見出せない。「新人創作徴集」と「藝文志賞制定発表」などの企画は、市川の言う「後進の指導育成」にあたるであろう。

「編輯後記」で編集者は、創刊号の内容が乏しいことを詫びる一方、「直接本誌に関係する芸文聯盟が、我国の芸文を推進する見地

から、本号にも援助してくれている。（略）我々は今後、関係方面の期待を裏切らないように努力していかなければならない」[107]と、芸文聯盟との関係に触れている。つまり、編集者側から見ると、満日文化協会が事務会『藝文志』を援助したように、芸文聯盟は聯盟『藝文志』を援助していた。事務会『藝文志』が基本的に芸文志事務会のものであったのと同様、聯盟『藝文志』の主体も、「関係方面の期待を裏切らないように努力」する「我々」「満人」作家である、という宣言のようにも読める。

続いて、「編輯後記」では以下のような抱負も語られている。

①文芸作品の他に、学芸論文も掲載する。②毎号、日本の文学作品を一本ずつ紹介する。③新人を発掘するために芸文賞の制定を発表し、新人作品の募集を行う。

これらを見ると、聯盟『藝文志』の編集方針は、『明明』や事務会『藝文志』と変わらず、創作や翻訳を載せるものであったことがわかる。冒頭の市川敏の文章に言及された時局の変化や、聖戦協力、東亜文芸などの言葉は、編集者の頭にはまだ刷り込まれていなかったようである。聯盟『藝文志』の創刊当初、芸文聯盟との関係は実際その程度のものだったのか、あるいは編集者が市川の言をわざと無視しただけなのか。発行人が芸文書房側の人物となっていることから、おそらく当初は編集者に一定の自主性が認められていたと考えられる。もしそうであれば、発行人を芸文書房のままとして、古丁らの自主性を許すかどうかをめぐっては調整に相当手間取ったことだろう。結局、「滿洲藝文聯盟機関誌」となったため、彼らの自主性は認められず、芸文聯盟に定められた方針に則した編集しかできないこととなった。

それでは、聯盟『藝文志』とは、いったいどのような内容のものだったのか。行政側の要求に対し、編集者はどのような意志の下で折り合いをつけていたのか。以下、それについて検討する。

第二節　聯盟『藝文志』の内容

一．「聖戦」協力

聯盟『藝文志』は満洲芸文聯盟の機関誌である以上、その役割を果たさなければならなかった。時は戦時下であり、作家たちの活動は一元的に統制されていて、ごまかすことなどまず無理であったろう。聯盟『藝文志』には、戦意高揚のためと思われる小説や報告文が数多く掲載されている。この時期の小説の主題としては、「民族協和」「勤労増産」「鬼畜米英」が最も多く見られた。古丁の「新生」「下郷」「西南雑感」等については第三部で検討したので、ここでは、それ以外の作者の作品を見てみよう。

一－一　疑遅

満洲雑誌社の編集部長になった疑遅は、『麒麟』と『電影画報』両誌を編集しながら、『藝文志』でも相変わらず活躍していた。発表した小説には、「寒流」（創刊号）、「敵愾と童心」（敵愾與童心、第八期、一九四四年六月）、「曙」（第九期、一九四四年七月）、「望」（第一〇期、一九四四年八月）、「明」（第一一期、一九四四年九月）等がある。そのうち、「凱歌三部曲」と言われる「曙」「望」「明」は、当時の「満洲国」の代表的な作品と言える。内容は、沙嶺村の村民、呉海亭という人物を中心とする、大東亜総力戦時局における農村の増産物語である。呉家は地主で、使用人もいる富裕な農民である。六人家族だが、弟の海山が入隊しているため、家の畑仕事の手伝い人を二人雇っている。そこの屯長は崔という朝鮮人で、呉海亭の友人の中には、稲の作り方を教えてくれる谷森という日本人もいる。また、老馬頭という、アヘンやヘロインの常習者がいて、土地を持たない彼は息子の馬金昇と共に、他人の作物を盗んだりして生きている。やがて、老馬頭は病院で麻薬から脱け出し、再び村に戻って増産に力を尽くすようになる。馬金昇も真面目な勤労青年となる。この登場人物の設定だけ見ても、民族協和、勤労増産、米英打倒（アヘンは英国の犯罪）をモチーフにした物語であることがわかる。

第一部「曙」は、呉海亭の大根畑から始まる。馬金昇が大根を盗んでいるところを呉海亭に発見され、蹴られる。「許してください、もう二度としません」と謝る馬金昇に、呉は言う。

> お前は本当に馬鹿だ。国を挙げて増産を叫んでいる今、お前は我々の増産に協力するどころか、他人の物を盗んでいる。金昇、お前の行動が正しいかどうか、胸に手を当てて考えてみなさい！[108]

この書き出しに注目しよう。疑遅のそれまでの農村題材小説の主人公は、ほとんどが土地を持たない赤貧の農民であった。どの物語もそのような主人公の目線で展開され、貧しくとも何とか生きようとする人びとに共感を寄せた内容となっている。それに対して、「曙」の主人公は貧しい馬金昇ではなく、地主の呉海亭であり、物語世界は呉海亭の目線によって展開されている。呉から見れば、馬金昇の盗みは生きるための仕方のない行動などではなく、他人に害を及ぼす犯罪である。馬金昇は同情されるどころか、悪者と見られている。

同じ農村を題材にした作品でも、非聖戦協力ものと聖戦協力ものとの違いは、主人公の境遇と、その目が映し出す世界観の違いにある。無産農民から見た世界と、地主で使用人も抱えている農民が見る世界は全く別のものである。赤貧農民の場合、農村社会

を下から見上げるが、富裕層は上から見下ろす。したがって、小説には異なる世界観が現れる。この変化は疑遅の作品にのみ見られるわけではなく、古丁の作品（例えば「下郷」）をはじめとする聖戦協力作品に共通の特徴である。

また、呉海亭の台詞に「国」という言葉が登場するように、彼個人の行動が、国や国家政策に直接つながっている点にも注意を払うべきである。従来の農村題材小説では、困窮した農民は、金や食べ物など身の回りのこと以外には何の関心も持たないし、持ちようもなかった。国や国家政策など彼らには全く関係がなく、国に対する意識も全く持ち合わせていない。その意味で、呉海亭は疑遅の作品に登場した全く新しいタイプの農民と言える。この変化はおそらく、協和会と興農合作社の工作活動と、総力戦の宣伝によってもたらされたものと思われる。

物語の進展に伴い、主人公は生活のすべてを国策中心に考えるようになり、国策や大東亜戦のスローガンを頻繁に口にするようになる。農民らしさが次第に希薄になり、あたかも国策宣伝のラッパと化したかのように感じられる。作者は書き進めていくうちに、聖戦協力のスローガンに惑わされてしまい、登場人物の性格や行動の行方を見失ってしまったのかもしれない。

次に、第二部「望」の中で呉海亭は、

「敵の米英の反撃はどれほど激しいことか。相手が死ぬか、おれたちが死ぬかだ。日本の婦人は男と同じく工場で働いていると聞くが、我々満洲の女はちょっとだけ多くやると不満を言うんだ。」[109]

と、妻を怒鳴り、また、

「我々満洲国において、特に今の時局では、田圃で働いている者でもちっとも気弱じゃない。国にとって家にとって自分自身にとっても、今の世の中はいつの時代と比べても格段にいいものだ」[110]

と、時局下の農民の生活を評価する。そして、

自分はもはや銃を背負って国を守る年齢ではない。銃後で中年として身をもって報国しようとすれば、農作増産の面で献身する他ない。[111]

と、その報国心を増産で実現させようと決意する。

しかし、第三部「明」では、兵役満了して帰郷した呉海山が、次のように独白している。

「兵隊になるのは国民の一つの光栄な任務であり、国を守り、郷土を鎮護するのは青年の天職だ。それがどれほど羨ましいことか。（略）東亜十億民族を解放しようとする大東亜戦の決戦にあたり、私は何と銃を下ろして故郷に帰ってしまった。これから自分の身は何の役にも立たないことを限りなく恥ずかしく思っている」[112]

兵隊生活の回想場面では、卵を持ってきた年寄りの女性の話を思い出す。

「私には子どももいないし、連れ合いも早く死んだ。卵は私の飼った鶏が産んだもので、あなたたちのために持って来たのだ。夜用事がない時にでも、煮るなりして食べなさい。（略）あなたたちは毎日八路軍と戦って、本当にご苦労様。これは私のほんの気持ちだ」[113]

女性の言葉から、呉海山ら兵隊が参加した「聖戦」とは、抗日八路軍との闘いであることがわかる。

一－二　小松

この時期、小松は、『藝文志』の編集者として働きながら、「隣人語」（創刊号）、「北辺」（第二期）、「静かなる暖流」（第三期）、「鉱山旅館」（第八期）等の小説を発表している。ここでは、「鉱山旅館」について見てみたい。

この小説には、総力戦の際に日満の民衆が協力して炭坑生産に励む姿が描かれている。鉱山の旅館に泊まっている「私」は、炭坑夫の息子を持つ旅館の女中の老婆から、旅館経営者の若い日本人女性が鉱山増産に協力していると聞く。一方、「私」は、鉱山の坑道の進水を排出するために訪れた協和会の奉仕隊と一緒に働いている。救援隊員らは、「大日本派遣特別技術班」という腕章を付けている。

作者は、作中で「今、うちは食物も着物も心配ないよ。配給されて何でもあるの」[114]と、炭坑夫の母親に語らせ、また、「商売の道が行き詰まったら、炭坑労働者ほどいい仕事はない。国から奨励され、鉱山にも優待される。新聞紙上にも、炭坑労働者は増産戦士だとよく賞賛されている。全国民が協力する大東亜総力戦の中で、まだくよくよして決断できなければ、祖先にも申し訳ないさ」[115]と、「満人」技師に述懐させている。主人公は普通の炭鉱夫ではなく、技師という炭鉱夫の管理者であり、この技師の独白から、鉱山増産という国家政策に対する認識が十分に伝わってくる。だが、その一方、炭坑夫の生活状況については何も伝わってこない。炭坑浸水排出作業の経緯は書かれているものの、中にい

る人間の顔は見えない。要するに、炭坑夫や救援隊員に性格を持たせていないのだ。物語の全体は、「私」の目線によって進行するが、「私」の感情が入っているとは思えない。

一－三　外文

外文の「私は漁民になった」（我作了漁民）は、『藝文志』第一〇期に掲載されている。文筆生活をやめて漁師となった「私」が、現在の仕事の一部始終を紹介する。漁師になったきっかけは、病気療養中の父親の次の一言だったと言う。

「今、各方面で増産、増産と騒がれているが、この増産について一寸考えてみてくれ。我々は何の「産」を「増」すべきか。お前はどんな仕事をやるべきか」[116]

それに対して、「私」は、

今日からはいつでも、どこにいても、人間でさえあれば誰もが、国家のために、国民のために、力を尽くして生産しなければならない。[117]

という思いを新たにし、生産のために渤海湾で舟を操る漁師となったのである。また、収穫した魚介類の販売については、政府の対応策を次のように称えている。

売るのはけっこう難しい。しかし、政府はすでに至れり尽くせり考えてくれた。生物なら組合、干物なら会社が、それぞれ公定価格で買い取ってくれる。競争することなく、穏やかに公平に、貨物のバッグを車に載せて駅まで運んでいくのだ。[118]

小説に書かれたことがどこまで真実なのかはっきりしないが、作中には、「筆一本で遊ぶなどということに、私は確かに飽きてきた」[119]「しかし、芸文書房や『藝文志』、および二、三の友人との精神的な絆は切っても切れないものである」[120]「これにより、私のことを気にかけてくれる友人に、私が漁師になったことを知らせるだけに過ぎない」[121]と、ある。これらはいかにも、古丁と共にずっと文学の道を歩んできた外文本人が言いそうな言葉である。ただし、この作品でも肯定的な面ばかり表に出ており、外文が漁師になったのが本当に増産のためなのか、それとも、「大東亜戦争」の総力戦で狂った世の中から逃げ出したかっただけなのかは、はっきりわからない。

以上見てきたように、聯盟『藝文志』に発表された小説からは

それまでの暗さが一掃され、全体に明るい調子に変わっている。『明明』や事務会『藝文志』の作品と比べると、以下のような特徴が指摘できる。

一．作者が注目するのは、最底辺に生きる貧農民や赤貧労働者の生活ではなく、村の有力者や在郷軍人、または鉱山のリーダーといった人びとである。物語の結末は悲劇ではなく、ほとんどが努力して困難を乗り越え、ハッピーエンドとなる。

二．登場人物に日本人が含まれている。従来の小説が扱っていたのは、大家族や失業農民、労働者など、「満系」社会の出来事が中心であり、日本人はほとんど登場しなかった。しかし、聯盟『藝文志』の小説には、日本人が登場し、しかも、彼らは「満人」を助ける指導的な役割を担っている。「満人」の落伍者ぶりとは対照的に、民度の高い日本人、進んだ日本の文化が表現されている（疑遅「望」、古丁「新生」等）。

三．疑遅、小松、外文の作品には、それぞれ農業、鉱業、漁業の戦時下の状況が描かれていて、古丁の「下郷」などと同様、「満洲国」の戦時勤労増産の国策が謳われている。ところが、第一部でも述べたように、国策によって農・漁・鉱業の各分野で「満人」の主体性が重視され、優遇される一方、収奪も激しくなっていた。この事実は、以上の三人の作品にはほとんど言及されていないが、古丁の作品では明らかにされている。例えば、「新生」では「民族協和」が謳われながら、「民族協和」とは別の現実も暴露されている。「下郷」には、布や出荷用の道具が不足しているにもかかわらず、出荷を強要される農民が登場する。古丁は、勤労増産の国策を謳う一方で、その過酷な一面も暴露しており、農民たちに対する同情の念と政府への批判がうかがえる。

一－四　決戦詩

『藝文志』第七期は「凱歌を奏でるまで」（奏凱歌而後已）詩歌特集で、中には日本詩の翻訳と満洲詩人の創作詩が掲載されている。「思無邪」欄には、「凱歌を奏でるまで」（奏凱歌而後已）、「大感動」、「素人詩人を待望する」（待望素人詩人）という三篇の文章が載り、「詩人よ、激しく闘え、鬼畜米英を追い出せ！東亜の裏切り者重慶を倒せ！」（詩人啊，激鬥吧，把鬼畜美英打出去！把東亞叛徒重慶打倒！）と呼びかける。

創作詩には、白凌「古賀元帥逝去」（古賀元帥薨）、呉郎「鷹揚しよう！わがアジア」（鷹揚吧！我們的亞細亞）、甘川「民防衛」、春明「開拓村」、小松「礦山行」、柳自興「四千五百萬」、李迺瓊「殺してやろう！鬼畜米英」（殺死牠！鬼畜美魔）、「ピストンのような婦人と子供」（吊塞般的婦女子）、大維「殺敵」等がある。

大アジアの興廃は今日の大詔により決まる／一二月八日
――この不滅の東洋史上の佳日／天がお前の凶暴な米英を討
伐する／進んで撃て、進んで撃て、また進んで撃て／アジア
を守る世代に英雄が輩出する（意訳）[122]

（呉郎「鷹揚しよう！わがアジア」）

一鋤一鋤で豆を蒔いて豆を得る／泥沼が広々とした田圃と
なる／一粒の豆が一粒の弾丸となる／アジアの敵米英を撃滅
する／我々の肥沃な土地は際限なし／子孫の幸福は万年に及
ぶ（意訳）[123]

（春明「開拓村」）

炭坑夫たち／大時代の英雄／足と背中を剥き出しにする／
第二線の超人部隊／（略）／偉大な石炭／力をいっぱい持つ／
熱と光／神の法律だ／勝利のために／幸福のために／東亜十
億／あなたに敬礼する（意訳）[124]

（小松「礦山行」）

これらの詩は、高村光太郎・西条八十・江口隼人などの日本詩人の訳詩の後にあり、詩調は日本の作品とほとんど変わらない。その辺に日満一体感が出ている。ただし、内容は異なる。満洲詩人は、農村や鉱山の生産現場を描き、農民と炭坑労働者を謳っている。農民や炭坑労働者の戦闘意識を高め、勤労増産への協力を促進するためである。

また、日満の詩に同じ言葉が使われていても、意味が異なる場合がある。例えば、高村光太郎や西條八十の詩に「神」という言葉が出てくると、それは、「神国」や日本の「神」などを意味している。一方、小松の詩にも「神」という言葉が使われているが、それは、造物主や自然界を意味するものである。「神」に対する理解や、「聖戦」の「聖」なる感情に対する認識の仕方において、「親邦」と「子邦」の詩人間のギャップがうかがえる。なお、満洲詩人は大袈裟な言葉を使い、詩がスローガンのように聞こえる傾向にある。

一－五　学芸論文

学芸論文の中で最も注目されるのは、爵青の「西欧的知性の破滅」（西欧的知性的破滅、第四期）である。この長文の中で、爵青は、ドストエフスキーの『悪霊』の登場人物、ニコライ・スタヴローギンの思想――シャートフに教えられた「宗教的、民族的国民主義」、キリーロフから伝えられた「反宗教的、超人的、自我的人神主義」、また、信奉者ピョートル・ヴェルホーヴェンスキーの「社会主義」――の分析を通して、西欧の知性の致命的欠陥を逐一

検証している。

もし我々が冷静にこの二つの思想を見るなら、キリーロフの人神思想はもちろん、愛国主義と思われがちのシャートフの国民主義も、専ら個人の価値を重んじる近代的価値観から出発したもので、その中には人間生活の最も根本的な場所―郷土が入っていない。しかし、我々の血肉を生んだのは父祖で、我々を育てたのは郷土である。人間の価値を根源に求めるなら、その形式と内容がいかなるものであれ、郷土愛と国家愛を離れて語れるものではない。[125]

爵青によれば、ドストエフスキーは『悪霊』の中で、「ロシア人はこのようになってはいけない」（俄國人不可以這樣）ということを書いている。そして、その「なってはいけない」ロシア人を、爵青は次のように紹介する。

まず西欧から雑多な知性を受け入れ、生活の中に科学的探究、哲学、美学、および客観的批判を取り入れている。一方で、人間の個性は伝統から生まれるということ、また、伝統を創造することを忘れてしまっている。[126]

では、結局、ドストエフスキーが追い求めた人間像とはどのようなものだったのだろう。ジッドのドストエフスキー論を引用して、爵青は言う。

しかし、ここから彼の辿ってきた人間像追求のプロセスがわかる。たとえ、そのいわゆる不実な要素と悪霊の要素が、抽象的な理性の認識により把握された真善美であると解釈できるとしても、ドストエフスキーの求めている人間像は、理性認識と熱意の向こう側にある。つまり、それは、この二者を超越した宇宙の調和であるのだ。（略）これまで東洋人は、自然の混沌と理性的秩序の間に完全なる統一を求め、動と静の絶対的な一致を追求してきた。ところが、近代以降、この精神が西洋の知性の衝撃を受け、東洋人の偉大な協調はすっかり破壊されてしまった。[127]

爵青は、ドストエフスキーが求めていた人間像は、理性認識と熱意を超越した宇宙の調和である、と推定し、東洋の伝統に戻るべきであると結論づけている。爵青の思想には、日本の「近代の超克」、ならびに、日本浪漫派の影響が見られる。劉建輝はその関係性を指摘し、次のように述べている。

これらの作家は、現実に失われた「郷土」に対して、あくまで精神的にそれを死守することによって自らの民族的意識を守りぬこうとしたのであり、また、その際、彼らが取った方法は、いわば相手の文脈に深く踏み込みながら、まさしく最後の一線で、それをかわし、さらに、そこから一つの抵抗の姿勢を手にしようとするものであった。[128]

爵青の言う「郷土」とは、日本の文脈を利用して、自らの民族意識を守る抵抗の方法だったと解釈されている。確かに、満洲の作家たちが、日本人の「民族協和」を利用しながら抵抗していた面は多々うかがえるが、爵青のこの文章に限って言えば、彼の言う「伝統」「郷土」「協調」が果たして「抵抗の姿勢」と言えるかどうかは疑問である。

爵青の文章の中での「郷土」「東洋の伝統」「協調」という三つの言葉の意味は重なっている。「郷土」としての「東洋の伝統」の主な内容が「協調」で、それは、西洋の科学や、哲学、美学などといった抽象的な理性の外にあるとされている。したがって、西洋に対する東洋の「郷土」と、日本帝国主義支配に対する「郷土文芸」の「郷土」とは、意味が異なる。「郷土文芸」の「郷土」には、反都市・反植民地支配のニュアンスが含まれるが、ここに示されたような伝統や「協調」の意味は含まれない。いわば、踏み込んだままである。

爵青の文学は、「芸文志派」の中で最も近代的と評されていた。「盪兒歸來の日」「廃墟の書」「麦」等の作品に登場する若い知識人たちは、親世代を代表とする伝統に反発して大家族から離れていく。しかし、満足するような新しい土地を見つけ出せない彼らは、新しい「廃墟」を築き上げるしかない。この意味で、彼らはまさにニコライ・スタヴローギンと同じく、モオリス・バレスの言う「根こそぎにされた人びと」（『デラシネ［Les Déracinés］』、一八九七）である。言い換えれば、作家爵青は、近代性あるいは西欧の知性を追い求めても決して手に入れられない青年の悲劇を表現し続けた、と言える。爵青は、ドストエフスキーと同様、「なってはいけない」人間像は指摘しても、「なるべき」人間像を提示することはしなかった。

『藝文志』創刊号において、弘報処処長の市川敏は、「米英の退廃芸文を駆逐して、新たな東洋道義に基づき東亜復興を象徴し、肇国精神を顕現するような芸文」と、芸文家の使命を明示した。西欧の知性への批判は、すなわち米英の頽廃文芸を駆逐することであり、近代的知性に明るい爵青によるこの論文はその点で最も説得力があったと思われる。では、対する「郷土」「東洋の伝統」とは何を指すのか。肇国精神に基づく日本文化なのか、それとも、儒教や仏教を基本とする中国文化なのか。つまり、「東洋回

帰」とは、どこに帰ることなのか。これについては、「満人」と日本人の考え方は異なる。爵青は、本文中に「協調」「統一」という二つのキーワードしか出しておらず、この問題について正面から言及することを回避していたように思われる。なぜなら、「民族協和」を建前とする以上、そこまで問われることはなかったからである。

二、報告文学

「大東亜戦争」下の「満洲国」では、文芸の使命は戦意を高揚し、民衆の心を潤すこととされていた。そのため、満洲芸文聯盟は作家を農村や鉱山の視察に派遣し、戦意高揚の報告文を書かせた。聯盟『藝文志』第九期に組まれた「西南紀行」特輯は、その類のものである。

「西南」とは熱河地区で、三三年三月に日本軍に占領され、「満洲国」と中華民国の国境となっていた。長城地区には日本軍の守備隊がいたため、中国の抗日前線ともなっている。四〇年以降、民衆を抗日ゲリラから切り離すために、「満洲国」では長城沿線に「無人区」を作り始める。住民を指定の場所に強制的に移動させ、いわゆる集団部落に住まわせた。集団部落とは、土壁で囲まれ、夜でもドアを閉めてはいけない軍民集団生活の場である。住民たちは、「猪圏」（豚小屋の意）にちなんで、「人圏」と呼んでいたらしい。

八路軍の共産主義思想工作に影響を受けた民衆は、なかなか「満洲国」のやり方を理解しなかったという。日本軍を慰問すると同時に、これらの民衆を対象に「満洲国」の民族協和政策を宣伝するために、古丁を含む日満各六名の芸文家たちが、西南国境を訪れた。彼らは承徳放送局で明日の熱河について語り、満洲に戻って以後それぞれに報告文を書いて、「関東軍検閲済」で発表した。四四年七月『藝文志』第九期の「西南紀行」特輯には、古丁・田瑯・疑遅・小松・金音・田兵ら「満人」作家六人の報告が掲載されている。そのうち、古丁の「西南雑感」には、「富山善水」「匪滅民安」「同生共死」「協和所化」「民衆防衛」「熱河明日」の各小見出しが付けられ、西南地区における「民族協和」が謳われている。同文の田中辰佐武郎による日本語訳は、同年一一月号の『藝文』にも掲載された。

その他の五篇は、田瑯「西南地区と決戦文芸」（西南地区与決戦文藝）、疑遅「熱河を祝福する」（祝福熱河）、田兵「西南踏査記」、小松「見聞二三」、金音「西南行外記」であり、それぞれの角度からこの旅を記録している。

田瑯は、熱河と華北の関係、「満洲国」の武力消滅、治安粛正、経済建設などについて理論的に論じ、協和会の役割を高めてい

る。古丁は、熱河省次長の岸谷の話を引用し、匪賊撲滅後は自衛団に守られて安全になった民衆の生活や、「満洲国」軍と地元民との「同生共死」、朝鮮人兵士との「民族協和」談について語っている。疑遅は、熱河の交通状況の復帰から、鉱山・農産造林水利などの発展を予想し、熱河の明日に期待する。小松は、集団部落に入ることを拒否して土地廟で生活する不幸な農民に対し、彼らは匪賊の反宣伝に惑わされている、と厳しい。山を降りてきた農民たちは、「満洲国」軍隊と共にいわゆる軍民一体の生活をしている、と報告する。田兵は詩の形で、歴史にゆかりのある熱河省を初めて訪れた満洲生まれの人間の新鮮な感動を記している。

これら六本の文章の中には、熱河の集団部落で、「軍民一体」の生活がいったいどのように行われているか、また、民衆の喜怒哀楽やその日常生活に触れているものは一本もない。むしろ、作家たちはその話題を避けているように見える。

以上のように、「大東亜戦争」中は、宣伝のために報道文芸がよく活用されていた。「西南紀行」特輯の「思無邪」欄には、丁（古丁）著「報道文芸の提唱」（報道文藝的提倡）が載っており、「文芸のこの転換期にあたり、作家が大修練を体得する以前に、報道文芸は新しい文体だと思う」[129]と、次の二点を指摘する。

その一つは、文芸作品には「真」がなければいけない。

（略）今一つは、「専門家」でも「素人」でも、同じように偉大な作品を書くことができる。[130]

その例として、従軍作家火野葦平と丹羽文雄を挙げている。満洲の作家も、日本の従軍作家に学び、筆を剣にして、「真」のある偉大な報告文学を書いて聖戦に協力せよ、ということであろう。

『藝文志』に発表された報道文芸は、以上の特輯にとどまらない。『藝文志』第一一期に載った古丁の「下郷」もその類である。

三．古典文学との関係

聯盟『藝文志』は合計十二号が刊行されているが、その目次を見ると、雑誌の内容が変化していることがわかる。第一期の創刊号には、七人の作家の創作感想「従文談」が発表されており、その他に詩・評論・小説が掲載されている。第一期から三期までの内容は、それまでの文学理念に基づいた創作と翻訳が中心で、時局色はそれほど濃くなかった。

『藝文志』第四期から、「編輯後記」が「小大由之」と改題され、また、「思無邪」「觚不觚」「北辰」等の新しいコラムが増えている。「小大由之」は、『論語・學而』にある「礼之用、和为貴。……小大由之」に由来し、『藝文志』では「編後」の代わりに使わ

れている。「思無邪」は、『論語』にある「子曰『诗』三百，一言以蔽之、曰思无邪」にちなみ、『藝文志』の雑文（エッセイ）欄のタイトルとされた。「觚不觚」は、『論語・雍也』の「子曰『觚不觚，觚哉！觚哉！』」から採られ、聖戦下の生活諸相の批評欄である。この言葉があまりにも難解過ぎるためか、第五期からは「七件事」に変わった。「北辰」は、『論語・為政』の「子曰『為政以德、譬如北辰、居其所而衆星共之』」からで、読者からの質問を掲載する欄である。

『論語』は言うまでもなく儒教の経典で、古丁には礼教を批判した小説「皮箱」がある。また、芸文志事務会発行の「讀書人連叢」の目次には、「conte」という西洋語も使われていた。これらを考え合わせると、聯盟『藝文志』のコラムのタイトルの付け方には、鬼畜米英の文化を駆逐し、東洋文化へ回帰するという、時局への順応性がうかがえる。なお、古典回帰はコラムのタイトルにだけ現れているわけではない。掲載内容にも、古典に関する文章が数多く見られる。

四一年三月に発表された『藝文指導要綱』の冒頭で、満洲文芸は、「この國土に移植されたる日本文藝を経とし、原住諸民族固有の藝文を緯とし、世界藝文の粋を取入れて、織り成したる渾然独自の藝文たるべきものとす」と、規定された。また、翌年一一月に東京で開催された第一回大東亜文学者大会の中心議題は「大東亜精神の樹立について」であり、「大東亜精神は皇道、即ち日本の肇国精神の八紘一宇に帰されるべき、それをわが大東亜精神の淵源とする」とされている。

第一回大東亜文学者大会より帰ってきた古丁は、『満洲日日新聞』に寄稿し、四日間にわたって「万葉源氏と載道言志」を連載した。ここで古丁は、「日本文學には萬葉精神と源氏精神の二つの流れがあり、前者は男性的で後者は女性的で、何れを缺いても跛行的なものとなり、全人格的な存在とならないのである」[131]と述べ、日本の古典文学における万葉集と源氏物語の位置づけの重要性を紹介している。また、銭稲孫の万葉集選の翻訳について、中華民国においては、日本文化を通じた西洋文化との接触から、日本文化そのものの紹介と受容に変わる「轉機である」と評価した。それに対して、「満洲国」では「日本文化に通ずる満洲人が尠ないと思ふが、このような仕事に着手することが望ましいのである」[132]と、さらなる日本古典文学の翻訳紹介を期待する。そして、その期待に応えるように、聯盟『藝文志』の第四期と八期に、張文華「万葉集及び万葉精神」（萬葉集及萬葉精神）が、上・下に分けて掲載された。その他、栄秀「賦について」（說賦）が第五期、夢非による詩人評伝「屈原」と張文華「東亜の古詩源」が第七期、項斯原著・也麗訳「宿山寺」が第一〇期、夢非「杜甫の精神」が第一二期に発表されている。

これらの古典に関する文章は、事務会『藝文志』のような旧文人の遊びではなく、その多くは研究と紹介であった。屈原や杜甫の紹介は、芸文建設のためと言う。

藝文建設は氣長なものである。漢の文學史に照らして見ても、幾百年かを隔てゝ、屈原が現はれ、杜甫が生まれて、魯迅が出て来るのだつた。それで良い譯であり、結構國民の精神的糧となり得るのである。[133]

古丁は、満洲芸文の将来に向け、屈原や杜甫から魯迅までを生み出した中国文学の「国民の精神の糧」の伝承を強調する。では、なぜ、この三人なのか。

中国人は、文学を載道（道の乗り物）か志怪かと見なす一方、暗い歴史の中に光明を見出した一派もある。屈原から杜甫、その後に生まれた魯迅は、この流れに入る。彼らは今の人間よりもっと悪い運命を背負っていたが、決してその運命に負けなかった。彼らは偉大な詩篇を詠い、後代の子孫を慰め、東洋文学に貴重な富を残した。文学者はここにその創作の模範を見なければならない。[134]

以上は、「芸文志派」の主要メンバーの一人だった辛嘉の文章からの引用であるが、これが、つまり古丁らが、屈原・杜甫・魯迅を取り上げた理由と考えられる。

理想とする政治を実現できなかった屈原は、左遷され、絶望の中で「楚辞」「離騒」などを書いて自殺したと伝えられている。屈原は憂国の詩人として、中国文学史に定着している。四二年には、光明に憧れ、邪悪な勢力と戦う、愛国詩人としての屈原が登場する脚本『屈原』が、郭沫若によって書き下ろされた。

詩人杜甫は、「安史の乱」の唐王朝の中で経世済民の大志を実現できず、故郷を離れて転々と苦しい生活を強いられた人物で、彼の詩には望郷憂国の作品が数多くある。

魯迅については、今さらここで紹介する必要はないだろう。芸文書房から、『魯迅集』と『魯迅伝』が出版されている[135]。

屈原も杜甫も、暗い社会の現実を批判する中で光明を見出した愛国・憂国の詩人であり、その精神性の伝承は日本支配下の「満洲国」においては特別な意味を持ち、読者に力を与えたと推測できる。暗い現実を批判し、その中から光明を見出す精神は、『明明』から芸文志事務会を経て、戦時下の聯盟『藝文志』まで貫かれている。それが、暗黒の中で満洲の作家を支えていた精神ではないかと思われる。

以上のように、聯盟『藝文志』には古典色が随所に見えるが、

それは米英文学の排斥、東洋文学の復興の要求に応えたもので、同時に、屈原―杜甫―魯迅の流れの伝承が、「芸文志派」の一貫した方針であった。

聯盟『藝文志』は、四四年五月発行の第七期から、頁数が二百頁から百二十頁程度に減少し、内容も乏しくなってくる。だが、古典を扱う文章自体はそれほど減っていない。

補論一　芸文書房の理想と出版物

芸文書房はどのように運営されていたのか、その詳細を記録した資料は発見されていない。ここでは、現在までに発見した関係資料から当時の様子を推測してみたい。

一九四二年一月八日の『盛京時報』の「今年満洲文芸出版」[136]に、芸文書房の新年度の計画として以下のように書かれている。

一．二種類の定期月刊誌を発行する。

二．現代日本文学選集―計七巻。テキストと翻訳者はすでに決定。

三．満洲文学十年大系―計史略篇、評論篇、小説篇、詩歌篇、劇曲篇を出す。執筆者はすでに決定。

四．駱駝文学叢書―小説、詩集、随筆、計十二巻。作者はすでに決定。

五．現代世界文学選集―ドイツ篇、フランス篇、ロシア篇、イギリス篇、南北アメリカ篇、文学史略篇、計六巻。執筆者はすでに決定。

六．少年叢書―日本童話選、ドイツ童話選、イタリア童話選、イギリス童話選、北欧童話選、およびその他、計十二巻。

七．学生文庫―学生と建国、学生と読書、学生と日語、学生と科学、学生と歴史、学生と地理、学生と算術、学生と社会、学生と物理、学生と化学、学生と音楽、学生と体育、学生と数学、学生と哲学、計十四巻。

八．人傑叢書―西郷隆盛、リンカーン、ジンギスカン、バイロン、ビスマルク、孔子、康熙大帝、東洋詩人伝、世界文学家伝、エジソン他、計十二巻。

九．天下事叢書―フランスから帰る、トルコキスタンへの旅、科学者の旅、チベット踏破記、欧米遊記、巡礼、旅愁、中国紀行他、計十二巻。

一〇．生活叢書―人生論、恋愛論、処女の心、育児法、調理法、修養、趣味、娯楽他、計十二巻。

その他に、雑誌と児童読物の計画もあった。

雑誌、叢書、大系、選集、文学創作、文学翻訳、学生文庫、生活叢書等、以上のリストを見て、芸文書房の出版計画は芸文志事務会の時よりさらに厖大で野心的だったことがわかる。内容を見ると、一の雑誌については詳しい説明がないためその方向性を把

握しにくいが、二〜五はすべて文学か、文学関係のものである。六〜九は学生や少年向けの知識紹介・教養もの、一〇は生活の智恵紹介と言える。つまり、芸文書房は、主に文学関係、それから学生や市民向けの知識紹介などに力を入れ、文学の普及と民衆（学生）の文化レベル向上を目標にしていた。これは、古丁と、文化事業を通して営利を追求する一般の出版社社長との異なるところである。

さて、芸文書房設立当初のこれらの計画はどこまで実現されたのだろう。はっきりとはわからないが、ここで筆者の四年間の調査成果を基に検討してみる。

一にある二種の定期雑誌のうち、現在見られるのは『藝文志』のみである。四三年一一月に創刊された満洲芸文聯盟の「満語」機関誌で、当局から助成金をもらっていたと思われる。もう一つの雑誌の発行は見送られた可能性がある。

二の「現代日本文学選集」計七巻とは、杜白雨訳『島崎藤村集・春』、儒丐・文華訳『谷崎潤一郎集・春琴抄・猫と庄造と二人のおんな』、沈堅訳『武者小路実篤集・愛と死』、郭訒訳『横光利一集・寝園』、爵青訳『島木健作集・生活の探求』、希文訳『幸田露伴集・幻談・五重塔』、それに、古丁訳『片岡良一集・現代日本文学史略』である。ただし、このうち筆者が実物を確認したのは、四二年九月に出版された杜白雨訳『島崎藤村集・春』と、儒丐・文華訳『谷崎潤一郎集・春琴抄・猫と庄造と二人のおんな』のみで、七巻すべてが刊行されたかどうかははっきりしない。

三の「満洲文学十年大系」については、実際の刊行物は一冊も確認されていない。

四の「駱駝文学叢書」は出版されている。うち、筆者が実際に確認したのは以下の通り。小松『人和人们』（一九四二）、『野葡萄』（一九四三）、古丁『譚』（一九四二）、『竹林』（一九四三）、山田清三郎『満洲文化建設論』（日本語、一九四三）、慈灯『老総短編集』（一九四二）、爵青『欧陽家的人们』（一九四一）、『帰郷』（一九四四）、疑遅『天雲集』（出版年月不明）、大内隆雄『文芸談叢』（漢語、一九四三）。中には「満人」の漢語作品もあれば、日本人の漢語作品や日本語作品もある。在満日本人の日本語作品も出ていると他の研究者から聞いたが、筆者は確認していない。

五の「現代世界文学選集」は確認されていない。世界文学集については、古丁がずっと呼びかけていたが、用紙や印刷技術などの制約により、芸文書房のような民間出版社では実現できなかったのかもしれない。そのため古丁は出版の連合を呼びかけたが、それもとうとう実現しなかった。満洲図書株式会社から発行された『世界名小説選』の第二集（一九四一）から第五集（一九四二）までを確認したところ、日本・インド・ハンガリー・ポーランド・ソ連・ドイツ等の国々の短篇が収録されている。以前に中

国で翻訳されたもので、満洲人による新たな翻訳はなかった。

六の「少年叢書」については、共鳴『老いた鰐の物語』（老鍔魚的故事）、季春明『風兄』（風大哥）、慈灯『月の中の出来事』（月宮里的風波）など、具体的な書名と作者名の一部は確認しており、出版された可能性が高いと考えられる。書物自体は確認していない。

七の場合、計画の内容とは違うが、「学生文庫」の書名と作者は、以下の通り確認されている。中島健蔵著・古丁訳『学窓と社会』、辛嘉『学生と読書』、爵青『学生と文芸』、杜白雨『学生と哲学』、遅鏡誠『学生と日語』、高遵義『学生と体育』。このうち実物を確認できたのは、『学窓と社会』（一九四一）のみである。

八の「人傑叢書」は、計画にあった人名の通りではないかもしれないが、出版されている。筆者が確認したのは、史明訳（著者不明）『ガリレオ伝』（加里雷伝、一九四二）、小田岳夫著・外文訳『魯迅伝』（一九四一）、爵青・吟梅訳『キュリー夫人』（菊里夫人伝・上、一九四二）である。

九の「天下事叢書」については確認されていない。

一〇の「生活叢書」は出版されている。筆者が確認した五冊の多くは翻訳書で、ほとんどが恋愛に関するものである。中には、史明訳『円満な夫婦』（美満的夫妻、一九四二）、堀秀登著・夏明訳『情熱的な恋愛』（熱情的恋愛、一九四二）等がある。

以上、四二年の計画について見てきたが、満洲当時の資料には紛失した物が多く、筆者の確認範囲には限界がある。今後も引き続いての調査の必要性を痛感している。

補論二　芸文書房のその他の出版物

芸文書房は一九四五年まで続いていたので、他の出版企画も当然あった。本書の附録資料編として調査資料一覧を載せているが、その中に特筆すべきものがいくつかある。

一．「快読文庫」

四一年一一月に「満人」短編小説集『快読文庫』が出版され、その後、収録された各短編小説は一篇ずつ独立した冊子として刊行された。その中には、小松『火』（一九四一）、疑遅『鳳鳴山的深秋』（一九四一）、正心『藝文指導要綱解説』（一九四一）等がある。

二．「鑑賞叢書」と「国学叢刊」

「鑑賞叢書」は、単更生（外文）編『白雪遺音』（一九四二）、趙振興編『忠義水滸伝全書』（一九四三）、劉鉄雲『老残遊記』（一九

四三）等、明清代の白話小説シリーズである。それに対して、「国学叢刊」は、『唐詩三百首註疏』（出版年不明）、『千家詩詳解』（出版年不明）のような伝統教養書であった。非斯（李松伍）の『子學概論』（一九四四）と『漢学輯要』（一九四三）も確認されている。

三．「興亜叢書」

これは、戦時国策宣伝用の書物と思われる。確認したものとして、『大東亜戦争の意義』（一九四二？）、『戦時米国経済の苦悶』（出版年不明）、趙孟原『大東亜戦争常識宝典』（出版年不明）、『英美罪悪史』（一九四二）、徐古丁他訳『米英侵略東亜史』（一九四二）、『建国回想座談会録』（一九四二？）がある。『英美罪悪史』は満洲だけではなく、「大東亜共栄圏」の上海や北京でも同じ題名でそれぞれ編集・出版されている。「満洲国」においてこのような叢書が民間出版社である芸文書房から出版されている点に、満洲芸文家協会の大東亜連絡部部長としての古丁の活躍ぶりがうかがえる。

四．「日語総合講座」など

「満洲国」では日本語の習得が出世に有利だったため、日本語テキストは最も売れる出版物の一つであり、各出版社は先を争って発行した。芸文書房刊行の日本語教育関係の本としては、建国大学教授の丸山林平主講、徐長吉（古丁）助講だけが確認されている。「日語総合講座」は入門編から翻訳編まで全十二編予定されていたが、どこまで出版されたかは把握していない。丸山林平と徐長吉（古丁）のコンビによるものなら、他の参考書より断然良質のものであったろう。ここからも、芸文書房の書籍の厳選と品質へのこだわりがうかがえる。

このように、古丁を代表とする民営の株式会社芸文書房は、流行に迎合して金儲けに走るのではなく、確実に読者に役立つ書籍だけを選んで出版していたと考えられる。芸文書房は他の出版社のように上海出版物の翻刻を行わず、満洲地元作家の作品の刊行に力を入れていた。また、出版された書籍の中には、漢語版もあれば日本語版もあった。翻訳書のほとんどの原典は日本の作品で、西洋ものは見られない。「満洲国」戦時下の芸文書房は、民度の向上と国民の読書生活の養成のために、国策を取り入れながら出版事業を行っていたと考えられる。

「満洲国」では官営、民営の出版社が林立していた。満洲図書株式会社は政府系の出版社で、満日文化協会発行の「東方国民文庫」から学校用テキストまでの出版を独占して厖大な収益を得て

いた。一方、「満系」の民間出版社では、益智書店が「文選叢書」「名著訳叢」「少年教養読み物」「大東亜建設名要人伝略」を、五星書林が「青年叢書」等、芸文書房と似た叢書を出していた。これらの出版社は芸文書房と何らかの提携関係にあったのではないか。あるいは、古丁の呼びかけに対して、特に「満系」の出版社を中心とする出版界が応答するなど、互いの意思疎通があったとも考えられる。

補論三　「芸文志派」関係の出版物

『明明』、事務会『藝文志』、聯盟『藝文志』、芸文書房の他に、古丁と直接の関係はないが、その影響を受けていたと思われる「芸文志派」関係の出版物を紹介しておく。

「満洲国」後期の漢語出版界には、以下の通り、いわゆる「八大雑誌」があった。

①『新満洲』―三九年一月に満洲図書株式会社より創刊された文化総合雑誌で、編集は王光烈から季守仁（呉郎）へ引き継がれた。四五年四月に七巻四期で終刊。

②大衆雑誌『麒麟』―四一年六月に満洲雑誌社より創刊され、趙孟原（小松）、劉玉璋（疑遅）、金純斌（田兵）が順番に編集を務めた。四五年三月に出版された四月号で終刊した。

③『満洲映画』―三七年一二月に満洲映画協会より創刊された。後に満洲雑誌社に移り、四一年六月頃に『電影画報』と改名されているが、巻・号は『満洲映画』からそのまま引き継いでいる。

④『青年文化』―四一年八月に満洲青少年文化社より創刊され、四五年二月に終刊。張鳳墀編集。

⑤『興亜』―三六年六月に興亜社より創刊。韓文岐編集。四三年一二月まで続く。

⑥『民生』―旬報で、四二年民生報社より創刊。馬建編集。

⑦聯盟『藝文志』―四三年一一月に芸文書房より創刊。趙孟原編集。

⑧『新潮』―四三年三月に満洲経済社文化総合雑誌より創刊され、福島真治編集。四四年一〇月に一巻八期で終刊。

八大雑誌のうち、聯盟『藝文志』は芸文書房から発行され、『麒麟』と『電影画報』は満洲雑誌社から発行されているが、いずれも編集者は元「芸文志派」のメンバーである。ここでは、まず『麒麟』と『電影画報』それぞれの特徴と性格を見て、それから、興亜雑誌社から刊行された「新現実文芸叢書」について考察する。「新現実文芸叢書」の編集者は、「芸文志派」の一人で、脚本家として有名な辛実（新実）であった。

一．『麒麟』

野間清三を主宰とする満洲雑誌社は、大陸講談社、関東軍、総務庁弘報処を母体に四〇年一二月に成立した。その後、関東軍の機関紙『満洲良男』の出版が本社に移り、漢語大衆雑誌『麒麟』が創刊された。また、満洲映画協会発行の漢語雑誌『満洲映画』も満洲雑誌社に移り、四一年六月に『電影画報』と改名された。

『麒麟』は、現在、原書すべてを揃えることは不可能だが、中国全国図書館文献縮微複製中心よりマイクロフィルム版が出ており、四五年四月号を除いて、四一年六月創刊号から四五年二、三月（五巻二、三期）合併号までの全冊を読むことができる（ただし、号によっては頁の欠損がある）。同中心からは影印復刻版も出ていると聞くが、筆者は確認していない。本書ではマイクロフィルム版によって、『麒麟』の特徴と性格を探る。

創刊号の表紙は、麒麟ビールのポスターなどを手がけた日本人商業デザイナー多田北鳥によるもので、中国の伝説上の動物、麒麟が描かれている。中国では、麒麟は「神獣」「仁獣」とされ、長寿・吉祥の象徴である。人間に喩える場合は、才覚ある人のシンボルとなる。麒麟（qilin）という音の響きもよい。麒麟という言葉を口にして、嫌な気持ちになる人はいないだろう。

他の漢語雑誌と比べると、『麒麟』の最大の特徴は、その大衆性にある。創刊号の「発刊の辞」には次のようにある。

> 『麒麟』は四千万の民衆の慰安、および読者の情操を涵養するために発行されたものである。（略）国民は必ずや『麒麟』を自分の雑誌と見なしてくれると信じ、我々は良知良能に基づきあらゆる労力を捧げ、読者のためにこの刊行物に掲載する原稿を集める。[137]

これによると、全国民を読者対象としていたことがわかる。また、四二年五月号の「編後記」には、「編集同人は文化を普及する使命を負い」「理論は高く遠くに設定するが、実現させる手段としては通俗的な方法を取る。民度の低さに配慮し、趣味（面白さ）に偏ることにする。面白さで国民を導き、多く知って多く読んでもらうと同時に、必要な知識を紹介する」とある。創刊の理念は一貫している。

では、「通俗的な方法」とはどのような方法であろうか。『麒麟』は毎号、「通俗小説」を載せていた。「通俗小説」は、現在もはっきりと定義されている言葉ではないが、高い文化レベルを求めない読者向けで、物語性に富み、市民の喜怒哀楽の共感を得やすい、といった特徴が挙げられよう。ジャンルとしては、言情小説（通俗恋愛物）、武侠小説（日本のチャンバラ小説に相当する）、

実話小説などが含まれる。「満洲国」在住作家の作品も取り上げているが、北京からの作品が多い。編集次長の劉玉璋（疑遅）自らが北京を訪れ、通俗小説の大家と言われた劉雲若や白羽らに原稿依頼を行っていた。その一方で、このように北京ものに頼って読者を引き寄せる姿勢を皮肉った言葉が、他の雑誌に見える。

原稿料の問題については、満洲はまだ良いほうとは言えない。華北の作品は、満洲に送られると武侠ものでも千字一五元だそうだ。しかし、満洲の土産品なら純文芸でも五元に過ぎない。その原因はどこにあるのか我々は知らない。たぶん、満洲の土産品は汽車に乗る必要がないからだろう。

麒麟の長編は北京ものでなければ採用されない。[138]

北京ブランドの力で読者を惹きつけようとする編集者の目的は、しかし、ただ単に売れれば良いということではなかった。

『麒麟』四二年一二月号に、四三年新年号の付録の一つとして発行された劉雲若の『梨花魅影』を紹介する文章が掲載されている。「（この）小説の社会描写には、強力な社会への指導と識別が見える。ゆえに氏の小説の重点は社会教化に置かれている」（小説裡的社會描繪，都有著強有力的社會指導與評鑑，所以該氏的小說，多數是把寫作的重點放到社會教化上去）[139]。また、北京の武侠小説家趙煥亭の忠義武侠小説「荒山女侠」に高い原稿料を払ったことを述べた後に、「（この小説は）理想の開拓に重点を置いており、読者に面白さを与えると共に、身近な社会教化を行うものだ」（置重點於理想的開拓，俾使大眾讀者於趣味中兼得切近的社會教化）[140]と評している。このように編集者は、「文化普及」という目的に沿って、「社会教化」を通俗小説を選ぶ際の一つの基準にしていたと思われる。高い原稿料を払ってでも北京ものを載せるのは、通俗性を保ちながらも低俗には陥らないようにするための努力だったと考えてよいであろう。

ただし、『麒麟』は通俗小説ばかりを掲載していたわけではない。古丁の歴史に材を採った小説「竹林」（一九四二年六月号）や爵青の「恋獄」（一九四三年六月号）、また、成絃の詩など、新文学の作家の作品もかなり載せている。また、爵青訳・ゲーテの「ファウスト」（一九四二年二月号）、外文訳・ゾラの「ナナ」（一九四二年五月号）等、世界の名著の紹介もあった。

小説の他には、ハリウッドや上海の映画スター、京劇の名優の紹介やインタビューなど、芸能記事も掲載されている。また、弾詞（芸能の一種。一人で話したり歌ったりする）や「阿Q正伝」（一九四一年八月号）のように、魯迅の同名小説を民衆に親しまれていた芸能形式に改編したものも載っている。京劇の名優、馬連良と日本の尾上菊五郎との対談も見える（一九四二年一一月号）。

大衆性を象徴するもう一つの特徴は、女性読者の重視にある。女性向けの内容は家庭生活から職業まで幅広い範囲に及んだ。例えば、「遅く帰宅する夫にどう対処するか」（怎様對待晩歸的丈夫、創刊号）、「夫に別に好きな人ができた時」（當丈夫別具新歡的時候、一九四二年九月号）、「あなたの手をどのように手入れするか」（怎様愛護你的手）（一九四二年一一月号）といった、家庭や身の回りの問題から、各界で活躍している女性のインタビューやレポート等もある。「職業女性の声」（職場女性心声集）のような特輯（一九四三年一一月号）を組んだり、社会底辺で喘いでいる女性に関心を向けたりもしている。「満洲国」で活躍していた女性作家、呉瑛や楊絮等の作品特集もあった。

掲載された広告には、化粧品や婦人用薬品等が多い。そして、日本語雑誌『婦人之友』の毎号の目次が紹介されていた。また、創刊号（麒麟の絵）と四五年二、三月合併号（龍の絵）を除き、表紙はすべて女性の顔写真であった。対米英戦時中には、「防空女性」（一九四四年九月号）と呼ばれた「飛行機」に乗る女性の写真も見える。

さらに、学生向けの内容も特徴の一つだった。『新満洲』の学生向けのコラムは学生からの投稿を載せていたが、『麒麟』では「大学生生活素描」のようなコラムに加え、国内・海外の人物や事件を紹介したものが多かった。特に、「大東亜偉人伝記」として、東条英機（一九四三年六月号）、汪精衛（一九四三年七月号）等、「大東亜共栄圏」内の各国の首脳が紹介されている。対米英戦争が始まると、東南アジア各国の情況や戦況の紹介が増えるようになった。

『麒麟』では一般に必要とされる知識も紹介されている。「ビタミンについて」（創刊号）、「太陽はいかなるものか」（一九四二年五月号）、「電気常識浅説」（一九四三年二月号）、「海の科学」（一九四五年二・三月合併号）等、科学的知識の紹介もあれば、「麒麟新語」というコラムでは、南進主義（一九四二年一一月号）、大亜細亜主義（一九四二年九月号）、交響曲（一九四二年一〇月号）、版税（一九四三年二月号）、「勤労奉公制」（一九四三年五月号）など、幅広い分野に渡って社会生活に必要な新語の解説を行っている。例えば、「純文学」（一九四三年二月号）の場合、「小説、詩歌、戯曲などを指している。文学の定義には広義と狭義があるが、狭義では専ら理想と感情に訴える美的な作品、すなわち『純文学』を意味する」[141]と、非常にわかりやすい。

『麒麟』にはまた、漫画や写真（社会的事件や女優など）も毎号かなりの頁数を割いて掲載された。要するに、大衆向け総合雑誌という『麒麟』の性格は鮮明だ。「文字さえ知っていれば」、誰でも読めるような雑誌である。民度の低い一般大衆を相手に、まず彼らの興味を引き出し、雑誌を通して文化の自然な普及を図るの

が、編集者の戦略であった。『麒麟』の編集人は趙孟原（小松）から劉玉璋（疑遅）へと代わり、劉が編集部長に昇格すると、金純斌（田兵）へと代わった。『麒麟』の編集方針には、古丁の文芸思想がかなり反映されていたと考えられる。

『明明』時代の古丁は「方向なき方向」を掲げながら、「人の好感と美感を引き起こすもの」「人を楽観させるもの」は書かない、というこだわりを持っていた。四〇年秋の健康隔離後は、民衆の読書生活の養成と文化レベルの向上などのために、文学の面白さを重んじ、漢語による通俗文芸の創作を提唱した。したがって、四一年六月の『麒麟』の創刊と目的、そして編集方針は、「満人」の民度を高めようとした古丁の考え方と一致しているのである。

もちろん、満洲雑誌社から出された『麒麟』は、国策的な性格も持つものであった。四二年と四三年の新年号には「皇帝」溥儀の写真を掲載し、対米英戦争に入ってからは、ますます国策宣伝の内容が増えていく。「満洲国」出版界の厳しい統制の下、国策に則ることは雑誌存続の大前提であった。その中で少しでも自分たちの思いを貫こうとした、古丁ら「芸文志派」のメンバーたちのしたたかさが『麒麟』の誌面には感じられる。

二．『電影画報』

三七年八月に満洲映画協会が設立され、一二月に雑誌『満洲映画』が、「唯一豪華版の映画雑誌」（唯一豪華版的電影雑誌）として創刊された。その後、この雑誌の誌名、発行元、編集者はめまぐるしく変わっていく。第二巻第九期、三八年一〇月号の奥付では、編集人は藤澤忠雄で、発行所は満洲映画発行所となっているが、実際の編集者は、「満人」であった。

創刊五周年にあたる四一年一二月の『満洲映画』誌面には、「五周年創刊記念感言」の欄が設けられ、劉漢が、編集長それぞれの時代を振り返っての感想を述べている。

> 四つの時代、それぞれに性格が違う。江楓時代は、上品なパンフレットに過ぎなかったとはいえ、他誌の編集者が鉛筆の線で縁取りするしかできない中、『満洲映画』はすでに読者の視覚を一新していた。質の低さと分量の少なさについては、開拓段階でもあり厳しく責めてはいけない。
>
> 王則時代になると、明らかに一歩前進した。評論、紹介にとどまらず、どの内容も良くなった。それに、多くの「脚本読み物」が生み出された。今でも爵青の「港の王者」と疑遅の「天涯芳草」を覚えている。

孟原時代は、『満洲映画』の黄金期と言えるだろう。量が多い、質が良い、値段が安い、と三拍子揃っていた。

共鳴時代になると、『満洲映画』の発行元は満洲雑誌社に変わり、誌名も『電影画報』と改められた。この大きな変革が、子どもたちにどのような影響を与えるか……しかし、苦しむ編集者は、限られた紙の配給の中で努力し、与えられた方針の中で闘っている。[142]

『電影画報』の改名が「子どもたちにどのような影響を与えるか」とは、何を意味するのか。「映画」という語は、日本語であり、漢語ではない。「満洲」は中国の東北地方で、その地方性が突出して強調されている。「満洲映画」という語には、中国本土から切り離され、日本色に染まった満洲、すなわち、日本の植民地としてのイメージが色濃く出ている。それに対して、「電影画報」という語は、全く日本を連想させず、中国との分離感もない。『電影画報』には、中国で刊行された映画雑誌というイメージしかない。劉漢の「子どもたちへの影響」云々はこの意味であろう。つまり、この誌名は子どもたちに、日本の植民地ではなく、中国の一地方としての帰属意識を与えたのである。それが、おそらくそもそもの雑誌改名の目的ではないかと思われる。この発想は、古丁が「独立色彩」より「地方色彩」という言葉を使いたがることと同じであろう。

四〇年一一月号の第四巻第一〇期は「革新号」である。発行元は満洲映画協会から大陸講談社に移り、編集人は趙孟原となった。そして、翌四一年の新年号で大陸講談社は満洲雑誌社と改名され、六月号から誌名も『電影画報』に変わる。同年一〇月には芸文書房が設立し、趙孟原はその企画部長となるため満洲雑誌を離れている。ただし、実質の編集者は共鳴に代わったものの、編集人としての趙孟原の名前は、四二年一月まで奥付に残っていた。そして、四二年三月号の奥付では、編集人が劉玉璋（疑遅）に代わっている。

『満洲映画』は、上海の映画雑誌ほど色情調に陥っておらず、しかも、「映画文学」系のものを多く掘り起こした。その独特の内容と形をもって大勢の読者を獲得した。[143]

『電影画報』（『満洲映画』）が売れた理由は、上海の映画雑誌のように色情的な写真にあるのではなく、その「電影文学」、つまり読み物としての価値にあったと言う。

実は、創刊一周年記念号である『満洲映画』三八年一二月号に、王則が「湯餅筵上」という文章を発表し、その中で『満洲映画』の二つの特性である、娯楽性と文化性について語っている。

娯楽性を実現させるには、グラビア頁や映画スターなどに関する詳しい記事を掲載し、写真やスターなどに対する読者の興味に応えること。そして、密度の濃い文章、つまり映画製作の知識や、映画の脚本などを掲載して、雑誌の文化性を実現させることだと言う。このように、『満洲映画』は、グラフィックな要素と文章との両面で読者を虜にしていた。『電影画報』も、まさにその方針を引き継いでいる。

次に、その文化性について検討する。『電影画報』には、主に以下の内容が掲載されていた。

①特輯

他の雑誌と同様、『電影画報』にもいろいろな内容の特輯が組まれた。例えば、四二年一月号「児童映画について」（關於兒童電影）の特輯には、藹人「我々は児童教育映画に期待する」（我們期待着兒童教育的影片）、任情「映画と児童教育」（電影與兒童教育）等が発表され、四三年四月号「五人が語る　私と映画」（我與電影五人談）特輯では、冷歌・任情・朝雲らがそれぞれの映画との関わりを語っている。四三年八月号でも、呉瑛、楊絮などを取り上げた「女性作家の映画観」（女作家的電影観）特輯が組まれている。

②映画や演技に関する知識

例えば、宋培菡「レコードはいかに作られるか」（唱盤是怎樣製造的、四二年八月）、渡部三知男「撮影法ひとわたり」（撮影法淺説、四二年九月）、應飛「演技の研究」（演技的研究、四二年一一月）、また、「映画小論壇」（電影小論壇）に李二「動画映画の価値」（卡通片的價值、四二年一二月）などが載った。その他、沈励夫「北京映画館素描」（北京影院素描、四二年四月）、王熙「上海映画史」（上海電影史、四二年一一月）等、映画の歴史や現状についての紹介や、外国（日本・ドイツ・ソ連・アメリカ）の最新映画情報の紹介も行われている（四一年一一月）。

③脚本

三八年一〇月号「脚本読み物特輯」（脚本讀物特輯）の執筆者には夷馳（疑遅）、小松などの名前が見え、三九年一月号には爵青・夷馳・金音・古丁の作品が発表されている。その他、呂諾「人心」（一幕喜劇、四二年八月）、于琅「郷愁」（歌劇、四三年八月）等もある。脚本の他に、満洲の作家陣が執筆した映画に関するエッセイも数多く掲載されている。古丁「文学と映画」（文學和電影、四二年一月）、爵青「笑いと空想」（笑與空想、四二年一〇月）、小松「映画と小説」（電影與小説、四二年一一月）等である。

④映画評論

映画評論特輯も組まれている。例えば、四二年一一月号「影評特輯」には、吾言「満映最初の同録作品『愛の微笑』を評す」（評満映第一部同時録音作品『愛的微笑』）、四三年三月号には怡之・丁傑他「満洲七名監督總批判」（滿洲七大導演總批判）が掲載されている。その他、俳優についての評論も多く見られる。例えば、黒風「朱石麟論」や小杉勇著・韓護訳「俳優任務を論ず」（演員任務論、四三年五月）、光勲「袁美雲記」（四三年八月）等がある。

また、文芸作家などの映画に対する考えや意見を聞く機会を度々設けている。例えば、「満洲文芸家が満洲映画動向を語る座談会」（満人文藝家満洲電影動向座談会、三九年八月）、「満洲映画に対する意見及び期待」（對於満洲電影的意見及期待、同年）等がある。

⑤国劇（京劇）

映画とは別に、京劇、舞台劇についての文章も見られる。「国劇含英」というコラムが設けられ、その中で京劇についての知識や俳優陣が紹介されている。四二年九月号に掲載された、胡天「言菊朋略伝」（言菊朋略傳）、人瑞「国劇と話劇」（國劇與話劇）等がある。

四二年以降の『電影画報』に関しては、特に評論から以前のような非難記事や激しい論争は消え、誌面が穏やかになったように見える。それについて、編集者は次のように語っている。

これまでの『電影画報』は、その独特の性格によって読者に愛されてきた。（我々は）映画当局を奨励する一方、読者に説明・紹介してきたが、それが徐々に成果を収めてきた。満洲の映画を作る人、観る人の魂が絡み合い、共鳴するだけではなく、同じ理念に歩み寄ったのだ。[144]

四一年一二月以降、映画と戦争の関係や、戦時下の映画の役割などがよく論じられている。対米英戦争が始まった翌年三月号には、満映協会理事長甘粕正彦の文章が掲載された。

映画はふだん心の糧として国民の情操を陶冶したり、思想を純化したりして、主にその娯楽性に力が入れられている。しかし、戦時下、その巧みな写真の効果を操ることによって、宣伝報道の寵児となり、充分に国家威力を宣伝することに活躍することができる。実像を国民に伝えることにより、前線と銃後をつないでいて、文字や絵画よりさらに効果的である。映画は国民全般の協力意識と愛国心を鼓舞する役目を果たしている。[145]

また、大内隆雄も以下のように述べている。

今日、映画に対する要求は文学と同じく、まず英米の社会主義およびその植民地政策、また重慶の社会主義を排除して、皆が憧れている大東亜の道に向かって進まなくてはならない。映画は簡便に直接に大衆に訴える芸術として、思想的な武器となる。したがって、フィルムは銃や弾と同じ使命を負わなければならない。[146]

それに関連して、『電影画報』では、聖戦記念映画や大東亜共栄圏内の映画の紹介も行っている。四二年一二月号の「編後随筆」には、聖戦記念映画「ビルマ戦記」（緬甸戦記）、「空の神兵」（空之神兵）、「南海徴空」（南海徴空）、および満洲文化映画「北辺鎮護」（鎮護北邊）が紹介され、また、同号の特輯「大東亜戦争と共栄圏内の映画」（大東亞戰爭與共榮圈內的電影）に、大内隆雄「日本映画の大陸進出」（日本電影的進入大陸）、杜白雨「満洲映画の革新」（滿洲電影的革新）等が掲載された。とはいっても、『電影画報』全体から見れば、特に代わり映えはせず、相変わらずその娯楽性と文化性は守られていた。四一年一一月号で、編集者は言う。

編集者は編集者の言いたいことを言い、読者は読者の言いたいことを言う。我々の意見をまとめて映画当局に提言して、満洲映画を進めていく。（略）本誌同人は一つの大きな信念を持っている。それは、「満洲文化の発展を促進するために、力を惜しまずに万難を排することだ」[147]

そして、以下のようにも述べる。

この頃の満洲国映画は、民衆を楽しませるというよりも、専ら民衆を啓発するものである。（略）いわゆる啓発とは、知的レベルの低い階級を対象にすべきだろう。そうすれば、映画の題材には主にどのようなものを重んじるべきか、自然にわかるだろう。さらに言えば、民衆啓発の映画が農村に迎え入れられるかどうかが、また大きな問題となる。[148]

満映の映画は、ニュース映画、娯楽映画、啓民映画に分かれていた。啓民映画は、知識レベルの低い農村を対象にし、農村に持っていくべきである。また、農村で民衆を啓発する場合は、以下の一五条の内容（引用は部分）を念頭に入れて欲しいと、作者は言う。

国民の衛生観念を呼び起こし、天に聞き、天に任せ、風水

を盲信する観念を打破する。読書よりお金を蓄える偏見を打破する。入隊を怖がる伝統観念を打破する。農作物や家畜を改良する知識と、国家と国民関係の知識を注入し、人と人の間に互助団結する習慣を吹き込む。（略）さらにあえて言うなら、俳優にはおしゃれできれいな服を脱ぎ捨て、地道に農村に入っていって欲しい。[149]

衛生観念、盲信、読書、農産物や家畜の改良、人間関係などについて啓発するべきだと言う。この主張は、古丁の小説「新生」や、聯盟『藝文志』の「思無邪」に述べられた、いわゆる民度を高めることと一致している。また、俳優たちも農村に入って生活体験して欲しいというのは、延安・重慶・北京などを含めて、中国全土の知識人の共通認識であった。

対象読者が大衆一般である限り、その中には当然、文化消化能力が期待できない人もいる。したがって、以下に指摘されているように、興味を惹き付ける読み物が必要であった。

本誌はただ国民の低級趣味に迎合して短時間興奮させるための興奮剤ではない。同時に、自国の映画界を忘れ、大量に輸入品を運び込んで国民を夢中にさせるものでもない。我々は昔からの使命を貫いている。しかし、我が国民の胃袋は十分健全ではないため、本誌には胃を活性化させるもの――面白い読み物も入れておく。[150]

『電影画報』は、映画についての知識や脚本などを主な内容とする点で大衆小説『麒麟』とは異なるものの、その目的が大衆に文化を普及し、国民の民度を高めることである点は共通していた。

三．「新現実文芸叢書」

新実が編集した「新現実文芸叢書」は、興亜雑誌社から全十二集出版されている。辛嘉の随筆集『草梗集』（一九四四）、小松の短編小説集『苦瓜集』（一九四五）、山丁の短編小説集「郷愁」（一九四二）、外文の詩集『長吟集』（一九四四）、杜白雨の詩集『桜園』（一九四四）、古丁の小説『井原西鶴』（一九四三）の他、以下確認されていないが、安犀の脚本『猟人之家』、也麗の散文集『黄花集』、黄流訳『青苗集』、疑遅の長編小説『松花江畔』、爵青の短編小説集『月蝕』、新実の長編小説『荒火』である。十二人の執筆陣のうち八人までが「芸文志派」メンバーである。

叢書の題名「新現実文芸」が何を意味するのか、今のところはっきりしないが、広告を見ると、その出版意図はある程度わかる。

大東亜戦争の現段階にあたり、芸術各部門が早急に建設の道を邁進している。文学もこの何年間か、各作家の努力で多少実績を積んできた。しかし、我が国の出版界は次々と中国書籍を複製する以外、何をしているのか。新文芸は極めて貧弱である。これが原因で我々は「新現実文芸叢書」を出版することを決意した。これをもって文化建設に貢献するまでは行かないかもしれないが、読者への精神的食糧の供給においては、これは地元産の上等なものだとあえて言える。[151]

「新現実文芸」とは、すなわち新文芸のことのように、この文章からは読み取れる。また、その出版の目的は、貧弱な満洲出版界に地元原産の上等な文学作品を提供することにあった。これは、芸文書房が地元作家の文芸書を出版した目的と一致している。

「芸文志派」の中で、辛嘉は随筆に長けていたが、それまで単行本を出したことはなかった。また、外文も『明明』に歴史叙事詩を発表したことはあったが、単行本の詩集は出版していなかった。その意味で「新現実文芸叢書」に収録されたこの二人の単行本は、「芸文志派」の研究に役立つ資料でもある。

『長吟集』の「序」は外文自らの筆によるもので、長春公学堂、南満中学堂を卒業して北京に行き、そして満洲に戻るという自分史を回顧している。この詩集に収録された作品のほとんどは身近な題材を詠じていて、そこから当時の時代背景と生活状況を垣間見ることができる。例えば、「仲（賢禮）氏の霊前に捧げる」（獻於仲氏之靈前）は、若くして肺病で亡くなった日本の文化人、仲賢禮（木崎龍）との友情を詠っている。その他にも、「贈古丁」「聖戦頌」等がある。

フランスの哲学者モンテーニュの文章も翻訳している（事務会『藝文志』第二輯）辛嘉は、随筆集『草梗集』を出版した。当時、辛嘉は北京在住であった。『草梗集』には、作者の身辺生活がよく描かれている。また、「『国語』停刊以後」（寫在『國語』停刊以後）、「竹林」などのような文章もあり、当時の社会問題に関する史料的な情報が残されている。

第四部のまとめ

『明明』時代の編集出版物には、雑誌『明明』と「城島文庫」がある。

三七年三月に総合雑誌として創刊された『明明』は、第一巻第六期から「満洲国」文壇唯一の漢語文芸誌に切り替えられた。『明明』に与えられた使命は、文壇の建設、翻訳と創作である。文壇建設のために旧文芸との「郷土文芸」に関する論争を展開し、「方

向なき方向」と「書いて刷る」の主張が提起された。翻訳によって、日本をはじめ、魯迅や欧米諸国作家の作品、詩人の著作が紹介された。創作分野では、農村と都市の暗い現実を暴露した小説、歴史を借りて現実を風刺する詩、旧文芸を代表とする社会各方面の旧態依然の現状を鋭く批判する雑文（エッセイ）等が多数掲載されている。そこには翻訳と創作によって文壇を建設しようとする熱意が溢れ、闘争心に満ちていた。『明明』は当時の満洲文壇に希望を与え、「満洲国」に生きる青年たちの励みとなった。その影響は華北にまで及んでいる。なお、民間資本で作られた『明明』には一定の自由が許されており、関東軍に「明朗、興奮」なれと指導されても、ほとんど無視する状態だった。

六人の作家の作品集を出した「城島文庫」は、満洲文壇初ということで、大きな反響をもたらした。ただし、文学だけではなく社会科学各分野の書籍を出すという当初の企画はとうとう実現できなかった。

事務会『藝文志』時代には、満日文化協会の後援により三九年六月に結成された芸文志事務会が、文芸雑誌『藝文志』を立ち上げ、三輯まで刊行した。他に、別輯の『小説家』と、「讀書人連叢」等も出している。

事務会『藝文志』は、「方向なき方向」と「書いて刷る」を引き続き主張し、翻訳と創作に努めた。小説の色調は相変わらず暗いものの、闘うエッセイは消えている。政府の資金援助を受けていたため、旧詩人との唱和による詩文や、建国ロマンを描いた明るい小説なども見られた。それらは、満日文化協会や当局に対する妥協の産物だったと思われる。

一方、別輯『小説家』には、日本人批判と激しい階級闘争をテーマにした小説も掲載された。また、「讀書人連叢」発刊の辞では、「読書人ではない人の指図を断る」と宣言し、当局の文学への抑圧と干渉に抵抗して、文学者の「潔癖さ」と文学の「浄土」を守り、批判的な文学の方向へ進もうとしている。事務会『藝文志』は『明明』以来の進歩性、闘争性を失っていないことをアピールしていたように見える。

芸文志事務会にも数多くの出版計画があったが、古丁の健康隔離、芸文界の主管機構の異動、左翼行動への厳しい取締りなどで実現には至らなかった。

芸文書房時代には、聯盟『藝文志』を含めて多くの出版物が刊行された。芸文書房は、民度の向上と国民の読書生活を養成する目的で、厳選された漢語や日本語による書籍を刊行・販売すると共に、満洲文学の発展を目指して「駱駝叢書」のような地元作家の作品集も出版していた。また、伝統回帰・維持のために、『水滸伝』など、中国の文学史上重要な作品も刊行している。芸文書房は一般の営利目的の出版社とは違い、出版物のオリジナリティー

を重視し、上海書の翻刻などは行わなかった。

聯盟『藝文志』は、四三年一一月に芸文書房から創刊された。戦時中の芸文家組織であった満洲芸文聯盟の機関誌としての『藝文志』の責務は、「聖戦」に協力して、戦意高揚のプロパガンダを行うことで、「民族協和」「勤労増産」「米英撃滅」をモチーフにした作品が多数掲載された。「芸文志派」の作品には、農村・鉱山・漁民を題材にしたものが多く、従来の暗さは一掃され、国策宣伝に走っている。感情の伴わない大袈裟な言葉が目立ち、政治的なスローガンに流されるものも多かった。その一方、「新生」「下郷」のように、政策を宣伝しながら現実を批判した作品も見られる。鬼畜米英文芸の駆逐、東洋伝統の回帰といった風潮に准じ、日本と中国の古典が精力的に紹介され、西洋文学は姿を消す。

その「思無邪」欄の記事から、聯盟『藝文志』には、国策や「聖戦」に協力すると同時に、民度の向上と国民の読書生活養成への努力、そして基礎教育や漢語への関心が見られる。さらに、「康徳文化」の特徴の一つである技術の錬磨を要求された時代にあって、ポスト日本支配の満洲の管理運営を意識していたこともうかがえる。

注

1 「新京文化団体」永見文太郎編『新京案内』、新京案内社、一九三九年、一三四頁。

2 「期」は「号」と同じ。以下同。

3 城島舟礼「身邊雑記」、『月刊満洲』、一九三七年二月、一五一頁。

4 『月刊満洲』一九三七年三月号の「身邊雑記」に、「建國五周年記念として『記念號』を發行し、陸軍記念日の記念事業として、弊社大連支社長須知善一君所蔵にかかる日清・日露役の錦繪展覧會を關東軍新聞班主催の下に新京三中井樓上で開催して戴くこととし、更に、石原莞爾少將が曾て私に示された案を參考として『旅順戰跡廻り兼諸施設理想圖』を本誌に添附した」という記述がある。

5 劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」（回憶《明明》）手稿、一九九五年、九頁。

6 一九〇四年に上海商務印書館より創刊された総合雑誌である。四八年一二月休刊。梁啓超・蔡元培・厳復・魯迅・陳独秀等、著名な思想家や作家の文章を掲載している。

7 劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」、一二頁。原文：过激的言论没啥好处，年代不同，环境不同，壮怀激烈，已经是过去的事儿啦。现在就得往咱们要编的这本杂志上都考虑。

8 古丁「稲川先生和明明」『一知半解集』、七四頁。原文：笑迷先生當時就不表示贊意，我也不表示贊意。於是大家捉摸着誌名…駱駝，綠洲，沙漠，珊瑚……他不表示贊意，因為這種詩意的志名他也會想出許多來的。

9 同前。原文：他從兜里掏出來一張紙，上面寫着創刊號的目…大臣訪問

記，職業婦女訪問記，戀愛新講，東洋的性藥，柳巷探險……沒有一篇文藝。我們的意見，顯然是有着差異了。

10　同前、七四～七五頁。原文：此後，差不多天天見面，所論爭的也無非是『樂土』與『沙漠』，『春藥』與『文藝』，直論爭了三個月之久。然而，終於誕生了：明明。

11　同前、七七頁。原文：他這時才知道滿洲的青年與其要春藥，毋寧要強心劑，與其要柳巷探險，毋寧要窩棚寫照。

12　城島舟礼「身邊雜記」、『月刊滿洲』、前掲、一六八頁。

13　劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」、一五頁。

14　劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」による。

15　「弘報処のある事務官が乃木大将と旅順戦役に関する文章を載せるように指示した、と記憶している」（有印象弘报处一位事务官指定要搞点乃木大将和旅順战役的文章）。劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」、一五頁。

16　『明明』第一巻第二期、四五頁。この懸賞の一等当選者は王秋螢で、その論文は第一巻第五期に掲載されている。王秋螢は作家であるが、満洲文学史の研究も行い、同時期の『大同報』の「文藝」で、「満洲文学史」を連載している。後、大内隆雄が『満洲文学二十年』の中で「満系」文学を論じる際、王秋螢の論文を長く引用している。原文：滿洲的新文學，是有其獨特的史底發展的：我們相信滿洲的新文學史，也決不是一頁白紙，只是沒人把她系統底地記錄下來而已。一　必須保有充分的史料，二　不得歪曲史實，三　必須成為一家之言。

17　作者の趙馨蓀については、奉天在住他の情報は何も提供されていない。

18　「元滿洲の土着民族（旗人）および後に移住してきた民族、また、滿・漢領民族の結合で生まれた種族三者のことを意味する。簡単に言えば、現在の滿洲全体の民族の通称だ」（乃統原爲滿洲土著之民族（旗人）及客籍移住之民族、以及滿漢両族之相結合而生之混合種族三者而言。質言之、亦即滿洲現在居民全体之通称也）。『明明』第一巻第三期、一九三七年五月、一〇頁。

19　「懸賞徵文」『明明』第一巻第三期。原文：欲使我國文化，日益發達，那末日報・雜誌以及教科書和佈告等，究竟是用白話好呢？還是用文言好呢？在促進滿洲國的文化工作上，以為這不能不說是既重且大的問題。

20　「編輯附記」『明明』第一巻第五期、三六頁。原文：可是本刊的意思祇是以爲在滿洲、應該以對待新問題的態度來研究這個問題。我們是以同樣地熱誠來期待着主張用文言的意見的。

21　同前、五九頁。原文：我們希望『無聲』的人，儘管『無聲』下去，可是在心理不防努力研究一下。

22　古丁の「稲川先生和明明」によれば、結局、稲川朝二路が古丁らの考え方に賛成したらしい。その後、稲川は、故郷である日本の水戸に戻り、『明明』の一周年記念号（第三巻第一期）に「故郷を失った人」（失了故鄉的人）を寄稿している。辛嘉は日本訪問時、水戸に稲川を訪ねたことがあり、その様子を「梅林消息」（辛嘉『草梗集』、興亜雑誌社、一九四四年）に記している。

23 劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」、一八頁。

24 史之子（古丁）「論文壇的性格」、『明明』第一巻六期、一九三七年八月、五三頁。原文：我們正在建造着一架『橋』（略）只消這橋建造的堅固，也不難聯繫昨日與明日。

25 朝二路「編輯後記」『明明』第一巻第二期。原文：本誌是以無主旨的為主旨，有時以文藝為本位，有時以學術為本位，有時以興趣為本位，純按著讀者的要求，而和讀者協同編輯，是為至願的。

26 第一部第三章第一節を参照。

27 「編輯雑記」『明明』第一巻第六期、一九三七年八月、七九頁。

28 史之子「夢語り及び唾吐き」（説夢以及唾痰）、『明明』第二巻第四期、一九三八年新年号、一〇頁。原文：小説，在量上至少有一百頁稿紙；在質上至少那主人公會令讀者看在眼裏記在心中。詩歌，在量上至少有三百行；在質上至少不再哼哼嘰嘰。

29 外文「鋳剣」、『明明』第三巻第一期、一九三八年三月、八一頁。原文：沒有麥／沒有米／我們可以拿着刀槍／到楚啦越國去取。

30 同前、八六頁。原文：只有往死裡去逃／陣陣北風挾帶着淒淒的怒號——啊／這是吳國稱霸的前哨／這就是吳國稱霸的前哨。

31 「編集室」『明明』第三巻第一期、一九三八年三月。原文：對歴史給與了再估價，給寫作的人開拓了一條新的作家道，不管外文君的文字，有多少應再加洗練的地方，這種新的嘗試是值得大家來研究研究的。

32 当時の『滿洲映画』（滿文版）の事実上の編集者であった王則は、古丁グループのメンバーの一人であった。古丁や小松などは『滿洲映画』によく寄稿し、姜衍（杜白雨）は滿映の監督となっている。

33 史之子「大作家隨話」、『明明』第一巻第五期。

34 史之子「夢語り及び唾吐き」（説夢以及唾痰）、一〇頁。原文：從『かはや』到『便所』或『水洗便所』之間，也是經過一般社會教育或什麼的，但未必有過『拉屎取締規則』。所以不想導而只管禁的法學士的把戲，若玩的太過火，倒也令我們這些不往痰筒唾痰的人們覺得有些不禁苦笑。

35 百霊「一九三八」、『明明』第二巻四期、一一頁。原文：「明日啊！明日啊！他在自慰：但是，明日會將他送進墳墓去。」

36 明那勇造「北京から新京を望んで」、『月刊滿洲』第一一巻第三号、一九三八年三月、一二三頁。

37 杉村丁甫「城島文庫に寄する」、『月刊滿洲』第一一巻第六号、一九三八年六月、二頁。

38 古丁「後記」『奮飛』月刊滿洲社、一九三八年五月、二頁。原文：事情要回遡到去年。二三人坐在一起，就往往談到印書的話。一直談到今日，但失望的時候總比希望的時候多。

39 同前、三頁。原文：僅僅是三言兩語就決定了城島文庫的刊行。這樣豪爽！而且他還說：『馬上就印罷』

40 城島舟礼「身邊雑記」、『月刊滿洲』第一一巻第三号、一四八頁。

41 古丁「後記」『奮飛』、三頁。

42 百霊『火光』月刊滿洲社、奥付後の頁の広告から。

43 谷実「満洲新文学年表」『満洲新文学史料』開明図書公司、一九四〇年、九頁。

44 中国語は城島舟礼「城島文庫刊行辞」、『明明』第三巻第一期、一九三八年三月。日本語は城島舟礼「『城島文庫』刊行の辭」、『月刊滿洲』第一一巻第六号、三頁。原文：我們的出版界、雖貧絀而浪費、從來無人留意文化之所求為何物、亦不理解萬民之所需在何處、只是使萬民敬遠了「文化」、只是使文化隔絕了萬民。（略）本社為縮短文化與萬民間之距離、乃刊行明明、問世後即蒙國內的識者推許、始有今日的微果。此次更推廣此意，刊行城島文庫。（略）此種計劃、倘只偏重出版者一人則無所依憑、是必須仰賴海內愛真理好實學之士的援助的。

45 原文：一　城島文庫以刊行關於文化各部門之著譯而資宣揚文化啟發民智為其目的　二　城島文庫分為第一部與第二部前者包含關於文學各部門之著譯後者包含關於哲學社會科學自然科學等文學以外文化部門之著譯。

46 城島舟礼「城島文庫刊行辞」、三頁。原文：第一條凡編入城島文庫之著譯品均依本規程支給版税　第二條版税按賣價之百分之十五乃至三十支給之　第五條版税由月刊滿洲社支給之。

47 劉遲（疑遲）「『明明』の思い出」、二三頁。原文：城岛舟礼先生好出个风头好出个名。出「城岛文庫」不花他一分钱，印刷费我们自己付，他只要给说句话，做个保，就用他的名，这他何乐不为！

48 古丁「談一　私淑（文学）」『譚』、一一～一二頁。原文：凡是說「大眾」的時候，大多是在意味者「俗眾」（略）他們在使用者「大眾」這語彙，已經化為曖昧已極的語彙。（略）他們或以「大眾」為窮人，或以「大眾」為「自己似的人」，（略）「你不是為了大眾的」——在他們的口中說出來，並沒曾超越了「你沒寫窮人」，「你是我們永遠看不起的作家」以上的意義。

49 鳥人「爆開的群彈」、『明明』第三巻五期、一九三八年七月、六二頁。

50 同前。

51 呉郎「気軽な創作—小松著『蝙蝠』について」（輕鬆的創作—關於小松『蝙蝠』）、『大同報』、一九三八年七月一二日。原文：我們知道萬民所需要的文化，在今天很明顯面迎着事實的是無限的慾求的人類生活的象徵，所以片上伸說過現代的生活便是從死之中求一點微光而殘喘着，由着多面的需求，已漸失了生命自由的人類，而仍愛着自由的生命，在這種希望的苦夢裡，才真是存着現代生活的魅力，能象徵出這種苦夢的，才真是現代文學的生命與魅力。

52 施非「生存と滅亡—理念を間違えた古丁さんへ」（生存與滅亡—致觀念謬誤的古丁先生）、『大同報』、一九三八年六月八日。原文：關於文藝的創作態度，我們雖然反對濫以文藝為宣傳工具，鬥爭的武器，但是，文藝對時代社會的責任與義務，終是不可忘卻的條件吧？決不是為了個人的心情，而絕望人生咒罵人生，甚而毀滅人生！

53 古丁「自序」『奮飛』。

54 爵青「城島文庫の刊行について」（關於城島文庫的刊行）、『明明』第三巻五期、六四頁。原文：世間的功利主義者往往對事物只要求終局的效

果而忽略過程的手段。在文藝界裡也有對文藝批下望塵莫及的水準，而不稍顧及文藝如何會升及禦定水準的批評家，這使筆者屢屢想到是功利主義式的批評家。

55 同前。

56 関東軍新聞班柴野少佐「希望」、『明明』第二巻第四期、一九三八年一月、五頁。原文：在滿洲的日滿青年啊，要更明朗快活一些。（特別是滿人青年，要興奮起來。）新的文化運動必須建築在明朗性和積極性上。對於滿人各位特別地待望着。

57 稲川朝二路「故郷を失った人」（失了故鄉的人）、『明明』第三巻第一期、一九三八年三月、六五頁。原文：為政者是有使這社會明朗化的必要，也好使滿洲的青年們呼吸澄清的空氣，倘然的話，則青年們自然會明朗起來的罷。我所以這樣不平而鳴，也許因為我是失了故鄉的孤獨者的緣故吧。

58 杉村勇造「満洲文化の追憶」杉村棟編『八十路―杉村勇造遺稿集―』文化印刷株式会社、一九八〇年、一四〇～一四二頁。

59 陳因「漫筆」、『文選』第二輯、一九四〇年八月、三六三頁。原文：去年有人稱為出版年，廣告大興，今年有說，因為紙荒，印刷費，補助費又只給藝文志一家。

60 「宝篋印陀羅尼経」は、北宋開宝八年、吳越国王錢俶刻本《一切如來心秘全身舍利寶篋印陀羅尼經》影印本であり、現在は内蒙古図書館に収蔵されている。上巻には「甲戌端午敬贈杉村先生惠存」の記録などがあり、「陳邦直」と「杉村」の捺印がある。

61 『明明』第三巻第一期に陳英三の筆名で「国劇及びその音楽―放送原稿選録」（関於國劇及音楽―節録放送原稿）、一九三八年九月号に少虬の筆名で「囲碁について」（閑話囲碁）と「囲碁天才家呉清源について」（関於囲棋天才家呉清源）が発表されている。

62 陳因「漫筆」、三六二頁。原文：滿洲自從有了同人組織，為充實力量，廣飾（ママ）招攬，於是前朝遺老，可以奉戴，新國遺少，拉之入會。

63 城島舟礼「藝文志序」『藝文志』第一輯、一九三九年六月。原文：一國倘無一國的藝文，則不足以矜誇於世界，一代倘無一代的藝文家，則不堪以銘刻於永劫。我國肇建，於茲八載，政治的經濟的社會的諸部門，無不突飛猛晉，日臻至善最高的階段，唯獨文化的部門，雖有末梢的滋長，但仍無根幹的拓展。

64 同前。原文：本志願意鳩合全國的有筆者，不存派閥之見，不留小我之識，共同來分擔這任務的。藝文之事，端在寫與印；其所寫，無間天地之大，芝麻之小，倘有真意，自可永傳；其所印，無論滄海之巨，粟粒之細，倘存善根，當能久遠。

65 岡田益吉著・滕（外文）訳「満洲の文学者への希望」（所望於滿洲文學者）、前掲書。原文：對於滿洲文學，我一味地，追求浪漫主義。滿洲國是夢底設計。只是，立於其上的人，卻沒有給他以夢。（略）東亞新秩序底建設也是從夢往夢底進行。參加這進行者是非熱情和空想之子不可。（略）我們長久之間，只被教示著現實，實驗，驗，生活，悲慘，醜惡，

凡俗，虛偽，懷疑，……等為人生。都以為若非寫實主義既不為文學。並且靈魂被碾碎，空想被拋入豬圈，美被投入於當舖底倉庫裡。這種歪曲的人，是沒有談文學的資格的。過去的文學只是殺人的。

66 「後記」『藝文志』第一輯、二一六頁。原文：A說：這些不能忘情於文學的人的作品，經過許多折難，終於集成了這冊東西，我們總有些彷彿喜悅似的喜悅。B說：我懷疑這冊東西到底能有怎樣的價值，它好像一塊不知名的新種礦石，此刻還無由推曉其對人類的效能。C說：這冊東西簡直近於無聊，除了作為幾個人的自慰以外是什麼也不當的。這些誠懇的自白，也許都各有其真實性，然而藝文志是仍得按預定去出版的。只好讓歷史去解釋藝文志的一切疑問了。

67 顧盈「寫與印主義」『文最』文選刊行会、一九四〇年、六頁。原文：在文字上也可能發現其不同處，比如明明里是充溢著的熱情與朝氣，也顯現着鬥爭的精神的：在藝文志裡是缺少了這些。假如明明的裝飾是短打扮，則藝文志該是已穿上了長衫，有的是悠閒與風雅，（略）。

68 大内隆雄『滿洲文學二十年』国民画報社、一九四四年、三五〇頁。

69 山丁「鎮集」、『文選』第二輯、一九四〇年一〇月、七七頁。原文：尹鄉長唇邊的弧線上下抽動着，沒有話，只微弱聽到一點音「我錯了，我錯了——」。

70 原文：我們廉價的出賣血汗／沒人哀也不要人惋／悠長的日子——將／大地變成了自己的。

71 吳郎「五月之耕　外二編」、『文選』第二輯、一七三～一七四頁。原文：這屠場——一本屈恥的舊賬／檻里曾割宰了不可數的生靈／死之神並不猙獰／我們不當戰栗了我們。

72 吳郎「気軽な創作—小松著『蝙蝠』について」（輕鬆的創作—關於小松『蝙蝠』）、『大同報』、前揭。原文：能象徵出這種苦夢的，才真是現代文學的生命與魅力。

73 古丁「偶感偶記並余談」、『新青年』第六四号、一九三七年一〇月、一八頁。原文：不寫讓人看了起好感和美感的東西，不寫讓人讀了莫名其妙的東西，不寫讓人讀了樂觀的東西。

74 励行健「桃色輪郭」、『藝文志』第二輯、一五二頁。原文：我需要光明呵，光明快給我把太陽帶來了。

75 一九三八年七月二九日から八月一一日にかけて、「満洲国」東南端の張鼓峰で発生したソ連との国境紛争である。ソ連側ではハサン湖事件と呼ばれる。「満洲国」のために戦ったのは主に朝鮮軍第一九師団である。

76 李夢周「春之復活」、『藝文志』第二輯、一五五頁。原文：一想到你可愛的地方，就把這喜悅變成怨恨：怨恨着敵人。——因為我們的別離，是敵人造成的呀！有的時候，把這喜悅，劃入將來的勝利的憧憬裡。我安然入睡了！在夢裡，我們還咬着嘴唇微笑哪！

77 同前、一六二頁。原文：我有血，我有肉，我有家，我也有親人，我不能辜負了我的血肉，我是個滿洲男兒。

78 同前、一六四頁。原文：如果在國境線上，我們不來作正當防衛的話，將來，我們的末運，不是和這個老俄國人一樣嗎？赤色的妖氛，是時時的

向我們這純潔的地方浸染啊！

79 同前、一六五頁。原文：該對他有些同情吧！雖然是相異國度的人，然而站在統一戰線的人，使更應該融洽在一起啊！

80 疑遲「祈祷」、『藝文志』第一輯、九三頁。原文：父啊！祈求你降下你的權柄，施展你的威力，叫一切背反我主的人類，全歸滅亡。

81 同前。原文：忽然明白了一些什麽似的，便又急遽地從這屋裡悄然退出。

82 石軍「窗」、『藝文志』第一輯、五七～七一頁。

83 石軍「麦秋」、『藝文志』第二輯、六七～九五頁。

84 老穆「馬成駿」、『藝文志』第二輯、一二五～一三六頁。

85 君頤「春底事蹟」、『藝文志』第一輯、一〇九～一一五頁。

86 杜白雨「金泰棧」、『藝文志』第三輯、三四六～三五四頁。

87 王則「列女伝」、『藝文志』第一輯、四七～五六頁。

88 君頤「金糸籠」、『藝文志』第二輯、一七三～一九四頁。

89 爵青「盪兒歸來的日子」、『藝文志』第一輯、三九頁。原文：舊的沒有死，我們像這盪兒一樣再走出到廣漠的人海裡去吧！

90 爵青「廢墟之書」、『藝文志』第二輯、一〇〇頁。原文：在被折毀了的父祖的卍字迴廊的舊跡裡，拯着一點點可憐的情熱和希望，急造了沒有地基和筋骨的華麗的小屋，當我們這工作完成而要離開的時候，回首看來，這小屋卻比父祖的卍字迴廊還貧弱，還醜惡，使我們在工作之汗喘未乾未息的時候便感到新的廢墟之悲哀了。

91 同前、一〇七頁。原文：在被現實遺棄了的時候，文學往往便成為強心劑而被賞用的；在文學的疇域裡，我們看得見如星一般多的作家和愛好者，滿可以明白為築起這新的廢墟，青年人如何的呈現着寶貴的犧牲了。

92 浅見淵「満人作家会見記」『文學と大陸』図書研究社、一九四二年、一六頁。

93 光「論劉爵青的創作」陳因編『満洲作家論集』實業印書館、一九四三年、三四〇頁。原文：作者表現的東西都是一種傾頹的廢墟，他理解不到載着廢墟里會萌芽新的生活。我們現在雖然生活在這沒落的時期，同時又是再生的時期，但作者對於這一點，卻完全犯了短視的毛病，並不會透視到光明的彼岸。

94 古丁「『暗さ』に就いて」、『藝文』滿洲文芸春秋社、一九四四年八月、五一頁。

95 原文：為解救滿洲出版界的貧絀與讀書人之消沉，而發行定價低廉取材廣泛之小型文庫、以科學精神啟發知識為目標、故內容不僅限於文學、哲學、舉凡天文地理、人間各種問題、無不譯述刊行、以資補救滿洲出版界之空白時代。為謀易於攜帶起見、版型精小美麗、裝幀高雅、每月刊行三冊、每冊預定三萬字。

96 田兵「江上之秋」、『小説家』芸文志事務会、一九四〇年、一四二頁。原文：在那半乾了葉子的長長的蘆草里撐出來一支小船有四五個人，我一想決不是好人，就是好人也不算什麽，誰叫他在禁漁區裡劃走，如斯便令達比托夫與綏也夫斯基開了火，打死了三個下剩全逃了（略）把船開到那裡細看的時候，是幾個持有瓦刀，泥板的瓦匠，還有幾個破舊的鋪蓋卷，

鮮血滿染著船板。死是已竟死了。「喲！瓦匠為什麼說是胡匪呢？」「這你不知道，這個地方胡匪與人民從來就是不分，況且他們往往是化裝。」

97 同前、一五〇頁。原文：但鐵雄卻笑了，笑這些愚蠢的傢伙真是如釀蜜的蜂子，吐絲的蠶一樣的忠實。不顧仇恨只顧他們的享樂而消費自己的智與力，一天天的由那細小的煙斗孔裡往裡走，吐出的煙氣便是血肉變成的氣體，一天天的減縮。從月末起官家要接受了，他們真是官家的魚肉呵。以後消費他們生命之火與藥都打我這供給，他們不曉得吧？

98 同前、一五四頁。原文：這一次他的買賣又要由官方收買依委來經營，他更想到有財可發，快樂極了。（略）在宋的方面，一聽是鐵雄來了樂的要跳起來，也是以為是財神爺來了。想到前幾天給鐵雄送商品券時他的話，想到他的家具，想到他的將來，將來一片大紅的雲彩擺在他的胸前，自己想陶醉了似的往前跑。這一次把鐵雄灌醉，把他送到賽粉糰床上都在他的計劃之中，他很高興，高興自己是成功了。

99 沫南「某城某夜」、『小説家』、二二二頁。原文：惠明在沉思中一股無名的怒火燃燒了他。他似乎又聽見礦山的地雷在轟炸了，夾雜在那每一次的大爆音中，差不多是常有死亡和重傷的礦工。那些鮮血，呻吟，掙扎呼叫，礦工妻女們的哀號，繼續生存的失望。陷笑和怨恨，欺騙和激怒，構成了一幅現實的人間地獄的繪圖。

100 同前、二二七～二二八頁。原文：今天晚上我像在做夢，不過一個廢物，一個寄生蟲子，用這柄刀終止了他那無賴的生存，這卻不是夢！（略）我今夜的舉動，完全是一個錯誤。我知道地上的寄生蟲子是殺不盡的。

101 爵青「輯後」、『小説家』、二頁。原文：滿洲的文學，（略）作品總是低調的。這小集子的低調，也是不可掩飾的事實。我們不相信低調的文學能有益於讀者，然而我們卻相信低調的文學卻無害於讀者。當別人泰然自若地還營營於無益而有害的事情時，竟能將這低調的作品遞給讀者，我們的確是感到了神魔的，純粹的，無邊的幸福了。（略）我們只是小心翼翼地要使文學不害人。

102 「讀書人連叢刊行辭」『讀書人』、一九四〇年七月、一頁。原文：「讀書人連叢」並非我們的私產，但也絕不容許並非讀書人的人手舞足蹈，這是我們應有的潔癖。「讀書人連叢」也並非我們的驕子，但也決不信從並非讀書人的人的七嘴八舌，這是我們應有的執拗。我們潔癖且執拗地拒絕並非讀書人的人的高談闊論，我們卻願意誠懇且虛心地接受是讀書人的人的片言只語。

103 「林房雄・古丁対談」、『藝文』、一九四二年四月、一五〇～一五一頁。

104 呉郎「一年来の文学界」、『藝文志』第三期、一九四四年一月。原文：關於純文藝月刊雜誌之發刊，已成為多年來，滿洲文學界共同的要望，但在今日卻已作為兌現的事實，這種足可使我們喜悅的事情，無拘於哪一方來說，該是建文十餘年來，一筆最大的收穫吧。

105 原文：此次藝文聯盟，為謀藝文之普及，而使藝文家之創作活動得以旺盛進行，並藉助後進之指導育成，乃發行雜誌藝文志。

106 市川敏「藝文志発刊祝詞」、『藝文志』創刊号、一九四三年一一月、一

頁。原文：一為舉藝文之總力，協力聖戰，即昂揚戰爭意識，潤澤戰時生活，俾國民得以竭誠奉公，增強戰力而寄予於親邦之完遂戰是也。一為創造新東亞藝文，即驅逐美英頹敗藝文，從新創造基於東洋道義而能像征東亞復興，顯現肇國精神之藝文是也。

107 原文：直接與本誌發生關係的藝文聯盟，更以推進我國藝文的見地，援助本刊（略）我們今後絕對要不辜負關係方面的期望努力做下去。

108 疑遲「曙」、『藝文志』第九期、一九四四年七月、八一～八二頁。原文：你他媽真也渾蛋，這嗜全國都高喊着增產，你不幫助我們增產唄，還他媽禍害人！金昇！你摸你胸膛想想，你這對得起誰！

109 疑遲「望」、『藝文志』第一〇期、一九四四年八月、九一頁。原文：敵人美英反攻該多緊！不是他們死，就是我們活。人家日本的婦女們，說是都和男人一樣地進工廠，咱們滿洲的老娘們，多干點活還許說違屈！

110 同前、一〇五頁。原文：在咱們滿洲國，又是如今這時局下，莊稼人一點不低氣！為國為家為自己，這天道比啥都強！

111 同前、九八頁。原文：自己現在早已過了荷槍護國的年齡，作為時局下槍後的中年人以身報國的表現，除了獻身於農作增產線上是沒有再為適當的方法。

112 疑遲「明」、『藝文志』第一一期、一九四四年九月、九三頁。原文：當兵是國民一種光榮的任務，捍衛國家，鎮護鄉土，神聖而崇高的青年人的天賦，該是多麼令人羨慕！（略）謀求解放東亞十億民族的大東亞戰爭當於決戰的今日，自己竟放下了槍支回歸故園，於是恨一身將無用武之地之餘，便有着無限的慚愧。

113 同前、一〇三頁。原文：我沒有兒女，老伴也早故去，雞蛋是我的幾隻母雞下的，特地給你們拿來，晚上沒事兒，煮着吃吧！（略）你們成天打八路，也夠辛苦嘍，這是我這的一點小意思。

114 小松「礦山旅館」、『藝文志』第八期、一九四四年六月、一〇四頁。原文：現在家裡時不愁吃，不愁穿，配給的什麼都有。

115 同前、一一一頁。原文：買賣既然沒有希望，作一個礦工，是再好沒有了。國家獎勵，礦山也優待，報紙上也總誇獎，称礦工是增產戰士，在全國皆兵，大東亞總力戰下，如果這時候不拿定主意，真是對不起祖先，（略）。

116 外文「我作了漁民」、『藝文志』第一〇期、七二頁。原文：現在各方面都噪噪增產，你對于這增產應留心注意！留心我們應增什麼產？注意你應從事那一種職業？

117 同前。原文：自今日以後，無論何時，無論何地，凡是人類，皆應為國為民，竭力生產。

118 同前、八〇頁。原文：賣貨是件困難的事。可是政府無微不至都給我們想好了。鮮貨有組合，乾貨有會社來收買，各色都有公定的價格。沒有競爭，都很平和地公平地一包一包用車拉到站上去。

119 同前、七一頁。原文：筆杆子這勞什子于我確實耍膩了。

120 同前、八〇頁。原文：不過，芸文書房以及藝文志和幾位友人，和我在精神上是難以割斷的。

121 同前。原文：這也不過向挂念我底友人，告訴他：我作了漁民而已。

122 『藝文志』第七期、一九四四年五月、一四頁。原文：煌煌亞細亞興廢在今朝的大詔／一二・八——這世紀不滅東洋史上的佳辰／天討你這萬暴的美英／進擊　進擊　再進擊／護衛亞細亞，代代世世有英雄・（略）。（呉郎「鷹揚吧！我們的亞細亞」）

123 同前、一六頁。原文：一鋤一鋤種豆得豆／泥塘變成了千頃良田／一粒豆是一粒彈丸／擊滅亞細亞的敵人美英／我們的沃土無邊／子孫的幸福萬萬年（略）。（春明「開拓村」）

124 同前、一七～一八頁。原文：炭坑夫們／大時代的英雄／赤腿裸背／第二線的超人部隊（略）你偉大的煤炭／蘊藏了力／熱與光明／是神的法律／為了勝利／為了幸福／東亞十億／同向你致禮（略）。（小松「礦山行」）

125 爵青「西歐的知性的破滅」、『藝文志』第四期、一九四四年一月、四八頁。原文：如果我們能冷眼來觀察這兩種思想，基里羅夫的人神思想固屬無論，就是輒則使人誤為愛國主義的謝特夫的國民主義，其中也未含有人類生活之最大根底的鄉土，而完全是以個人價值出發的近代精神的產物。其實生下自身之血肉的是父祖，養育這血肉的是鄉土，若有根源上來追求個人價值，無論形式與內容如何是不能離開鄉土愛和國家愛的。

126 同前、五一頁。原文：首先就由西歐接受了龐雜的知性，在生活裡攝入了科學的探求，哲學，美學和客觀的批判，而忘掉了產生人類個性的該是傳統，同時也忘掉了人類個性創造傳統。

127 同前、五二～五三頁。原文：但是我們可以籍此知道他追求人間像的歷程，假設所謂不實的要素和惡靈的要素可以解釋為抽象的理性認識所把握的真善美，則陀斯朵伊夫斯基所追求的人間像，是在理性認識和熱情的對岸，換言之，就是超過了這二者的宇宙的調和。（略）東洋人過去曾在自然混沌和理性的秩序之間，追求過完全的統一曾在動和靜止之間，追求過絕對的一致，但是進入近代以還，這精神一旦受過西歐的知性的洗滌，這東洋人的偉大的協調便完全被破壞了。

128 劉建輝「『満洲浪曼』の周辺—日本浪曼派及び『藝文志』派との関係を中心に」『満洲浪曼』別巻『「満洲浪曼」研究』ゆまに書房、二〇〇三年、一四二頁。

129 原文：在這文藝的轉換期之中，在作家尚未體得大修練之前，吾人以為報道文藝，乃是一箇新的文體。

130 丁（古丁）「報道文藝的提倡」、『藝文志』第九期、四～五頁。原文：一箇問題是文藝作品必須要真。（略）另一箇問題，是「行家」和「外行」都可以寫偉大的作品。

131 古丁「萬葉源氏と載道言志②」（『満洲日日新聞』一九四二年一二月二・三日）大村益夫・布袋敏博編『旧「満洲」文学関係資料（一）—『満洲日日新聞』『京城日報』—』、二〇〇〇年、一九九頁。

132 同前。

133 古丁「満系随筆集　藝文日新」（『満洲日日新聞』一九四二年一月五日）『旧満洲文学関係資料（一）』、一七一頁。

134 辛嘉『草梗集』興亜雑誌社、一九四四年、一六八～一六九頁。原文：

中國人一面固然把文學看成載道，或志怪的玩藝兒，一面也有着在昏暗的歷史中發現光明的一派。從屈原到杜甫到五四以後出現了的魯迅，便是這一派。他們所背負的運命的乖厲並不減於今日的人們，而他們絕不敗給這惡運，歌唱出偉大的詩篇，安慰了後代子孫，留下了東洋文學的財富。文學者是應從這裡學取他寫作的榜樣的。

135 趙孟原編『魯迅集』は一九四三年に、小田岳夫著・外文訳『魯迅伝』は一九四一年に、いずれも芸文書房から出版され、『魯迅伝』はその後三巻まで刊行されている。

136 新聞の「出版」に当たる字が見えないが、筆者の推測で入れた。

137 「發刊辭」『麒麟』創刊号、一九四一年六月、三一頁。原文：麒麟是為慰安四千萬民眾及含養讀者情操而發行的，（略）也相信國民一定會把麒麟看作是"自己的雜誌"，我們很願意本諸良知良能，供獻所有的勞力，為讀者爭取這刊物的內容。

138 「芸文評論」、『民生』一九四三年八月号、八頁。原文：稿費問題，在滿洲還不算太好，據說華北作品送到滿洲來，連武俠都是十五塊錢一千字，可是滿洲的土產則純文藝僅售五元錢，願意安在，我們不明白，許是滿洲土產文章不需要坐火車的緣故！麒麟長篇，非北京貨一概不收。

139 「麒麟新年号予告」『麒麟』一九四二年一二月号。

140 同前。

141 『麒麟』一九四三年一月号、一二六頁。原文：是指小說，詩歌和戲劇等範圍而言。文學有廣義和狹義兩種定義，狹義的定義是專指訴諸於理想和感情的美的作品，那也就是「純文學」。

142 劉漢「五才・三枚（五歲・三枚）」、『滿洲映画』一九四一年一二月号、二一〇頁。原文：四個時代，四個風格。江楓時代，雖然像一本高貴的Pamphlet但，在那時候；別個刊物的編輯者，只知用鉛條代替花邊的時候，滿洲映畫已經給國人一個新的視感了。至，質與量的低與少，事屬拓荒，未便苛責。王則時代，顯然的又前進一步，不僅評，介，談什樣雜要，要要可觀；且培植了許多"腳本讀物"。到現在，我還記憶着爵青的港之王者，與疑遲的天涯芳草。孟原時代，可謂滿洲映畫的黃金時代，佔有了量多，質好，價廉的三大優點。到在共鳴時代，滿洲映畫的發行所已經改為滿洲雜誌社，不久，志名也改為了電影畫報。這一大變革，賜給孩子的影響是什麼？……但，揣滿了苦衷的編者，的確還在所給的紙張裡努力；還在所給的方針下奮鬥。

143 韓護「私と『電影画報』」（我和電影畫報）、『滿洲映画』、同前、二一頁。原文：「滿洲映畫」沒有陷入上海電影雜誌的色情情調中，不但如此而已，還能發掘出不少的「電影文學」之類的東西，以獨特的內容與外型，獲得到廣大的讀者層。

144 「編輯後記」『電影画報』一九四二年一〇月号、満映協会理事長甘粕正彦著・李甲寰訳「戦争と映画（戦争和電影）」『電影画報』一九四二年三月号、扉。原文：過去的電影畫報，以它獨特的性格，順利的被讀者愛護，一方對電影製作當局加以督勵，另一方對讀者也以介紹和解說，漸漸的收到成果，是滿洲電影製作者，電影觀者，靈魂上攪到一起，不但共

鳴，而且走到同一的理念上去。

145　滿映協会理事長甘粕正彦著・李甲寰訳「戦争と映画」（戦争和電影）、『電影画報』前揭、扉。原文：電影在平時，固然是一種國民的心糧，陶冶情操純化思想，以致力於娛樂的魅力為主體，但是若是在戰時，由於巧妙的操縱它的寫實效果，由於認它做宣傳報導的寵兒而使之充分的活躍去宣傳國家的威力，把實像比文字比繪畫更深刻的傳達給國民，藉使前線和強後相結合，電影是負着，使國民全般協力的覺悟和愛國的觀念旺盛的任務的。

146　大内隆雄「戦時下映画の使命」（戰時下電影的使命）、『電影画報』一九四二年四月号、四〇頁。原文：現在所要求的電影和現在要求的文學相同，必須先排除，克服那英美的社會主義及他們的植民地政策，還有重慶的社會主義，大家往新的大東亞之途前進。電影是一種最簡易而可訴向大眾的藝術：思想的武器。所以，膠片也是要負有着槍彈同樣的使命。

147　「編者獨語」『電影画報』一九四一年一一月号。原文：編者說，編者想說的話，讀者說，讀者想說的話，綜合我們的意見，向電影當局進言，以期使滿洲電影得以進。（略）本刊同人，有一個最大的信念，就是：「為了促進滿洲的文化，不惜排除萬難」

148　原文：近日滿洲國的電影，與其說娛民，倒不如專為啟民，（略）所謂啟民的工作是不是應當指向在知識低級分子們身上，那們說電影所取的題材應以什麼為對象，自然可以明白，然而補充一句，啟民的影片能不能進到農村去，又是一個重大問題。

149　野鶴「我々の映画についての夢話」（關於俺們電影的夢話）、『電影画報』一九四一年一二月号、扉。原文：喚起國民衛生觀念打破聽天由天迷信神佛風水的觀念。打破寧肯攢錢，不肯讀書的偏見。破除怕當兵的傳統觀念。灌輸改良農作物改良畜產的知識灌輸國家與國民間關係的知識，和人與人間的互助團結的美風。（略）我更大膽的說一句，請演員們先脫去漂亮時髦的服飾，腳踏實地到農村去。

150　「編後随筆」『電影画報』一九四二年一二月号。原文：本刊不徒用一付興奮劑使國民們僅發生須臾的低級趣味的昂溢；同時便不願意忘掉自家門裡的電影界，而搬入大量的輸入品，使國民竟耽於忘我之境的；我們是堅強持着一貫的使命。雖然，因了我們底國民之胃口尚未充分健全，本刊裡也曾加入一些「胃活」——趣味讀物。

151　杜白雨『櫻園』興亜雑誌社、一九四四年。原文：時逢大東亞戰爭的現階段，藝術的各部門都在早極的往建設路上邁進。我們的文學在近幾年中，由於各作家的努力，多少有些成績可觀了，不過細看我國的出版界，除了連串憧（ママ）文的中國書籍而外還有什麼？新文藝簡直貧弱極了。鑑於此，我們決定出版「新現實文藝叢書」，不敢說將文化有什麼建設但對讀者精神食糧的供給敢說這是此地的上等食糧。